

---

# とある科学の力量変換（クレイドル）

玉露飴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の力量変換クレイドル

### 【Zコード】

Z6290Z

### 【作者名】

玉露飴

### 【あらすじ】

軍隊をも軽く屠る事が出来るチカラ、『超能力』。

それは、能力者揃いの学園都市でも数少ないLeve15の特徴。

力を【反射】する少年と力を【吸収】する少女が出会う時、物語は始まる。

つとカツコつけたは割には作者は文才が限りなくゼロなので、それでも良いと言う方はどうぞ^\_^；

## オリキャラの説明（前書き）

いつも、玉露飴と申すものです。

今回は他の作者様が投稿している『ある～』系列に影響されて自分も書きくなつて投稿してしまつた次第です……。

さて、この小説は基本は原作の通りに進めていきたいのですが、もしかしたらオリジナルも含まれるやもしけれませぬ。

いや、含みます 反語

それでも良いといつ心が太平洋並みに広大な読者様はビッグ、よろしくお願いします。

【更新する可能性あり】

## オリキヤラの説明

名前：湾 千五百（みづくま ちいほ）

性別：女

身長：151 cm

年齢：13歳（現在）

能力名：力量変換<sup>クレイドル</sup>

能力詳細：

自分自身が受けたエネルギーを全て吸収、変換する能力。エネルギーとは物理学的な仕事をなし得る諸量—（運動エネルギー・位置エネルギー・など）の総称。しかし熱、光、電磁気、質量もエネルギーの一形態である。受けたエネルギーは全て変換されるため、自身にはダメージは及ばない。

例：車に撥ねられたとしても運動エネルギーなどとして変換されたため自身は無傷。

受けたエネルギーは全て自分だけの現実<sup>パーソナルリアリティ</sup>により、地球上には存在しない超高エネルギー体 ダークエネルギー に変換される。ダークエネルギー は超高エネルギーであり、衝突された物体は量子レベルで分解、量子分解する。

ここでのダークエネルギーは現実にあるダークエネルギーとは違ひ、あくまで正体不明のエネルギーである。

現在状況：

過去の事件の影響で精神安定剤を服用しているが、それ以外は他の学生となんら変わりない。その能力の特異性故に、幼少時に研究所での一方通行に並ぶ研究対象であった。

> i 1 1 8 0 4 — 1 5 7 0 <

色を付けられなくてスイマセン(――・) <

名前：深泉 水曜 (ふかいすみ すてう)

性別：女

身長：160 cm

能力名：幻影分身  
(イリュージョン)

能力詳細：

自分とそつくりな像を作り、それを動かす能力。

トランキライザー  
偏光能力の一種で、彼女は自分の周りに相手の視線を複数結ばせることで分身としている。しかし、自分そつくりな像を作り、さらに動かすという動作をとらせるには空間移動程ではないがそれなりに演算が複雑であり、水曜は今のところ4体が限界。

彼女の能力は自分の周りに複数の像をつくるだけなので、相手からだと本体も含んで見えてしまう。それでも分身の特徴故か、見分

けるのは難しい。

現在状況：

力量変換との戦闘中、Level 2からLevel 3へと進化したことにより、念願だつた常盤台中学への入学条件をクリアする。現在、力量変換こと千五百が手回しに奔走中。

挿絵：

現在思案中 . . .

名前：瀬川 一筆（せがわ ひとつで）

性別：男

身長：175 cm

年齢：30～40歳

現在状況：

力量変換に関わる『実験』を指示・監修している研究員。愛煙家で、研究の合間合間でタバコを吸っている様子。彼女募集中。

挿絵：

おっさんの挿絵は需要あるのだろうか…

名前：如月 翼（きさらぎ たすく）

性別：男

年齢：17歳

能力名：風使いエアロシミューティ

現在状況：

暗部組織『テキスト』のリーダー。研究所に拾われるまではパツとしない仕事を受け持っていたらしい。加佐子や斗近・工セ侍など、キャラが濃いメンバー相手に手を焼いている。苦労症。研究所に依頼された、研究所襲撃作戦での力量変換との戦闘で左腕を切り取られ、その短い命を絶つ。

名前：愛沼 加佐子（あいぬま かさね）

性別：女

年齢：17歳

能力名：発火能力パイロキネシス

現在状況：

暗部組織『テキスト』に所属。戦闘狂で、よく能力者相手に勝負を仕掛けている。翼をからかつて反応を楽しんでいる張本人。研究所

に依頼された、研究所襲撃作戦での力量変換との戦闘中、その戦力の差から戦意を喪失。最後に千五百に攻撃するも、反撃されて死亡した。

名前：雛山 斗近（ひなやま とちか）

性別：女

年齢：15歳

能力名：電撃使い  
エレクトロマスター

現在状況：

暗部組織『テキスト』に所属。先輩3人に對しタメ口で会話する。普段はおだやかな性格で、目を離すとよく日光を浴びてのほほんとしている。リーダーである翼に好意を抱いていたが、研究所に依頼された、研究所襲撃作戦での力量変換との戦闘中、翼の左腕を切られたことにより激昂。本来のレベル以上の攻撃を力量変換に浴びせるが、反撃を受けて死亡。翼への淡い思いを抱いたまま、15歳という短い人生に幕を下ろした。

名前：不明（エセ侍）

性別：男

年齢：16歳

能力名：水流<sub>スマ</sub>操作

現在状況：

暗部組織『テキスト』に所属。常に和服を着ており、普段の学校へもそれで登校している模様。あまり喋ろうとはしないが、話しかけられたらちゃんと答える。仕事の時だけ帯刀するが、未だ刀を抜いたことは無い。研究所から依頼された研究所襲撃作戦での途中、力量変換の不意打ちにより死亡した。

## オリキャラの説明（後書き）

他の作者様のキャラクターと被らないように努力しておりますが、何分作品数が多いためどうしても表現が被ってしまうかもしだせん。

その場合はこの玉露飴に「」連絡ください。

主人公の説明に対する質問もお待ちしております m(—\_—)m

## 第1話 力量変換と一方通行の日常（前書き）

まさかの連投ですw

しかも早速のオリジナルのストーリー。

時間軸的には原作より数年前のお話です。

それでわざわざ。

## 第1話 力量変換と一方通行の日常

### 学園都市

そこは「記憶術」だの「暗記術」という名目で超能力研究、即ち「脳の開発」を行っている都市。

その目的は、「人間を超えた身体を手にすること」で神様の答えにたどりつくことだという。その為に人為的に生徒の脳にある種の障害を起こさせ、通常の人間と違う『才能ある人間』に身体をつくりかえる。

東京西部を一気に開発して作り出され、一部を神奈川や埼玉に及ばせながら東京都の中央三分の一を円形に占めている。

総人口は二三〇万人弱。その八割は学生である。内部は二三の学区に分かれているらしい。

開発以外の科学技術もぶつ飛んでおり、最先端の技術を実験的に実用化・運用しているため、どうやら外よりも数十年分ぐらいう文明が進んでるらしい。

警備は非常に厳重で、交通の遮断に加えて周囲が高さ5メートル・厚さ3メートルの壁で囲まれている上に、街全体を三機の監視衛星が常に宇宙から監視している。

『それでは力量変換、準備はいいかい?』

「はい。ボクは大丈夫です」

そんな半分刑務所のような都市の、とある学区内にある研究所の地下実験室に、ボクはいた。

地下実験室といつても地上から何百メートルも下に存在しており、そんなところで行う実験などそう多くは無い。

【地上でやるとまずい実験】か、【地上にばれるとまずい実験】の一いつだ。まあ、今のボクに対して行われている実験は、それのどちらにも当たる。

それは、ボクが時間割カリキュラムりで【超能力】に目覚めてからだった。

その途端に今までいたクラスから特別クラスへとボクは放り込まれた。そのクラスに生徒はもう一人いた。どうやらその子もボクと同じく【超能力】に目覚めたらここに連れてこられたらしい。

一つの狭い教室には、机が二つ置いてあるだけ。

しかもボクの場合はほとんど授業に出ることなく、こうして実験の日々が続いている。

『これより実験を開始します』

ボクから遠く離れた場所にあるスピーカーから、そんなファックスを読み込んで喋っているような声が響くと、その後に数秒警報サイレンが鳴る。

今ボクの状態は、とても大きい空間の壁の中央に手足を金具で固定されていて、まさに十字架に架けられた聖人イエスさながらである。

そしてボクの目の前、数メートル先にあるのは細い何かの発射口。どうやら今日も、いつもと同じらしい。

警報サイレンが鳴りやむと、その細い発射口の向こうにある機械から甲高い音が聞こえ始める。その音は次第に大きくなり、耳の鼓膜を容赦なく圧迫する。

「…………」

ボクはそれを握り拳に力を入れて、必死に耐える。ここで能力を使つてしまふと数値が狂つてしまい、もう一度やり直さなければならぬ。

もう鼓膜が限界とばかりに痙攣を始めた時、射出高からなにかが超高速で飛び出した。

その赤く光る何かは残像を残しながら一瞬でボクの元へ飛来し、衝突した。

本来なら軽く人間を跡形もなく消し飛ばせるソレは、なぜか衝突した瞬間にさつきまで響いていた轟音と共に嘘のように消滅していった。

『実験終了。力量変換<sup>クレイドル</sup>が変換したエネルギー数値を元に演算を開始します』

「……ふう……」

ボクはその声を聞いて、力んでいた肩の力を抜く。大丈夫だと分かっていても、超高速でボクの身体目がけて飛来するアレは、やっぱり怖いものには変わりない。

ボクはそれがボクに衝突してきた正体だった。

やつと実験が終わり、地下実験室から地上のフロアに上がったボ

ポジトロンランチャー  
陽電子砲。

クは、ようよると仮眠室へと向かう。

「一日一回とはいえ、あの脳を引き裂くような音はどうにかならぬのかなあ……」

「よオ、今日もまたお疲れみたいだなア？」

フラフラと仮眠室に向かうボクに声を掛けたのはもう一人の生徒、クラスメート一方通行だ。アクセラレータ

本名はボクは知らない。といつかボク自身、自分の本名も知らないので、そこら辺は周りの研究者達が呼んでいる呼び名で互いに呼んでいる。

そんな彼が声をかけたのでボクが彼の方へ振り向くと、なぜか彼は顔を赤くした。

「ふむう？どうしたの一方通行？顔が赤いよ？」

「な、おめ<sup>H</sup>のカツコがそんなどからだ！なンか羽織るくらいしう  
力量変換！」クレイドル

彼が顔を赤くして顔をボクからそむけながら必死に訴えてくるので、ボクは今の自分の身体を見下ろす。

実験の時はいつも数値をより正確にとるために、ボクの能力が一番発揮されやすい裸体に近い服装に着替えさせられる。

ボクは女の子なので必要最低限といったら胸と股を特殊なテープでテープングするぐらいだろうか。

まあ、一方通行は男の子だから、なにか意識するのかもしないけれど。

「ふむう？別にボクはこのままでも問題ないよ。このほうが動きや

すいし、いちいち着替えたりしなくて済むし

「俺には問題あんだけ…いいからなンか着とけ！」

そう言つと一方通行は顔を赤くしたまま足早にボクの横をすれ違おつとして……。

「えいっ

ボクの両腕に捕まつた。

「ンなあ！？」

「ふつふつふー、逃がさないよー？」

赤みがかかつて白い肌はボクが腕に抱きついたためか更に赤くなり、さながら茹つたタコのようだった。

ボクは一方通行の腕に抱きついたまま顔を彼の顔に近づける。

「ふむう？どうしてそんなに顔が真っ赤なのかな。やっぱり恥ずかしい？」

「クソッ、いいから離せてめー！」

もはや白かつた肌はどこにも見当たらぬくらい茹つた一方通行は、強引に引きはがそうとボクを【反射】する。

一方通行の能力は『ベクトル操作』。あらゆる力の向きを変えるその能力は、静電気から核ミサイルまで、彼には通じることはない。そんな化け物じみた能力を人間の肌に直接行使したならば、それは皮膚が全て吹き飛ぶか、血流が逆流して血管が爆発するか、果て

はさらりに惨い凄惨な姿になるはずだ。

しかし今、田の前に居る少女はその花のよつな笑顔をこちらに向けたまま何も起きていないように腕に抱きついたままだった。

「……ツたくよお、おめエのその能力も十分にばけもんだよなア？」

「ふむう……。その言い方はちょっと傷つくかも。その化け物じみた能力のおかげでこうして一方通行に唯一触れるんだよ？」

「……ホント不思議だよなア……」

『力量変換』<sup>クレイドル</sup>。それは自分自身が受けたエネルギーを全て吸収、変換する能力。

あらゆる力量を【吸收】する彼女にとつて、一方通行がいくら【向き】を変更しても、彼女に及ぶ力量はすべて【吸收】されてしまい、うまいこと中和されているのだ。

ようするに彼女に核ミサイルを放つたとしても、彼女はその莫大なエネルギーを【吸収】してしまっだけで、かすり傷一つつかない、正真正銘の化け物である。

「どうせボクが抱きついていても熱は【反射】しちゃってるんでしょ？ だつたら問題ないよー」

「問題あンだよ。邪魔だからどけツツツンのによお」

「ふむう、照れてるね照れてるのだね照れちゃってるね？ これだから弄りがいがあるよおー」

そういうて力量変換が両腕に更に力を込めて捕まえていた一方通

行の腕を自身の胸に押し当てる。

「 ッ！..」

【反射】しているので腕に感覚は伝わってはこないが、視覚的に一方通行はたじろいでしまった。

もちろん彼も年頃の男の子なわけで、女の子に抱きつかれるのはまんざらでもない。しかも力量変換の容姿も悪くないし、性格は若干うつとうじいが悪印象とまではいかない。

しかしその触れた場所がまずかった。

彼の身体は今【反射】に設定されている。つまり彼の身体に着くものは跳ね返してしまっわけだ。

でも力量変換の身体は彼の逆、【吸収】の能力だ。【反射】の影響は受けない。

そう、“彼女自身”は。

ペリッ。

一方通行の目の前で、彼女の“最低限の場所”を隠していたテープが、【反射】によつて乾いた音を立てて引きはがされる。

「え？」

「あア？」

全裸の少女に胸を押しつけられる一方通行。アクセラレータ

自分が隠していた部分を見られた力量変換。

その時はゆっくりと、しかし確実に一方通行に迫っていた。

「……ふむう、何か言つことは？」一方通行ア？

「……だから邪魔だツツたン」

その直後、一方通行が唯一【反射】できない、力量変換の攻撃が放たれた。

その時に「不幸だア————ツ！」とか聞こえたのは幻聴であります。

## 第1話 力量変換と一方通行の日常（後書き）

如何だったでせうか？

一方通行のキャラが崩壊している気がしてならないのですが……。

氣のせいですよね おい

なるべく返信させて頂きますので、ご意見、ご感想など、お待ちしております。

でわまた次回。 ノシ

## 第2話 力量変換と一方通行の日常 ～崩壊～（前書き）

早く原作介入したいなあ……どうも玉露飴です。

なんと早くもお気に入り件数が6件も……いやはや、驚きで息が出来ませんでしたよw

それでわざわざ

## 第2話 力量変換と一方通行の日常 ～崩壊～

「ふむう、学校に行つてみたいなあ」

身体の“必要最低限”の場所をテープelingで隠した少女、力量変換は、地下実験室へ向かうエレベータの中で、そんな言葉をうわごとのように呟いた。

彼女はこの学園都市に来て、時間割りを受けて能力に目覚めて以来、授業という授業を受けたことが無い。それは彼女の超能力の特異性が原因なのだが、一応そこは自覚しているつもりだった。

原子炉の中に放り込んでも死なない。おそらく隕石が衝突しても死なないその身体は、まさに化け物と呼ばれるにふさわしい能力だつた。

「まあ、一方通行<sup>クラスメイト</sup>がいるならボクはムリに行きたいとも思わないけどね」

力量変換<sup>クレイドル</sup>

それは身体に触れるエネルギーを【吸收】し、別のエネルギーに【変換】する能力。

よつて彼女に身体に触れる全ての力量は例外なく【吸收】されてしまう。ちなみに、質量もエネルギーの一形態として認識されているため、物体でさえも【吸收】が可能である。

だが、今の彼女は『それだけ』である。

【吸收】や【変換】はできても、まだその【変換】した超高エネルギーを【行使】することが出来ないのである。

ようするに、自身の能力に対する経験が少ないのだ。

彼女の友達一方通行だつて、まだベクトルを【反射】することし

かできていな。

「早く一人前になりたいなあ……」

ようやく地下実験室に着いたらしく、エレベータがガクンと揺れて停止し、目の前の自動ドアをゆっくりと開く。

「力量変換、ただいま参上しました」

「ああ、では早速だが所定の位置についてくれ」

忙しそうにパソコンと向き合つ研究者達は、彼女の声を聞くなり実験室の中へと促した。

今日もまた陽電子砲ポジトロンランチャの実験なのだろうか。細い射出工ポジショが特殊強化ガラスの向こうから覗き込んでいる。

すでに着替えは済んでいる。というか昨日からこのままである格好で研究者の言う所定の位置へといそと向かう。

横に備え付けてあるはしごを上り、十字架のようないつもの場所ポジショに着く。

足を拘束具でしつかりと固定し、外れないのを確認した後に、次は手首を拘束具で固定する。彼女の今の状況は、彼女の“必要最低限”の部分しか隠していない身体の手足を、拘束具で固定されてい

るという、なんとも怪しい雰囲気が漂う姿だった。

『準備はいいかい、力量変換?』

「はい、おーけーです」

しかし、いつもスピーカーから聞こえてくるその男性研究員の声

は、その姿に欲情するわけでもなく、ただひたすらに淡々としている。

だが、今日は何かが違った。

なにか欲情する以外で興奮しているような…、何か今から起らることを楽しみにしているような、そんな声だった。

「ついに田代めちゃったのかな、あのセンセ」

それでも彼女はそんな声を聞いても、冷静であつた。

襲い掛かってきたとしても、いざとなつたら“人間といつ質量”として【吸收】すればいい。

研究者が力量変換のことを『モルモット』といつながら、ボクにとって世界は『餌』だ。

ただそれだけだった。

『これより実験を開始します』

そんなアナウンスが響いた後、お決まりのサイレンが鳴り響く。そのサイレンを聞き流しながら、力量変換はこの実験が終わつたあとのことを考えていた。

今日は少しメンドクサイと言つていたから、まだ実験は終わつてないだろ。だったら実験が終わるまでエレベーターの前で待つてみようかなー、などと考えてみる。

あの初心な少年のことだ。また顔を真つ赤にして、照れ隠しするのだろう。

「ふふ、楽しみだなー」

そんな一方通行の茹る姿を想像して思わず顔から笑みがこぼれると同時に、射出工から壮絶な音を立てて、何かが飛び出したのに気が

づいた。

しかし彼女はまだ気づいてなかつた。この実験が 力量変換の能  
力拡張実験 だとは知らずに。

「なンだ……？ これはよオ……」

一方通行は思わず息を呑んでいた。

なぜか「研究施設から外に行こう」と研究員の車に乗せられ、適  
当に各学区を周つていたら、突然地震のような揺れが起きたからだ。  
一方通行は【反射】で防ぐことができたが、その直下型ともいえ  
る一瞬の縦揺れは、学園都市の交通機能をマヒさせていた。  
ビルの窓ガラスは割れ、学区は軽くパニックに陥つてゐる。

「クソツ」

とりあえず今の地震のせいで街路樹に衝突し動かなくなつた研究  
員と車を捨て、外に出る。そのつち風紀委員とやらがなんとかして  
くれるだろう。

それにして、凄惨だつた。

“樹形図の設計者”はこんな地震が起つることは言つてはいなかつ  
た。だとしたら、これははじめての予想外かもしない。

「研究所はツ」

一方通行は思いがけない出来事に軽くパニッシュになりながら、なぜか研究所のことを心配していた。

化け物な自分を上回る、さらに化け物な“アイツ”。

それでもアイツはおかしいぐらいに明るく笑って、【反発】する自分を優しく【包容】してくれた。

自分でも分かっている。そんなアイツの性格に甘えているだけなんだと。

でも俺はそんな日常を気に入ってしまった。だってアイツは温かな揺りかご、“クレイドル”なのだから。

だから俺は失いたくなかったのだろう。自分が帰る揺りかごが壊れてしまつのを。

研究所のある方角からは、黒い煙が何本も、空の雲に追いつこうとするように立っていた。

一方通行はその場から駆け出した。こんな時にベクトル操作が満足に出来ない自分自身を恨んだ。

今、一方通行は一般人と同じように地面を蹴つて進んでいる。日光すら【反射】して、まつ白な腕を必死に動かして。

はじめて感じる、心臓が高鳴り脈打つのを感じながら。

研究所は無事だった。

しかし、呼吸が乱れたまま中に入った一方通行は、思わずその呼吸が止まるかと思った。

広いロビーがあつたその場所は、中心に大きな穴をぽつかりと空けて荒れ果てている。

「なんだよ、これはよオ……」

その穴から下を覗いてみると、数十メートル先から光が届かないのか、黒い色で染まつていた。

穴の大きさは大体で直径十メートルほど。それも、とてもきれいな円で、だ。

ありえない。

地下実験室での実験は確か陽電子砲だつたはずだ。その影響だつたとしたらこんなきれいな風穴では済まないはずだ。

「いやア、待てよオイ。その実験に協力してたのは……」

“一日一回とはいえ、あの脳を引き裂くような音はどうにかならないのかなあ……”

「 ッ……」

一方通行はその頭に浮かんできた最悪の結果を予想し、絶句した。彼女、力量変換<sup>クレイドル</sup>は受けたエネルギーを【吸收】、【変換】する能力だ。

なら、その“【吸收】【変換】されたエネルギーはどうへ行く？”

バッテリーだつて、電力を永遠にためておくことは出来ない。放つておいたら放電して徐々にその蓄えていた電力を消費していくだろい。

しかし彼女の場合は毎日、一日一回のペースで陽電子砲という絶大なエネルギーの充電をしていた。一日で放電してしまうような量ではない。

しかも彼女の場合、まだうまく【吸收】を扱えない。人を触つて【吸收】することは無くなつたが、それ以外はまだ分からない。

俺と同じく、太陽光エネルギーを【吸收】していたら？  
地面上に触れて、人間には感知できない震度一以下の地震のエネルギーを【吸收】していたら？

それはバッテリーを充電器に繋げっぱなしなのと同じだ。  
そんなことをしたらバッテリーは過充電を起こし、ダメになつてしまつ。でも、それは家庭用のバッテリーの話だ。

彼女は家庭用のコンセントから流れる電流とは比較にならないほどのエネルギーを蓄積させている。

“ そんなものが過充電程度でどどまるはずがない ”

キィイイイイイイ。

突然そんな音がきれいすぎる風穴のそこから聞こえてきた。

「 ツ ！」

一方通行はほぼ条件反射の域で身体に【反射】を展開する。

それから一瞬の間も置かず、“黒い柱”が昇ってきた。

それは核反応にも及ぶかもしれない、この世では考えられない超

高エネルギーの奔流。

風穴を押し広げるよう、それは風穴の淵に立っていた一方通行を飲み込んだ。

「ぐッ！？」

しかしそれが力の流れであるなら、一方通行のベクトル操作は有効である。

その地面の底から沸いてくる死の奔流を【反射】しながら、一方通行は研究所の屋根を突き破つて外に放り出された。途中で奔流から脱出することができなかつたら、あの柱に乗せられてどこまで押し上げられたんだら？

「チッ！ オイ、力量変換！ 大丈夫かア！？」

地面に叩きつけられる衝撃を【反射】して、研究所にいるであろう力量変換に向かつて叫ぶ。

瞬間、柱が消えたと同時に研究所の天井を突き破つて、何かが飛び出してきた。

それはさつきの柱と同じ、黒い色をしていた。

遠めから見ても人の形をしているのはわかる。しかしそれには不自然すぎた。

なぜ背中に羽が生えている？

なぜ宙に浮いたまま落ちてこない？

なぜ、あの姿を見てどこかで見たような気分になる？

そしてその漆黒の三対の翼を持つ、どこかで見たよつた姿の人間は、一方通行の方を見て、言つた。

「いいねこれ。す、ぐ、いいよ」

キッシと頭を立てて、彼女、力量変換<sup>クレイドル</sup>は歪んだ笑顔を浮かべた。

## 第2話 力量変換と一方通行の日常 ～崩壊～（後書き）

あれ、一方通行のキャラが分からなく……。

まあ、孤独ではなかつた一方通行はこんな感じに丸くなつてたかも  
しませんし。  
想像ですがw

ご意見、ご感想、お待ちしております。

でわまた次回～

### 第3話 力量変換と一方通行の日常 ～決意～（前書き）

まさかの連投その2。

本音を語りたいこの暗い過去編をさうかと終わらせて、原作キャラと  
おしゃべりさせたいです。ｗ  
でねじねじ。

### 第3話 力量変換と一方通行の日常 ～決意～

アクセラレータ

一方通行は目の前で起きた出来事に、思わず絶句していた。

突然、樹形図の設計者が予言していなかつた直下型の地震が起き、その被害を受けたのか研究所は風穴を空けられ、その穴の中から自分が知っている人間が翼を生やして飛び出してきた。

「どうなつてんだよお、オイ」

一方通行は空中に浮かんだままこちらを見下ろしている力量変換を睨みながら一人愚痴る。

今日の朝までどうでもいいようなことを駄弁つていた友達が突然、目の前で背中に羽を生やして飛んでいるのだ。

そんな奇奇怪怪な様子に一方通行が警戒していると、自分が睨んでいた人物が口を開いた。

「すごいよ一方通行。これ、すごくいい。ボク、空飛んでるよ?」

アハハと、声には似つかない歪んだ笑顔で、少女は笑う。

黒い三対の翼を持つ田の前の彼女は、さながら墮天使のようにも見える。

すると突然、ピタッと突然笑い声が止むと、力量変換はスッヒー方通行に向き直る。

「一方通行。ボク、どうやらレベルアップしたみたいだよ?」

「……ンで、そのレベルアップしたテメエはこれからどうすんだよオ?」

一方通行がそう問うと、彼女は少女らしい仕草で悩み始める。

身体が揺れるたびに、背中の三対の黒い翼も揺れる。同時に、羽のようなものがヒラヒラと地面に舞い落ちてくる。

その羽はヒラヒラと研究所の残骸にぶつかると、容易く残骸を貫通した。

超高エネルギーが物体に触れた時に起る量子分解に、その様子は似ていた。

「……なるほどオ、研究員がテメエをいじくった結果つてワケかア？」

一方通行はその現象を見て冷や汗をかいた。

ようするに目の前の力量変換は、触れた物を容赦なく分解する羽毛と、想像もつかないエネルギーを蓄えた翼を三対も持つ、神話級の化け物だからだ。

「……ふむう、やっぱり学校に行つてみたいかなあ」

「……はア？」

そんな様子の一方通行の心境を知つてか知らずか、彼女は全く緊張感を感じさせない、のびのびとした口調でそんなことを言い放つた。

この緊迫した状況で学校に行きたいという少女を見て、一方通行は思わず吹き出してしまった。

「クククク……、テメエ、なに言つてんだよオ？」

「ふむう？ ボクは一方通行に何がしたいのかーって聞かれたから、

学校に行きたいーって、言つただけだよ？」

それでも笑うことやめない一方通行に、力量交換はただ不満そうに首をかしげる。

(なんだよ。外見は変わつても、中身はアイツのまんまじやねエか)

自分が一番心配していた部分が消え、一方通行はそんな自分に笑っていた。

力量変換はいつまでも笑うことやめない一方通行に腹を立てたのか、顔をムスッと膨らませて睨みつける。

「ふむう、一方通行が笑うのを止めてくれない。どうしてかなッ…！」

その時、一方通行は笑っていた顔を一瞬で引つ込ませ、【反射】を展開した。

刹那、今まで感じたことの無い風圧が、彼の身体を襲った。

「クツ！？」

【反射】はしているものの、何分彼は初めての全力疾走で疲れていた。【反射】のほんの少しの隙間を縫つてそのカマイタチは彼の白い肌を襲う。

カマイタチが去った後、数本の赤い線が入った一方通行は、それでも彼女の姿を視界から逃すことはなかつた。

さつきの黒い柱分のエネルギーをまた充電してしまったのか、さ

つきのカマイタチは彼女の“放電”によるものだつたらしい。

力量変換は自身のなかで暴れるエネルギーに悶えながら空中でもがき続いている。

「チツ、浮いてたんじゃなンもできねHじゃねHか……！」

一方通行は今の状況に焦つていた。このまま空中で“充電”を続けていたらマズイ、と。

しかし一体どうやって彼女を助ける？

彼女は自分より十数メートル上に浮いたまま降りてくる気配が無い。恐らくまだ自分の能力をうまく扱えていないのだらう。

彼女は声にならない叫び声をあげながら頭を抱えて身悶えする。そのたびに黒い羽は舞い落ちる数を増やし、辺りの瓦礫を抉つていく。

「俺はどうすりやア いい……？」

考える。度重なる演算の疲労と、全力疾走で酸欠のボロボロの状態で。

「アソツは意味わかんねHくらいのエネルギーを演算してやがンだ。俺がここで諦めるわけには……？」

意味わかんねHくらいのエネルギーを演算？そこで一方通行は気がついた。

そんな大量の演算が、あの自分の能力に慣れていない小さな少女に、ましてや長時間行えるワケが無い。

要するにあの膨大なエネルギーを抱えている時間には限界があるのだ。

そしてその膨大なエネルギーを手放した時、行き場を失つたそれ

はどうなるか 。

それに気づいた時には、すでに少女の身体はゆっくりと落卜を始めた。

「ンだよそりやー！」

一方通行は考えるより先に彼女の下へ走り出していた。もう下手に【反射】も使えない疲れきったボロボロの身体で。しかし彼はその最後の力を振り絞って【反射】を開拓し、落ちてきた彼女を何とか受け止める。

その時に何度も黒い羽に当たるが、【反射】のお陰かダメージはない。

「クソ、俺が掴んでもヤバいんだよなア！？」

彼の状態は【反射】。力量変換の状態は【吸収】である。

一方通行が【反射】した力量はすべて彼女が【吸収】してしまつ。これでは彼女の脳にさらに圧迫をかけてしまつてはいる状態だ。

「ビニード、どこかロイツが“放電”しても問題ねエ場所はー？」

首をぐるぐると回して辺りを探ると、一点を見つけて目が止まつた。

ついさっき、黒い柱と力量変換が飛び出してきた、直径十数メートルの風穴だ。おそらくこの下は陽電子砲の実験施設までつながっているのだろう。

しかしそうするとこの穴の深さは数百メートルなのだろうか。“その時に発生してしまつエネルギーはどのくらいのものなのか”。

「…………」

抱えている腕の中で、いつも自分のことをからかっては太陽のように笑っている少女が、今まで見たことも無い苦しそうな表情を浮かべている。

「……躊躇つてる暇なンぞ、ねエよなア！？」

一方通行は彼女を抱えたままその風穴へと飛びこんだ。  
そうだ。こんなところで無くすワケにはいかないんだ。  
孤独だと思つていた俺を包み込んでくれた、この温かな揺りかごを。

穴に飛び込んでから数秒後、腕の中で力量変換の翼から淡い、黒い光を放ち始めた。

「さア来い！テメエの揺りかごの掃除、手伝つてやつからよオ！」

直後、再び学園都市を地震が襲つた。

それと同時に、学園都市の空へと伸びる黒い柱を、学園都市中の人々が目撃した。

地震はその後、複数回起つていたが回数を経ることに弱体化していき、次第に収まつていった。

「…………？」

一方通行が田を覚ますと、そこはあまり見覚えの無い部屋だった。気だるい身体をなんとか起き上がらせると、自分の日光を反射していたまつ白な肌はところどころ傷つき、絆創膏や包帯が巻かれていた。

他にも点滴や電極が付けられている辺り、病院にでも運ばれたのだろう。

「…………ふみやあ…………」

「…………」からか猫のような声がして首だけを横に振り向くと、そこにはついせき今まで自分が抱きかかえていた少女が気の抜けた表情で、自分と同様、ベッドで寝かされていた。

あの過充電状態からは想像もつかないその隙だらけな寝顔は、彼の不安だらけだった心を癒した。

「つたくよオ、俺はコイツになんかあてられたかア？」

そういうて一方通行は自然と笑みがこぼれた。今までの笑みとは違う、少なくとも自分が好意を抱くものに対する笑み。

自分と同じ赤い目をしながら、髪は真っ黒な彼女は規則正しく胸の辺りの毛布を上下させている。

「…………がつこ、一方通行も…………いつしょ…………」

それは寝言だったのか、力量変換はそのままくと寝返りを打つてこちらから表情は見えなくなってしまった。

「学校、ねエ…………」

一方通行が彼女の向こう側にある窓から空を覗く。そこには果てしなく青が広がり、白い雲がのんびりとその青に反して浮かんでいる。

今回の事件で、彼女の能力はLevel5であることは証明されてしまった。

しかしそれと同時に、今回のような急速な進行の実験は危険だと研究者達は理解したようだ、力量変換に対する実験は恐らく減少するだろう。

「次は俺、かア……？」

力量変換は完成した。ならば次は一方通行を、と来るだろう。

「ハツ、上等じゃねエか。研究者達の実験に付き合つてやつからよ  
オ？」

そして、俺がお前を超える化け物になつて、お前が学校に行けるような暇人にしてやるよ。

自分の横で眠る、その全てを飲み込む小さな華奢な背中を見て、そう一方通行は決心した。

### 第3話 力量変換と一方通行の日常 ～決意～（後書き）

過去編はここで終了です。お疲れ様でした、自分。　おい

ただいま作者は絶賛レールガンを見直し中です^ ^ ;

少々お待ちをw

ご意見、ご感想、お待ちしております！

でわまた次回　ノシ

## 第4話 せじゆのめつかご？（前書き）

おーっ！、めでかの連投ッ！（野球中継風）

……げふんげふん。

でわざいわざ。（9月19日改稿）

## 第4話 はじめてのおつかい？

結果から言つと、力量変換の起こした直下型連続地震、通称『想定外事件』は単なる報道ミスとして処理された。

もちろんそれが能力者によつて引き起こされたなどとは口が裂けても言えないので、天然物の地震であると、上層部から学園都市へとニュースで報道された。

しかしその被害は学園都市の耐震技術が功を奏したのか、ガラスが割れるなどの比較的に軽微な損害に抑えられた。

そしてその震源地でもある、力量変換や一方通行<sup>クレイドル</sup>が実験に加わっていた研究施設は復旧不可能として破棄。その事件終了直後に立ち入り禁止区域に認定<sup>ノーマル</sup>され、幕を閉じた。

そして力量変換のその後であるが、彼女は学校へ登校することを許可された。

理由として挙げられるのは、今回の事件が深く関わつてゐる。まづ、力量変換に対する実験スピードを見誤つたこと。これは力量変換の実験を担当する研究者の独断先行であつたことが判明し、以後、上層部の管理の下に慎重に扱われることになった。

そして次に、彼女が精神的な病を患つた事に関連する。精神を患つたと言つても重度なものではなく、軽度なものとして処方薬で十分対応はできるが、なんどもこのような過ちを繰り返すのは学園都市の予算的に厳しいからである。

そして最後、一方通行が今まで以上に研究協力に対する意欲を見せ始めたからである。想定外事件で彼女の過充電状態を止めた際に何か心境の変化が生じたと見られるが、その原因を詮索することに何の価値も見られないでの不問とする。

登校を許可されたのは常磐台中学である。全校生徒がLevel 3以上であることから、もし力量変換が不測の事態に陥ったとしても全校生徒でかかれば物量的に鎮圧できると考えたかららしい。もつとも、彼女の能力の前でそれが抑止力になるかどうかは疑問だが。

よつて彼女は精神安定剤の服用と、Level 5の超電磁砲、御坂美琴と同室に居住することを条件に念願叶つて通学を許可された。

なぜ超電磁砲と同じ部屋が条件なのかというと、先に述べたように力量変換はその能力の特異性故、過去より能力の操作は上達して、再び過充電状態になることはないと無いが、万が一に備えての保険でという意味だ。

もつとも入学したその後、常磐台中学の校則に合法的に退けられて隣の部屋へと移ることになるとは誰も予想していなかつたが。

そしてその中心人物である彼女は今、仮住居である研究所から外へ出て、学園都市を散策中……もとい、入学に先立つての奨学金の引き落しに向かっていた。

「ふむう～、一方通行は気をつけようって言つてたけど、そこまで危ないことはなさそうだよね？」

そう言って歩道を闊歩する彼女の姿は、周りを歩く者の目を引くには十分すぎる格好だった。

黒い肩まで伸ばした髪は歩くたびに小ちく揺れ、上はキャミソールがすこしはだけ、下は薄い短パンと、今の季節を完全無視したフッシュションである。もちろん彼女は機動性を優先しただけであつて、本来ならば例の“必要最低限の部位を隠したテープティング”で出かけるつもりだったのである。

もちろん、それは一方通行が顔を真っ赤にしながら全力阻止したが。

「それにしても、これが冬といつ季節かー」

彼女はその季節を全身で感じるよう腕を広げてクルクルと回り始める。その一回転<sup>（）</sup>とにはだけかけていたキャミソールがひらひら舞つものなので、それを見守っている女性陣はハラハラ、男性陣はドキドキと言つたところか。

まあ彼女自身はまだ小学生という扱いなので、手を出したら即刻に風紀委員か警備員に捕まってしまうが。

彼女は寒さを温度というエネルギーとして【吸収】しているので寒いとは感じない。ようするに温度として身体は感知していないことになる。

研究所では新たに彼女専用の放電施設といつても過言ではない設備が開発され、毎日貯めたエネルギーはその設備でタービンを回し、学園都市を明るく照らす電気に再利用される。ある意味究極のヒーリングエネルギーだ。

「ふむう、そういうえば郵便局っていう場所はどうの」となんだろ？

彼女は学園都市に来た時に行われる時間割りによつてひらくに学園都市を回つていない。よつするに世間知らずである。

研究員に貰つた地図を頼りにここまで来たものの、どれが郵便局というのかさっぱり分からぬ彼女は首をかしげていた。

その時であつた。突然目の前に自分より2〜3歳年下に見える女の子が現れたのは。

「ふえ！？」

「ふえ…？」

突然、何の気配もなく現れた目の前の女の子に思わず間の抜けた声を出してしまつた。しかしそんな彼女とは対照的に突然現れた女の子は何が起こつたのか分からぬと言つた様子で茫然とその場に立ちつくしている。

「え……外……？」

ようやく口に出した女の子の声は小さかつたが、その直後にシャッター中から男の野太い声が響いてきた。

『テレポートだあ？』

その声にハッとしたのか、女の子は必死に下ろされたシャッターを叩き始めた。

「白井さん！？中に入んですか！？どうして私だけ！？」

女の子は今自分の置かれている状況にひどくパニックになってしまる様子で、一心不乱にシャッターを叩き続ける。

「白井さんも早く外へ！白井さん、どうして返事をしてくれないんですか！？」白井さん！白井さん！？」

『グツー！？』

女の子が叩くシャッターの中で、誰かが蹴られる鈍い音が聞こえてきた。

その音を聞いた女の子が一瞬シャッターを叩く手を止めると、勢いよく振り返り、歩道を往来する人に向かって助けを呼び始めた。

しかしながら人はその女の子の前を通り過ぎていくだけで、誰もその声に応じようとはしない。せいぜい「ねえ、あそこヤバいんじやない？」「アンチスキル警備員に連絡するか？」などといつひソヒソ話が広がるだけである。

「……一方通行から聞いてたけど、入ってホントに冷たいんだね？」

と、そんな達観したようなことを呟きながら、彼女も女の子の前を通り過ぎる

「ことなんて出来なかつた。

「どうしたの？ボクにできることなら手伝ひながい

すでに泣き始めている女の子を諭すような口調で話しかけると、

その女の子は食いつくように彼女の服をつかんだ。

「IJの中に強盗が入つてて、その中に白井さんが……白井さんが  
ツ……」

女の子はパニックになつてゐるようで、これ以上はうかがい知ることはできない。しかし彼女にはそれより気になることがあった。

「ふむう、人? 助けたい人がいるの?」

「はい! だからツ……助けて下さい!」

そこまで聞くと、彼女はその女の子の頭をポンポンと軽く叩いた後、シャッターへと向き直る。

「能力は極力つかうなつて言われたけど……、せつかくの人助けだもん。いいよね。一方通行?」

そういうと彼女は閉じたまま沈黙してゐるシャッターに手を触れ、その質量を【吸收】した。

「え?」

その様子を見ていた女の子はとても驚いたのか、泣きじやくつていた顔がぽかんとしている。

「ふふふ、驚いた? じつわね」

その自分の能力に驚いている女の子に能力の事を説明しようとしていると、脇腹辺りにコツンと何かが当たつた。

「ふむう？…… 鉄球？」

彼女の脇腹にはなぜか、直径1cmくらいの鉄球が押しつけられていた。

しかしその鉄球は落ちる事は無くただ彼女の脇腹に触れているだけでピクリとも動かないでいる。

「なつ、 絶対等速<sup>イコールスピード</sup>が効いていないだとー？」

「うやうやしくの鉄球の持ち主であるらしい男は、鉄球を張り付けたままの彼女を見て信じられないと言つた表情でこちらを見ている。

「絶対等速？ ああ、あの能力を切るか対象物が壊れるかするまで一定速度を保つ能力ですか？」

つい先日、研究者から受けた授業の中でそんな能力の事を言つていた気がする。それを思い出した彼女はニヤッと笑い、その信じられないさそうな男を見据える。

「まったく、君も不運だよねー。それってボクと一緒に相性が悪い能力じゃん？」

すると彼女は脇腹にくついたままの鉄球に手を触れると、なぜかそこにあつたはずの鉄球はキレイに消えて無くなっていた。

「う、嘘だろ…… ねい？」

「ホントだよー？」

障害物が無くなつた彼女は、その彼女の様子に驚いている強盗の犯人らしきその男にゆっくりと近づく。

「なつ！？なめてんじゃ ねえぞお！」

男は近づいてくる彼女に気づくと、ジャージのポケットから複数この鉄球をばらまく。その鉄球はまっすぐに、男に向かつて歩いてくる彼女へと迫る。

「あ、危ない！」

中でなぜか倒れていたもう一人の女の子が声をあげると同時に、真っ直ぐに力量変換にぶつかつた鉄球はその存在を吸われるようになえて行つた。

「……ふむう、充電完了。かな？」

啞然とする男の前で雰囲気とは不釣合いな間延びした声で呟くと、突然彼女の背中のキャミソールを突き破つて、黒い翼が左片方だけ生えてきた。

とても黒い、光さえその翼に触れることが出来ないような、深い漆黒。

その羽が左片翼一本だけ、彼女の背中から生えていた。

「さて、ボクはお薬の時間もあるから手早く済ませたいんだけれども……」

その時、羽が生えた時の風で流されて来たのか、一枚の書類がヒラヒラと舞い、漆黒の羽に触れた瞬間、ジリジリと焼けるような音

を立てて羽に触れた部分がキレイに消滅した。

その漆黒の片翼から舞い落ちる黒い羽毛も、床に落ちるとその床は強酸でもかけられたように穴だらけになつていぐ。

すでに男は立つていることなど出来なかつた。その場にへたり込み、足は震え、腕は動かず、寒さではないなにかによつて歯を力チカと鳴らしていた。

それを見下ろすのは、黒髪紅眼の漆黒の片翼を持つ、女の悪魔。その女の悪魔はその場の雰囲気とはかけ離れた、その姿からは連想出来ないような純真な笑顔で、こう言つた。

「郵便局つてどこか、知つてる?」

その言葉を聞いた瞬間、死の呪いをかけられたように、男は意識を失つた。

## 第4話 はじめのむづかしい？（後書き）

これでいい……のか？

時系列とかなんかぐつちゃになつてるやもしませぬ。『容赦をへ  
^；

ご意見、ご感想、お待ちしております。

でわまた次回 ノシ

## 第5話 はじめのねつけ? (前書き)

いつも、実は原作をあまり知らない作者です (爆

ただいま必死に読破中ですので、容赦を ~~三~~ (一) m

それでわざわざ。

## 第5話 はじめのねづかい？

「……よつし、もう大丈夫みたいだね～？」

田の前の男が倒れたまま氣絶していることを確認してから、漆黒の片翼を生やしている少女、力量変換<sup>クリエイドル</sup>はそう直<sup>ハヤシ</sup>言した。人質として捕らえられていた客や係員達に、段々と安堵する声が聞こえてくる。

「じゃあ、いい加減危ないからしまつひやおつか」

そういうと、力量変換は背中から生やしていた黒い片翼を霧散させた。翼を構成していた黒い羽はバアッと広がり、やがて形を保てなくなり空気中へと溶けていく。

その後に残つたのは一人の黒髪の少女と、その背後に残つた強酸をかけられたような床だけだった。

「…………あ…………」

そのあまりにも不思議な様子に、<sup>ファンタジー</sup>風紀委員、白井黒子は言葉を失つていた。

左足を怪我していることも忘れてしまつほど、その光景は神秘的だつた。

そんな様子の白井に気づいたのか、その幻想世界の主の少女は手を差し伸べてきた。

「立てる？」

「あ……、はい。大丈夫ですの。お構いなく……ツー」

少女の手を借り、左足に体重がかかったところで収まってきたいた激痛が再び白井の華奢な身体に襲い掛かる。

そのまま倒れそうになつた白井を、あわてて少女は抱きとめた。

「ふむう、強がつてゐるね?ダメだよ自分の身体を粗末にしちやあ」

少女はそんな様子の白井を諭すように声をかける。

どうやら怪我を負つていることはすでにお見通しらしい。まあ、この様子からして怪我を負つていないという考え方の方がおかしいのだが。

「でも、こんな事態に陥つてしまつたのも全て私の責任ですの。私が先走つてしまつたばかりに、初春や古法先輩を巻き込んで……」

その白井の苦痛の告白を聞いて、少女は一瞬黙つてしまつた。しかし彼女はなにか決意を宿した目で一人頷くと、肩を貸している白井に向き直る。

その赤い瞳は、どこか爛々として輝いていた。

「そうだね。確かにあなたには責任があるのかもしれない。ボクにはよく分からぬけど、これは大変な事態みたいだつたからね」

その邪氣のない瞳にまつすぐ見つめられた白井は、どこか居心地が悪くなつて少し視線を逸らしてしまつた。

それでも構わず、少女は話を続ける。

「でも、あなたはみんなを守つとして頑張つたんだよね?周りが見えなくなるくらい必死に」

その言葉に、白井は自分の中では違和感を感じた。

本当に、自分は彼女が言つてゐるような感情を持っていたからこのような行動をとつたのだろうか。

実際は、いつまでも子供扱いする先輩に自分を見つめ直して欲しくてやつた、幼稚な感情が先走つただけではないのか？

だとすると、彼女は私のことを買いかぶりすぎだ。そして、そのように思われてゐる自分はそれと全く反した考え方の下に行動していたことに対して、白井は静かに自分に激怒した。

「だから、あなたも、その部分は負い目に感じることはないと思つ。うん、そうだよきっと」

そういう終わると、彼女は一ぱッと、果てしなく明るい笑顔で白井に笑いかけた。

その光景は、暗い店内に差し込む日差しに照らされて、さながら微笑みかけてくる女神のようだつた。

少女が消したシャッターの場所から、ぞろぞろと中にいた客や係員たちが外へと出て行く。  
やつと警備員アンチスキルも到着したようだ、外からはサイレンの音がまばらに聞こえ始めていた。

「じゃ、もう大丈夫だから、ボクはこれで　」

「そりは行きませんの」

そのまま客とまぎれて外に出ようとした彼女の肩をガツシリと両

腕で固定する。肩を貸したままの状態だったので、白井の行動は避け切れなかつたようだ。

「えと…… できれば、離してほしいかなー、なんて」

「確かにあなたに助けてもらつたことには感謝していますわ。でも事實と結果は別ですの。あなたは参考人としてきてもらつます」

「そう言つと、もう離さないといった様子で白井は掴んでいた両腕をさりにがつしつ固定させた。これで彼女が空間移動でも無い限り逃げることはできない」。

「あはは……ふむう、困つたな……」

彼女は肩口へりこまで伸ばした黒髪を小さく揺らしながら、困つたという表情を浮かべてその場に立ち尽くすしかなかつた。

結局、警備員が到着するまで助けた女の子に抱きつかれたまま拘束され、引渡しを行う際に逃げ出すまで、かなり時間を食つてしまつた。

「まだボクの情報は極力流しちゃいけないって、センサーに言われてたしね……」

逃げ出す際に女の子がすごい怒っていたことはすこし気が引けたけれど、力量変換はポケットに入っていた精神安定剤を水なしで飲み込むと、再び地図を広げ、周りをキヨロキヨロと確認する。

「さつきのが郵便局みたいだつたけれど、もつ使えないだらうしなあー……」

もう研究所を出てからかれこれ4時間くらい経つている。一方通行が心配してしまつているかもしれない。

「急がないとなんだけど……。ふむうー？」

逃げる時は全力疾走だつたため、もう自分がどこを曲がつてどこを進んできたのか、すでに彼女はサッパリだつた。ようするに、ただいま絶賛迷子中である。

「あはは……、ふむう、困つたな……」

あれ、なんかデジャブだー、と一人呟いていると、突然背後から声をかけられた。

「よ、どついた？もしかして迷子か？」

その声にすこしふくとして振り返ると、頭の髪の毛がツンツンした、中学生くらいの男の人人が立つていた。  
どうやら声をかけてきたのはこの人らしい。腰をかがめるよつこして田線を力量変換と同じ高さにあわせている。

「あ、もしかして郵便局がどこにあるのか知ってる人？そつだつたら嬉しいかも」

「郵便局か…。たしかこの辺りだつたら……」

一人ブツブツ咳き始めた彼は、ここから近い郵便局を頭の中で検索しているようだ。どうやら怪しい人物ではなさそうなので、とりあえず待つてみることにする。

すると、なぜか力量変換と彼を見る人の目が、どこか怪しい人を見ているような、そんな目を向けられていることに気づく。

「……ふむう？ ねえねえ、何かボクたち怪しそうな目で見られてるみたいなんだけど？」

「はあ？ なんじゃそりや……？」

と、ツンツン頭の彼がキョロキョロと周りを見回していた彼女の背中を見て凍りつく。

「？」

その様子に気づいたのか、力量変換もおずおずと自分の背中を首を回してなんとか覗いてみた。

結果から言つと、布がビリビリに破けていて、背中が丸見えだつた。そして、この状況に加えて彼女のキャミソールの着こなし方が災いして、傍から見れば誰かに無理やり破かれたようにも見えなくは無い。

「…………さあ」

とりあえず可愛く悲鳴を上げてみる。これは一方通行を弄る時と

同じような雰囲気を彼女が感じ取ったからだ。

ようするに多感な男の子にとっては非常に気がまづくなる行動といつて……。

「違いますこれは別に俺がやつたわけではなくすでにこのような状態であったわけに対して上条さんは一切冷切やましいことはしておりません——ツ——」

ツンツン頭の彼は不審者を見るような視線を振り払いながら一気にまくし立てる、彼女の手を掴んでその場から逃走した。

「ああもう一何かわからんねえけど不幸だア——ツ——」

## 第5話 はじめのめつけ？（後書き）

黒子……当麻……」んな感じだったつけ？

自分で書いていながら自信がありませぬ。しつかりせねば（――；  
）

「意見、『感想、お待ちしております。』

でわまた次回 ノシ

## 第6話 せじゆのねりかい？（前書き）

なんとか原作5巻まで読み終わりました。

アニメの方も見ていたのでそれなりの内容は知っていたのですが、やはりアニメではぶられていたシーンは知らないワケで……。

上條さんのキャラが壊れてどうぞ心配です……。

## 第6話 はじめてのおつかい？

シンシン頭の彼が周囲の重い視線に耐えられなくなり、力量変換の手をとつて走り出してから少し経つた。

彼は常日頃から走りなれているのか、陸上部もビックリな華麗なフォームにて学園都市内を疾走中であった。もちろん力量変換はそもそも走ること 자체があまり無かつたので、そんな彼にほとんど引張られる形でなんとか着いて行つている。

しかしそれは、見方によつては『シンシン頭の男子学生が無理やり小学生の女の子を連れまわしてくる』といつよつとも見えるわけで……。

「ああもうなんなんだよ！？俺は困つてゐる人に親切に接していただけだというのにー！」

「あ……あのつ、なんか……ゴメン」

ほんと不幸だーつと、頭をワシワシ掻き鳴りながら自分の手を引きながら田の前を走るシンシン頭の彼に、思わず力量変換は同情してしまつた。

しかし、ひとの発端は彼女の服装と行動にあるので、ビニカお門違いではあるが。

そんなことには全く気づく素振りも無い力量変換は、すでにビのくらい走つてゐるか分からぬ距離を手を引かれるがまま、ある自分の変化に気がついた。

寒い。

確かに今の学園都市は『冬』という季節が訪れており、走りながら視界の隅を通り過ぎていく人々の格好はどれも厚着を着ていることから、今日も順調に冷え込んでいることは分かる。

しかし今はそんなありふれた“一般常識”が問題なのではなく、自分にその“一般常識”が起きていることが問題なのだ。

彼女、力量変換の能力はあらゆるエネルギーの【吸収】と【変換】である。

よつて、この『冬』特有である寒さも、彼女に触れた瞬間に“外気温度”という形で空気中の分子運動のエネルギーとして【吸収】され、自分の身体が発する体温以外は感じないはずなのである。

その常日頃から無意識で最低限の能力の使用、その演算式などは彼女の友達一方通行が教えてくれたのだが、今ではその演算式が一つとして機能を停止している。

先まで全て【吸収】していた外気温、紫外線、歩く足にかかる負荷などが、全く【吸収】できていない。

“あのツンツン頭の彼の右手に自分の手を握られた瞬間から”

一步また一步と歩を進めるにつれて、彼女に今まで感じさせたことの無い“一般常識”が体力を夏のカキ氷のように削りだされ、あつという間に解けていく。

そんな非効率的な運動に、彼女の身体はついに悲鳴をあげた。

『ぐう～…』

「「え？」

その彼女の主に腹部あたりから発せられる大きな悲鳴に、一心不乱に冷たい視線から逃げていたツンツン頭の彼も、その急ぐ足を止めて思わず立ち止まってしまった。

力量変換もその音を聞いて少しの間だけ思考が止まってしまったが、ハツとなんとか意識を取り戻し、おもわず苦笑いを浮かべる。

その表情にも、普段なれない環境に長時間おかれていたせいか、疲労の色がチラチラと見え隠れしているのに、ツンツン頭の彼は今まで走りまわって温まっていた頭を冬の冷たい風に冷やされて、ようやく気がついた。

「…………よかつたら斬ろうか？」

「…………」めんね

その、自分の“素敵不幸体験”<sup>あたりまえ</sup>に巻き込んでしまって本当に済まない、と言いたげな表情の彼を見上げながら、力量変換は素直に彼の言葉に甘えさせてもらうこととした。

学園都市の空は紅く焼けて、ビル群は徐々に徐々にと帶びている赤を濃くしていった。

「へえ、それじゃあ来年に晴れて中学生として学園都市に来るため  
に、一人で見回ってたつてことなのか？」

「ん。それで途中にお金を下ろそうとして郵便局を探してたら、  
キミに会って現在の状況に至るつてわけだよー」

「……なんか、悪いな。振り回しちまつて。親御さんとか、心配  
してるだろ？」

あの後、ツンツン頭の彼と一緒に近くのファミレスに寄り彼女の  
鳴り続ける腹の虫を黙らせた後、なぜだか帰宅途中の学生に混ざつ  
て力量変換は盛大に駄弁つっていた。

ツンツン頭の彼は彼女との会話は新鮮味を感じているのか、まん  
ざらでもないといった様子で、さらに満腹から来る一種の安心感も  
相まって、力量変換はどこにでもいるおしゃべりな女の子へと変貌  
を遂げていた。

ここから近い郵便局の位置と、閉店時間まではまだ時間はあると  
のツンツン頭の彼の情報を聞くと、力量変換は『ここまで来たのな  
らば完全下校時間とやらまで付き合つてもらおう』という、夏休み  
の宿題を投げ出した小学生の言い訳のような考え方の下、すでにフ

アミレスに入つてから一時間が経過しようとしていた。

「大丈夫だよ」。子供を一人で学園都市に向かわせるような人なんだから」

ツンツン頭の彼が外で見せたような申し訳なさそうな表情を再び見せると、力量変換は全く気にしていないといった様子で受け流し、ジュークを一口飲んだ。

実際は、彼女は自分の両親などというものを見たことはない。気づいたら学園都市に居て、時間割りを受け、能力に目覚めて研究所に引き抜かれた。

一方通行の過去は本人に聞いても教えてくれないので知らないが、あまり愉快なものではなさそうは雰囲気で分かった。

力量変換は両親の顔はあるか、自分の本名も覚えていないので、最早怖いとか寂しいなどということを思つことさえないくらいに完璧に思い出せない。

研究員に頭を弄くられでもしたのだろうが、今の環境をイヤだと思つたことは無いし、一方通行と一緒に居て楽しいので、力量変換はひとかけらも気にしていなかつた。

「……そういうえば、キミの名前って知らないかも」

もう出会いつてから大分経つのに、お互に名前を聞いていないことに今更気づいた。

ツンツン頭の彼はそんな彼女の発言を予想していなかつたらしく、すこし面食らつたような顔になつたが、すぐに元に戻つて自己紹介を始めた。

「… そういうえば、そうだな。よし、俺の名前は上条当麻。見ての通り学生だ」

今更ながらよろしく、と握手を求めてくるのかスッとした前に右手を差し出してきた。

その行動に今度は力量変換が理解するのに時間がかかったらしく、ようやく次は自分の自己紹介の番だと気づくと、その差し出された右手に自分の右手を伸ばしながら彼女も同じように自己紹介する。

「えと、ボクはクレイドルって言つんだよ。見た通り来年中学生だよ。よろしくね」

そんな彼女の自己紹介 特に名前について を聞いて上条は少し首をひねつたが、まあいいか、と何か割り切った様子で彼女の小さい手を握り、握手を交わす。

すると握手をした瞬間、彼女の表情が少し雲つたような気がしたが、確認する前に手を離されてしまったため、窺い知ることは出来なかつた。

「……と一まの手つて、なんだか不思議だね」

「え、そうか? どにでもいる、別になんともないただの学生の手なんだが……」

今の言葉に、なぜか頭の上にハテナマークを浮かべて首をかしげる彼女を見て、上条は疑問を持った。

話を聞く限り彼女は今日はじめて学園都市に来たらしく、時間割りを受けたはずが無い彼女が自分の右手に気づくのはおかしい。そういう感じとったからだ。

( 大体名前からして思いつきり偽名だし……。でも、まあ )

深く考えるのは失礼だろうと、そこで上条は田の前でうんうん唸る彼女を疑うのをやめた。

人には人の事情があつて、そこに会つてから数時間しか経つてない他人があーだこーだ言つるのは何か違うと思つたからだ。

「どうせ来年には学園都市に来るんだし。問題ないか」

「ふむう？ 今のとーまが言つた意味がイマイチ分からぬのだけど？」

「気にするな。上条さんの独り言ですよ。ほら、そろそろ時間だぞ？」

ファミレスの壁にかけてあつた時計を上条が指差すと、彼女は何か腑に落ちないといった様子でありながらも「クリと頷いた。

上条はそれを確認すると、座つていた場所が分かるほど長時間座りっぱなしだった椅子から立ち上がり、伝票を持つて力量変換と共にレジへ向かつて会計を済ませた後、ファミレスを後にした。

「やっぱり俺もついていくか？」

ばいばいと別れを告げた後、教えられた通りに郵便局へ歩き出すその小さな背中に、思わず上条は呼び止めた。

理由は分からぬが、とりあえず呼び止めた方がいいような気がしたから、そうしないと何故か後悔するような気がして。

そして、その呼び止めた結果はすぐこやつてきた。

突然、上条の呼び止める声に振り返った彼女のすぐ横に黒塗りのワゴン車が止まり、中から黒いスーツを着込んだ、いかにもな男が3人ほど降りてきた。

その黒スーツの一人が力量変換となにやら話はじめ、もう一人は携帯でどこかと連絡を取り始めた。

そしてもう一人がその様子に面食らっている上条に歩み寄った。

「君が彼女と一緒に行動していた学生か？」

その声もやはりいかにもといつか、野太い腹に響くような声で、上条に問いかけた。

「なんだアンタ達。クレイドルに何の用が　　」

「怪我はないか学生？」

その予想を斜め上に行く黒スーツの発言は上条の思考を完全に止めてしまった。

（怪我をしてないか、だと……）

田の前で返事を待つ黒スーツのサングラスで見えない田を睨みながら、上条は自分の中でなにか感情がふつふつと湧き上がってくるのを感じた。

はじめて会つた相手に『怪我は無いか』と聞かれるのはもちろんはじめてである。が、今はそんなことを気にしているわけではない。

なぜ、ただの小学生女子を相手にしていただけで心配されるのだろう。

「……見た限りでは、目だつた外傷はないようだな。予定時間を過ぎても彼女が戻らなかつたため、精神状態になにか影響があつたのかと思ったが、取り越し苦労だったようだ」

失礼する、と背中を向け目の前から立ち去ろうとする黒スーツの男に、上条はクレイドルを呼び止める時とは違う、怒りを感じさせるような声で黒スーツを呼び止めた。

「待てよテメ……。何が何なのかサッパリ分からねえが、アイツと何の関係がある……！」

その上条の声から怒氣を感じ取つたのか、力量変換がワゴン車に乗り込むのを確認すると、立ち止まって上条の方へ向き直つた。

「聞いてどうする、学生」

「ついさつき名前聞いたばつかだが、アイツは俺の友達だ。それが意味わからんねえ奴らに連れて行かれそうなのにハイそうですか、で納得できるかよ……！」

上条は、自分がここで何をしたところで何も変わらないことは何となく分かつていていたが、彼の心がそれを許さなかつた。

目の前にいる黒スーツに怒氣を向けたまま、上条はそのサングラスに隠れて見えない相手の目を睨みながら動かない。

しかしそんな上条の様子に何も動じる」とはなく、黒スーツの男はただその様子を一瞥すると、ワゴン車へと歩き出した。

「……そうだな。来年あたりに彼女に直接、聞いて見るといい」

まあ会えたなら話だがな、と黒スーツの男は吐き捨てる、ワゴン車に乗り込み、クレイドルと共に走り去ってしまった。

「……なんなんだよ……」

上条はついさっきまで笑顔で雑談に興じていた時の彼女の顔を思い出しながら、一人、白い吐息と共に呟いた。

今度会った時は必ずこのことを聞こうと上条は忘れないように頭の中に刻み付けると、思いを振り切るようにしてその場から踵をかえし、帰路についた。

季節は冬。

そんな出来事をかき消すよひこ、学園都市に予言通りの時刻に白い雪が降り始めた。

後日、おつかいに失敗した力量変換は一方通行を連れ立つて再び郵便局へ向かつたのだが、その時の一一方通行の様子は上条並み、もしくはそれ以上に怪しかつたという。

## 第6話 はじめのめりかに？（後書き）

どうだったでしょ？

よひやく上条さんと力量変換が自己紹介してくれたので、作者的に  
は嬉しい限りです。

そしてなぜか『偽物』とこいつ点でデジヤヴが…。あれ、なんだろ？

「意見、『感想、お待ちしております』（――）

でわまた次回 ノシ

## 第7話 巣立ちの一方通行（前書き）

見事なまでに更新が安定しておりますん……。

そして氣づけばお気に入り件数が50件超！（9月15日現在）

本当にありがとうございます！

## 第7話 巢立ちの一方通行

突然だが、**力量変換**は**一方通行**の能力と類似する部分がある。

一方通行は運動量・熱量・光・電気量などといった、あらゆるベクトルを触れただけで変換するという能力を持つ。

普段は【反射】に設定されており、ありとあらゆる攻撃を自動的に跳ね返す、ほとんど無敵状態である。

そして力量変換は運動量・熱量・光・電気量などといった、あらゆるエネルギーを触れることで【吸收】【変換】するという能力を持つ。

エネルギーの【吸收】については完全にその運動量を【吸收】できるために、紫外線、外気温なども【吸收】し、肌に触れる事は無い。

そして【吸収】されたエネルギーは全て【変換】され、**正体不明**として蓄積される。この蓄積されたエネルギーは自然消滅することは無く、身体的な上限もあるために適度に発散させなければならぬ。

ちなみにこの【変換】によって生まれた**正体不明**は、触れた対象を例外なく量子分解する。しかし、これは超高エネルギーによって物質が量子並みに“あらゆる方向から対象を貫く”といった現象であるため、一方通行の【反射】でもって対応は可能である。

力量変換が能力を発動する際に現れる『光を反射しない漆黒の翼』は、ある程度に蓄積された超高エネルギーを効率よく使用できるためで、体外に発現できれば翼の形である必要はない。

ようするに、翼という形状は力量変換の趣味である。

そして『触れるだけでバラバラにされる危険極まりない翼』を学園都市内の郵便局内で展開、民間人を脅迫した件について、彼女は学園都市上層部とその研究者たちに責任を負わされることになった。といつても体罰や常盤台中学への入学権剥奪などではなく、前々から計画されていた、力量変換に能力制限を着用させることで解決された。

この能力制限は手足や首、頭などに装着させることで力量変換の能力スペックを一時的に下げる効果を持つ。

しかしLevel5であり一方通行とも対を成す彼女の能力スペックを完全に抑えることは出来ず、【変換】によるエネルギー変換効率が70%ほどカットされただけで、【吸收】はそのままである。

どうやら彼女の【吸收】は能力制限が制限をかけたときに起こる矛盾結果による暴走の恐れがあるため、制限をつけることが出来なかつた。

かくして彼女、力量変換は今朝に担当研究員により両手足・首・頭に能力制限を着けられ、様子見として学園都市への外出を禁じられていた。

「ふむう。暇だ暇だよ暇すぎるよ一方通行」

「ンだよさつときつからひるせエな！」

今日は試験的に力量変換に装着された能力制限の観察およびデータ収集が実験の対象となっているため、今朝の時点で力量変換への実験は終了していた。

そして一方通行はその彼女の監視役。もしもの事態が起こったときのための対応役として彼女と研究所内の行動を共にしていた。

一見拘束具のよつにも見える能力制限を鬱陶しそうに見つめながら、力量変換は深くため息をつく。

そして自ら力量変換のお守り役をかつて出た一方通行は、さつきから横で暇だと騒ぐ彼女の高い声が響いて痛む頭を抱えながら、同じく軽くため息をついた。

（つたく、明日には俺は研究所を出て行くつてのによオ）

一方通行は誰に呟くわけでもなく、一人、頭の中で盛大にため息をつきながら愚痴つた。

彼は『想定外事件』以後、研究に對してこれまでにない獻身的な態度で臨んだため、ほとんどの実験を終えていた。

そして、次の実験は恐らく彼にとつても学園都市にとつても一番重要で残忍な実験。

『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画である。

樹形図の設計者 の算出したプランに従い、現在最強の超能力

者である一方通行を絶対能力者（レベル6）へ進化させる、学園都市の最大の目的を実現するための実験である。

もつとも、実験内容は、“20000通りの戦闘環境で量産能力者<sup>イズ</sup>を20000回殺害する”という、とても正気の沙汰とは思えない内容であるが。

実験は屋外で行われるものもあり、それに伴つて一方通行はこの研究所からは別の一般生徒と同じようなマンションに移り住む予定だった。

（「マイツのためと思うと癪に触るがよお……）

チラツと、横でブツブツと能力制限への不満を呟いている彼女を見て、一方通行はあの時のことと思い返す。

『いいねこれ。すごいいいよ』

学園都市に直下型地震クラスの揺れを起こし、前に居た研究所を潰して空に浮いていた彼女。

背中には光を反射しない漆黒の翼を6枚生やし、その翼から量子分解を起こす死の羽を大量に撒き散らしながらそう言って面白げに笑っていた彼女を見たくないがために、ここまで来た。

今彼女は自分に着けられた能力制限を見ながらブツブツ呟いて俯いているが、その顔は学校入学権剥奪にならなかつたことにより安堵しているのを、一方通行は知っている。

（たかが強盗を追い払うだけになにやつてんだか）

そう思つた一方通行は笑おうとして、やめた。

昔から力量変換がそういう性格であるのは知っているし、自分も何度かその行動に良くも悪くも救われた一人だ。

この絶対能力進化計画も、今回の能力制限の件が無ければ自分ではなく力量変換に役が回っていたはずだつたらしい。

そこまで精神が強くない力量変換は、恐らく実験の途中で自我を失うだろう。

そうなつてしまえば、今まで自分に見せてくれたあの太陽のように眩しい、無邪気な笑顔は完全に消えうせ、“あの時”的な狂つたアイツになつてしまいかねない。

だからこの実験のことも、自分が実験に参加することも伝えてはいない。

（狂うのも、背負うのも俺だけで十分なンだよ……）

自分の横で、自分より狭い歩幅でもしつかり着いてきている彼女をもう一度みて、思わず一方通行は頬が緩んだ。

さつきから沈黙してしまつた一方通行の顔を覗き込むように、力量変換はその頬を緩ませる一方通行の様子に気づいた。

「ふむう、何か一方通行が笑つてゐる。もしか、ボクのこの格好を見てなにか考えてた？」

「タアといつもの一方通行を弄る時の目つきになつたことを確認すると、一方通行はすぐに緩んだ頬を元に戻し、力量変換が覗き込んできた際に止まつっていた歩を再び歩き出した。

「ンなわけねエだろバー カ」

「ぬ、それはウソかな。ボクみたいな起伏に乏しい身体は一方通行

は大好きなはずなんだけどな！」

「ハア！？何言いやがるテメエ！」

怒鳴つた一方通行を見て、キヤーと叫んで一目散に逃げていく力量変換。

その走る彼女の両足首には、鈍く金属色に光る能力制限が走る足が床に着くたびにガチャガチャと音を鳴らしている。

「……能力制限、ねエ」

力量変換の能力を削つてしまつた結果になつてしまつたが、確かに彼女に降りかかるはずだつた絶対能力進化計画は、ちゃんと払い除けることが出来た。

「俺が化け物になるまで、せいぜいのんびり学校を楽しんでな」

担当の研究者には、もう暴走する心配はないだろ<sup>ひのい</sup>の言い訳を適当にでつち上げて、明日の引越しへの準備をしようと一方通行は自分の部屋へと続く通路を歩き出す。

しかしながらかふと足を止めて、力量変換が走つて逃げていった方向の通路を振り返る。

もう力量変換の姿はなく、天井につけられた蛍光灯がどこか冷たさを感じる明るさで灯つてゐるだけだ。

「ハッ。柄じゃねエ。別にもう会えねエワケじやねエンだからよ…

…」

誰もいない廊下にそう吐き捨てて、なにか振り切るよつて向き直ると一方通行は再び歩き出した。

翌日、なぜか一方通行は力量変換の部屋の机の上にヒツヤリシャーペンを置いてから、研究所を後にした。

## 第7話 巢立ちの一方通行（後書き）

一方通行のキャラがどんどん分からなく……（汗

といつかやつといふ絶対能力進化計画が話題に出せました。

上条vs一方通行は変えちゃいかん、という作者の独断で力量変換にはなんか知らん物を着けさせてもらいました。

スマン、力量変換（；・・・・）

ご意見、ご感想、他にもなんでもお待ちしております。

でわまた次回 ノシ

## 第8話 巣立つた鳥が残した巣（前書き）

お気に入り件数がすぐこじて……＾＾；

このまま100件にいきなり勢いに戦々恐々としつつ……

それでわざわざ

## 第8話 巣立つた鳥が残した巣

一方通行アクセラレータが研究所かを出て行つてから大分経ち、学園都市を取り巻く季節は冬から春へと移ろつとしていた。

肌を刺すような冷氣は徐々になりを潜め、街を往来する人々もマフラーや手袋といった防寒具を身に着けているのは疎まばらで、春らしい格好をよく目にするようになつた。

だが春といつても完全に冷氣が去つたわけではなく、朝はやはりというか肌寒い。マートやジャケットを羽織つている人はまだ多かつた。

しかしそんな冬と春の変わり目など知らぬとばかりに、黒髪紅眼の少女、力量変換クレイドルは合いも変わらず極薄着であつた。

クラスには必ず一人くらいは居るという、『冬でも半そでのやつなど当たり前だと言わんばかりにその少女の服装は薄く、その光景を傍から見ていた人はこぞつて考えられないというように顔をしかめる。

さらに彼女の異質性に拍車をかけるように、彼女の両手首・両足首・首・頭などには拘束具よろしく、見た目ゴツイ能力制限プロテクタが麗らかな陽射しを反射して、その金属色特有の重く暗い輝きを放つていた。

そんないろんな意味で外れた格好をした力量変換は、どこか当てがあるわけでもなくまばらな人波に身を任せて散歩を満喫していた。ようやく能力制限の調整が終了したのはつい昨日。結果的にこの

拘束具が機能している限りは【変換】の効率が大幅に削られ、【吸収】以外の能力は実質的に封印されてしまった。

これは上層部側の意見によるもので、『一方通行と違いまだ中学生の彼女はまだ精神が幼く、それが原因で起きる想定外を回避するための最低限の処置』であり、次は直下型地震などでは済まない可能性を起こされない為の予防策である。

それほどまでに彼女の【変換】されたエネルギーが齎す脅威は異常であった。

「……ふむう、暇だなあ……」

人波から外れ、歩いていた歩道に何本か生えている街路樹の内一本の下で、ふと立ち止まつた力量変換はため息と共にそう呟いた。

いつも研究所の中にいる時は一方通行と駄弁つたり弄つたりして暇だとは感じなかつたが、この前に『重要な実験』とやらで出て行つてしまつて以来、彼女を構う人間は研究所内から居なくなつてしまつた。

研究員が見てているのは力量変換ではなくパソコンが弾き出す数値やデータ、演算結果などがほとんどであり、良い意味でも悪い意味でも彼らは仕事熱心で、全くと言つていいほどに取り付く島ももなかつた。

そのかわり能力制限を身につけ、完全下校時間内に研究所に戻るという約束さえ守れば、力量変換をどこまでも自由にさせてくれていた。

だが研究所の内も外も同じで、彼女の灰色の時間を塗りつぶしてくれそうな興味惹かれるものはなかつたようだ。何回目かの今回で

確信したらしい。

「全く、一方通行も一方通行だよ。引っ越しでからなにも連絡してくれないし。ボクがどれだけ暇が分かつててこんなことを」

いつの間にか一方通行への愚痴にすり替わっていた独り言をブツブツ呟いていると、目の前の視界にどこかで見たような人物が一人、こちらに迫っていた。

「あれは？」

一人は茶髪の自分とさほど身長は変わらないツインテールの女の子、一人は頭に花がついた髪飾りをつけた、自分より2~3歳年下に見える女の子。

「「「あ」」」

思い出そうとして記憶の海に素潜りして、誰なのか気づいたころにはもうすでに遅く、すぐ目の前でツインテールの彼女は腕を組んでまさに「王立ち」していた。

そのよこで花飾りの女の子はそんな彼女を見て、きょとんとしている。

「取調べから逃げ出してどこに消えたかと思えば、こんな所で油を売っているとは……風紀委員も舐められたものですわね」

「ア、ハハハ……」

なにかとても威圧的なツインテールの彼女から後ずさるようして、半歩、また半歩と距離をとる。

誰かと思えばあの時、郵便局の強盗を捕まる時に一緒にいた足を怪我していた女の子であった。花飾りの子は確かに外で必死に助けを呼んでいた子のはずだ。

「や、やあ久しぶり、じゃボクは用事があるか？」

「お待ちなさい」

ぐいっと首につけてある能力制限を掴まれ、元居た場所に引き戻される。その様子をボーっと見ていた花飾りの女の子はようやく思い出したのか、「あー！」と大きな声を出して驚いた。

「あなたは郵便局の時の……！」

「やつと思いましたか……鈍いですわよ初春」

初春と呼ばれた花飾りの女の子は怪訝そうに睨んでくるツインテールの女の子と力量変換にガバッと頭を下げた。

「すいません白井さん、あの時はすごく混乱してて……」

えと、どこで力量変換を見つめて固まってしまう。おそらく名前を聞きたいのだろう。そう感じ取った力量変換が名前ぐらいは名乗つておこうと口を開きかけた時、白井と呼ばれたツインテールの女の子の方が先に喋りだした。

「みすくあいこ。  
「湾千五百。あなたのお名前はそうでなくて？」

「へ？」

予想をはるか斜め上を音速でぶつ飛んでいく白井の言葉に、思わず力量変換は寸頓狂な声をあげた。

そういえばこの前に担当の研究者に、『学校に通う際の名前と個人情報』について何か言っていたきがするが、全く今の今まで忘れていた。

どうやら力量変換は研究所外の学園都市内では『みずくまいは湾千五百』というらしい。なんとも奇妙な名前を付けられたものだとのんきに思つてしまつた。

「あなたが逃げだした後、古法先輩に頼んで少し書庫パンクを調べさせてもらいましたの。もちろん、能力も筒抜けでしてよ？」

よほど逃げられたのを根に持つてゐるのか、無い胸を張つた彼女は得意げな顔で語りだした。

「能力名は力量変換ケイリュウヘン。Level 5の超能力者。学園都市で八人の超能力者の中で序列は2位。中々の超人ですわね」

「れ、レベル5！？」

白井の得意げな説明を聞いた初春が突然大声をあげた。その拍子に何人かの通行人が振り向くが、彼女は構わずに力量変換に詰め寄る。

その目は爛々と輝いていて、得物を見つけた猫、と言つた感じだ。

「千五百さん、レベル5なんですか！？すごいですビックリしました！レベル5って能力を笠に着た上から目線のいけ好かないヤツだと思ってましたがその点千五百さんは全然違くて優しくて困つてる人を助けてくれる立派な人なんだなって！」

ど」から沸いてくるのが分からぬその言葉と熱意に気圧されかけた白井と力量変換は、ハツと我に返つて途切れていった会話を再開する。

「しかも進学先は常盤台中学。まさかあなたと一緒に通つことになるなんて」

「「えー?」」

白井の言葉に力量変換は「一緒に通つことになる」に驚き、初春は「進学先は常盤台」に驚いた。

「ほわあ、まさかそんな雲の上の人と知り合つになるなんて……」

そして初春はこの短い時間に何度も驚愕の事実を知つたことで脳の処理能力が限界に来たのか、頭の上から「ピュウ」と音が聞こえてきそうな様子で沈黙してしまつた。

「……まあ、初春のことは今は置いておきましょう……。これはあなた的情報を見せてもらつていた時に思つたことなのですが……」

なぜかそこで白井は黙つてしまつた。何かこれは聞いていい事なのか悪いことなのか悩んでいるといった様子だ。

「……ふむう。なんか一通りばれちゃつてるみたいだから、何でも訊いていいよ」

仕方なく力量変換がその真剣なよつすの白井の雰囲気に居心地の悪さを感じて先を促すと、コクリと頷いた白井がよつやく口をひらいた。

「……なぜあそこまでセキュリティが幾重にも張り巡らされているんですの？たかが学生の個人情報だといつて。あれはまるで」

「それ以上は深入りしない方がいいよ。そのほうがいい」

白井が最後まで言い終わる前に力量変換は口を挟んだ。自分でも驚くくらいに殺氣を帯びたその声色は、思考停止していた初春でも氣を取り戻すくらいに、直接耳に響くような声であった。

「……「ホン。要するに、ボクは謎多き乙女ってことでいいよね？」

暗く固まってしまった空気を解凍するよつて、力量変換はせつての声色とは打つて変わつてとても明るい声を出すように努めた。

その声で本当にあたりの空気が解凍できたのかは分からないが、白井は飛びかけていた意識を取り戻し、明るく笑う力量変換を見てつられて笑ってしまった。

「そうですね。人様の問題に首をむやみに突つ込むのは無粋ですわね」

やつと思回路が再起した初春は、田の前で笑いあう一人と今まで何が起きていたかが分からず、ただおろおろするしかなかつた。

田はまだ高く上つたまま。程よい暖気が学園都市を包む、そんな毎の出来事だった。

## 第8話 巣立つた鳥が残した巣（後書き）

やつとりや黒子、初春が登場へへ；

黒子の喋り口調はなかなか難しい……精進せねば。

主人公設定にあるにもかかわらずほんの空氣になにかけていた力量変換の名前『湾 千五百』。

非常に扱りやすい名前です。みなさんもぜひひづりやえ

ご感想、ご意見、お待ちしております。

でわまた次回 ノシ

## 第9話 残された巣の行く末（前書き）

なんとも緊張感のない話がこれからも続きそうですね……。

まあ、これは力量変換の性格からかもしませんがw

## 第9話 残された巣の行く末

「それにしても、貴女のファッションセンスには驚かされますわ」

「ふむう？ ビーウーこと？」

その後、やつと再起動した初春をつれて今は三人共に学園都市内をフラフラとしていた。

しかしこれは別に何もすることが無くとてもなく暇だから、という力量変換の呑気な理由とは違い、白井と初春は風紀委員の仕事として巡回しているだけである。

むしろ、その巡回中に力量変換に出会つて今に至ると書いたほうが分かりやすいかもしない。

「みすくま 湾さん、気づかないんですねか？ やつから通りすぎた人、チラチラ見ますよ？」

何のことがさつぱりという様子の彼女に、初春は白井に代わってそれとなく指摘した。

今彼女、力量変換の格好はある種とても奇抜であった。上は本来、夏の昼間に良く見かけるような薄手のキャミソール。下はこれまた夏の昼間に見かけるような短いジーパンである。

そしてそのジーパンから覗く、日焼けなど知らないような白い生足の先の両足首には、今さっきまで鎖に繋がれてましたという感じの鉄輪が威圧感を放っていた。

無論、その鉄輪は両手首・首・頭の髪留めにも施されている。

「貴女はビ」その殿方にでも監禁でもされていたなんですか？」

そんなファッショーンで街を出歩く彼女をみて、呆れたという風に白井は頭をかぶりを振る。

「監禁かあ……。うん、いい的ついてるね？」

「…………まあ？」

だからだろうか。そんな横を歩く奇抜な格好の彼女の言葉で、<sup>ジ</sup>風紀委員一人は簡単に思考停止した。

全身にはついいさつきまで鎖でガツツリ繋いでましたと言わんばかりに主張する鉄輪。窓のない部屋に住んでましたと言わんばかりの白い肌。そして、見た田年齢とは対応していない言葉使い。

「は、ははは……。お、お冗談を。貴女がそんな格好で言つたら、洒落になつませんの」

「や、そうですよー。湾さん、冗談キツイですよー！」

そう言つて無理に笑う新人の風紀委員一人。

しかし彼女の発言を冗談だと言つて片付けるには物的証拠が余りに多すぎる。普通に考えたら真つ先に保護する対象かもしれない。

「だつてせんせー（研究員）、バレるといけないから（実験的な意味で）外には決して出るなつて言つたから、仕方なく家ー（研究施設）の地下にずっといたんだもん」

「…………」「

ま、今は自由だけだね。といつ彼女の最後の言葉は、この風紀委員一人には届いていなかった。

まさかの、目の前にいる気の抜けた奇抜ファッショントレーナーは、監禁少女であった。

その事実だけが二人の思考を支配し、同時に同じ判断を下した。

「「湾さん、現時点であなたを保護します（しますの）！」

「……え？」

力量変換はそのままズルズルとなくやら慌しく連絡を取る一人に引きずられて、そのままどこかへと連れていかれた。

（まあ、いいかのかな？）

そんなお氣楽思考が後々、本人も予想していなかった事態に発展するとは思いも知らず。

「で、この子が連絡で聞いた監禁少女？」

「「はい（ですの）！」」

あの後そのままズルズルと引きずられるままに連れて行かれた力量変換は、二人が入つていったビルの中のやたら書類が積み上げられていて、事務所的な空間に連れてこられた。

そしてなぜか眼鏡をかけた落ち着いた雰囲気の女性を対面にして、事務椅子に座らされている。

「え、えと…。これは、一体どういう状況で」

「初めてまして。混乱するのも無理ないわよね。ずっと閉じ込められていたんでしょう?」

そろそろ楽観視するのはマズイ状況かもしれない、と力量変換が口を開きかけた時、タイミング悪く白井が先に話はじめた。

「そうですの。全く、本人があんな調子なので気づくのが遅れましたわ」

「いや、ボクは」

なんとかすごい誤解をしているらしいに目の前の三人に弁解しようと言葉を続けようとしていると、今度は初春が口を挟んだ。

「なんで早く言ってくれなかつたんですか!?

湾さんは私の恩人なんですから、遠慮なんてしなくてよかつたのに!」

「えと、話を」

話がどんどんこんがらがつてきている。もつ楽観視などしている余裕などはない。早く何とかしないと何か大変なことになりそうだ

と、力量変換の本能が告げていた。

しかしながら当事者である力量変換の言葉は一切聞かず、口を挟んだ二人の意見を聞きながら、目の前の優しげな眼鏡女性はうんうん頷いていた。

「とりあえずあなた達の言つていたことは分かつたわ。確かに、この子はそんな雰囲気するわね」

（雰囲気つて……）

もう力量変換は目の前で起きていたことに苦笑いするしかなかつた。ハハハ……と乾いた声が事務室に弱々しく響く。

「それじゃ、私は本部にこのことを連絡していくわ。監禁少女の保護なんて初めてだしね」

言い終わると同時に、目の前に座っていた眼鏡女性は携帯を片手に立ち上がり、事務室の隅に引つ込んで行ってしまった。これから本部とやらに連絡するのだろう。ここからでは姿は見えないが、話声はかすかに聞こえてくる。

「さて、これで大丈夫ですわね。全く、貴女つて人は……」

「そうですよ！ 同い歳なのに水臭いです！」

そんな仮にも監禁されていた少女にかける言葉とはかけ離れた言葉を浴びせられながら、力量変換は自分が招いてしまったこの状況を打破する方法を考えていた。

しかし結局はこの状況下で自分が何を言つても通じないだろうと

察した。まず自分は監禁されてはいなかつたと言つても、誰も信じてはくれないだろう。

「おまたせ。本部への連絡とその対応を仰いできたわ

そう言つて眼鏡の女性は事務所の隅つこから帰つてきたと同時、携帯を懐にしまいながら待つていた三人に告げた。

「あなた……えーと、湾さんだつけ？ 湾さんは今日から、一時的にここに預かることになりました！」

「…………は？」

たつぶつ三秒。そのくらい、力量変換は目の前にいる眼鏡の女性から発せられた言葉を理解するのに費やした。おそらく、傍から見たら田が点になつてているだらう。

「あ、でも安心して。あなたが常盤台に入学するまでの話だから、あくまで一時的。ここなら安心でしょ？」

「はあ…………？」

「まだ目の前で眼鏡の女性が何か嬉々として説明しているが、ほとんど力量変換の耳には入つてきていなかつた。ほとんど放心状態で、自分の置かれている状況を捜索するのでやつとだからだ。

「彼女は立場上、あまり表では田だつた行動はとれない。外出だつて能力制限を着けているからであつて、入学なんて一方通行の助力による、特例中の特例である。

(まあ、研究員が良いつて言つたみたいだし、いいのかな?)

おそらく彼女が連絡した本部とは風紀委員の本部であろう。それならば、力量変換の話題が出た瞬間に、学園都市の上層部にも話は通つているはずだ。と力量変換はそう解釈した。

まず、そうでないと自分が納得することができない。

「とりあえずもう外は暗いから、今日付けでここで保護するわね？ ほら一人共、新しい住人のためのスペースを作るために片付けるわよ！」

「え？ は、はあ…。了解ですの」

「分かりました！」

嬉々とする一人は、未だ状況が飲み込めていない一人を連れ立つて、季節外れの大掃除を始めた。

どうやら今のこの状況は、自分の居場所はここには無いと判断し、力量変換はとりあえず外で待つことにした。

「……一方通行、今どこにいるんだよう……」

全てのことの発端である、出て行つてしまつた彼を呪うように力量変換は空を見上げた。

真っ赤に焼けた太陽が、少しきつくなつた夕陽を輝かせながらビルの向こうに沈んでいく。それと同時に周りのビルの窓は眩しく輝きを放ち、都会ならではの美しさをさらけ出す。

そんな夕陽に肌がやられないようにしつかり紫外線などは【吸収】しながら、力量変換は日に入つてくる強い西日に目を細める。

「……これからは、ちゃんと物事を考えて行動しよう」

そんな、一人の世間知らずな少女がまた一つ成長した、肌寒くも暖かい、初春の夕方での出来事であった。

## 第9話 残された巣の行く末（後書き）

最近、力量変換と打ち止めって、キャラ位置被つてるよなあ……と思つ、今日この頃。

お陰様で、お気に入り件数がすぐ伸びてます。アニメ第一期が始まつたらまた伸びるのかなあ……（にや

ゲフン。力量変換も無事に保護され（？）、物語も原作に近づきつつあります。

駄文ですが、これからもよろしくお願ひします。

「意見、」「感想、お待ちしておつまつす。

でわまた次回 ノシ

## 第10話 路地裏事件？（前書き）

お気に入り登録が70件を超えました。

はわわ、みなさまありがとうございますーこれからもよろしくお願  
いします！

ちなみに、主人公設定にて力量変換クレイドルこと、みずくまちいき湾千五百のイラストを載  
せさせていただきました。

よければご覧下さる（――）m

## 第10話 路地裏事件？

「千五百さん、何か飲みます？」

「ありがとうございます、かざりー。じゃあコーヒー砂糖大盛りで！」

了解です、と頭に『今季節は自分達の時代だ』と言わんばかりの花飾りを付けた少女、初春飾利は注文を聞くと、トコトコと部屋に備え付けてある「コーヒー・メイカーに向かっていった。

そしてその注文をした本人、湾千五百こと力量変換は、先週に季節外れの大掃除によつて大量の書類と引き換えに確保されたスペースでパソコンに向かっていた。

理由としてこの部屋の実質管理人、固法美偉に「身の上の、外の世界にはあまり詳しく無さそつだからこの際に」と言って本人から渡されたからだ。

といつてもパソコンは大掃除によつて発掘されたお下がりであり、初春達が使つているものと比べると若干浮いて見える。

「おまたせしました。砂糖大盛りの加減が分からなかつたので、出来るだけ多く入れてみましたけど……」

「ん……。ふは、うん。全然おつけだよ！ かざり、ありがとうございます」

「ふふ、どういたしまして～」

千五百が激甘コーヒーを一口飲み、淹れてきた初春にいつもの太陽のような笑顔を向けると、初春も自然と笑みがこぼれた。気のせ

いか頭にある花達も嬉しそうに見える。

「のとてつもなく平和でゆっくりとした時間が流れているこの部屋は、初春達が所属する風紀委員ジャッジメントが詰めている支部の一つ、第一七七支部である。

本来ならばこの場所は風紀委員以外は立ち入りを禁止されており、入室する際には指紋・静脈・指先の微振動パターンをチェックされ、認証が降りないとロックが外れない厳重なセキュリティが敷かれている。

だが千五百は例外で、先週に少女監禁から保護した少女を一時預かっているという形で出入り自由とされている。もつとも、誤解といえど保護されている身なのでそんなに自由に行動は出来ないが。なので、基本的に千五百が外出する時の用事は、研究所に能力制限クラウドの調整を受ける時や、精神安定剤を貰いに行く時程度である。

千五百は淹れたてで熱を帯びたマグカップの熱を冷まさない程度に【吸收】しながら、チビチビと飲んでいく。

今的第一七七支部には、パソコンに向かって調べ物をしている初春と、初春から貰った激甘コーヒーを啜すする千五百しかいない。いつもは一緒に駄弁っている白井や固法は昼間の巡回に出かけてしまっている。

「……暇だなあ」

結局はそういうことだった。

はじめて触れたパソコンも初春に基本的な操作を教わると、その後はするするとスポンジが水を吸うかのように技術を吸収し、あつという間に白井のP C技術を抜き去り、「信じられませんの……」と呟かれてしまったほどだ。

彼女、湾千五百は超能力者（レベル5）。しかも学園都市に8人しかいないLevel5の序列で2位の座を勝ち取っている。

これは元々演算能力が高いLevel5の次席であり、学園都市で一番目に頭が良いということを表している。見た目は幼くても、頭脳は並みの大人などではないのだ。

そんなどこかの名探偵のような頭脳を駆使すれば、一週間もあればパソコンの使い方など熟知してしまう。そこから入る情報も然り。大体の予想はついてしまうのが、この天才少女の実力であり、今の悩みのタネであった。

「久しぶりに外、行つてみようかなあ……」

誰に言つてもなく呟いた後、チラシと初春の反応を窺う。<sup>うがく</sup>初春はなにか思い悩んでいるらしく、うーんと唸つてているだけでこちらのことは気にかけてもいないうだ。

「あ、そうだ。ネットで新しく見つけたケー・キ屋さん、アレ食べに行こうかな~」

「……」

ピクシとこちらに反応したような気もしたが、「ガマンシナキヤ、キヨウジユウニオワラセナイト」と、すぐにカタカタとキーボードを叩く音が聞こえてくる。どうやら今回は甘いもので釣れるような調べ物では無さそうだ。

「じ、じゃあ、行つてくるね~？」

「あ……」

残っていたコーヒーをグッと飲み干して、座っていた事務椅子から立ち上がる。それと同時に、先までパソコン画面の文字を追っていた目がどこか悲壮感を漂わせながらこちらを見つめていた。

「私は、生チョコレートケーキをお願いしますっ！」

「ボクはまだビックのケーキ屋さんに行くとは言つてなかつたんだけどな……」

アハハ……とその決意に満ちた初春の顔に気圧されながら、思わず乾いた笑みが漏れる。

今日も第一七七支部はいつもの通りだつた。

「はあ、今日はついてないです……」

パタン、と千五百が開け放つたドアがしまる音を振り返らずに確認すると、再びパソコン画面との対話を始める。

今、初春が調べているのはこの「じゅう名学区で起きているある事件についてだった。

その事件の特徴は、被害者の証言と現場の状況に食い違いがあるということと、被害者のほとんどが

単独、一人きりの時に襲われていることだった。

被害者はその時の状況を「複数のヤツにボコられた」と言つているのに対し、現場検証では被害者と犯人の一人分の足跡しか確認できておらず、その犯人の足跡も毎回違うものに変わつていて、その靴を売つている店から特定するには種類たぐいが多すぎて特定できない。犯人は手袋をつけているのか指紋の類も一切検出されず、難航している最中だった。

「……千五百さんの外出を止めませんでしたけど、大丈夫ですよね……？」

今思うと、何となく危ないような気がしてくる。冬も完全に抜けきり、春になつた今は色々と事件が起こりやすい。今回のこの事件もその類の一種である可能性は高いが、突発的に犯行に及んだにしては慎重であり、やはりこれは計画的なものだと伝わつてくる。

「ま、まあ千五百さんはアレでもLeave15ですし。すぐ帰つてきますよね！」

友よりも突発的ではあるがケーキを優先してしまった自分を恥じながら、とりあえず花飾りの眩しい少女はケーキと友達が無事帰つてくることを祈りつつ、作業に戻つた。

「ツクシユ。……うう、花粉症かなあ……」

その能力柄ありえない持病の可能性を心配しながら、千五百は思わず止めてしまった足取りを進める。

実はケーキを買ってくるというのは初春を外に連れ出そうとした際にとつさに思いついた嘘で、実のところはケーキを買う予定などこれっぽちも無かった。

しかし頼まってしまった手ぶらで帰るわけにもいかず、千五百はただいま絶賛ケーキ屋搜索中であった。

「かざりが言ってたケーキって多分あそこのことだよね？ 前に羨ましそうに見てたし……」

もう彼女は自分がどこに居るのか分からなくなるということは無い。パソコンで学園都市の立体地図を完全に記憶し、とりあえずの常識も補完してみせた彼女はやはり天才といつべき部類であろう。

今は歩きながら自分の現在位置の確認と、そこからケーキ屋に向かう最短ルートを計算中であった。

「ふふふ、名づけて『ちこほナビ』……何言つてんだろ、ボクは

ズーンと影がつきそうなほど血口嫌悪によつて肩を落とした様子は、サンタクロースの存在を主張しつづける子供にその実態を知らず内にばらしてしまつた親のよつに重く暗かつた。

「やっぱり一ートよろしく何もしないで部屋に閉じこもつてるのはマズイね。次から風紀委員のお手伝いとかしようかな……？」

そうして今後の生活プランを組み立てていると、ケーキ屋への最短ルートの入り口であるジルとジルの間に着いた。

その裏路地は今まで千五百が歩いてきた歩道と比べると、完全下校時間を過ぎた深夜の学園都市のように静かで空気が沈んでいた。

「……何か見事に『ここを通りたら事件に巻き込まれますよー』って言わんばかりの雰囲気だね……」

「」の前の出来事で楽観視は危険であると学習した千五百は、とりあえずキヨロキヨロと裏路地の様子を見回してみる。

ビルとビルに挟まれてできたその通路は薄暗く、奥に行くにつれて闇が濃くなつていいよつた。脇にゴミが捨てられているのか、少し生臭い。

「……ま、やっぱり大丈夫かな」

しかし性格とはそう簡単に変えられるものではなく、結局はいつものなんとかなる精神でその裏路地に一步踏み出した。

そこからは一回も立ち止まらず、スタスタと歩いていく。生臭い臭いは鬱陶しかつたため、すでに【吸収】で臭いをエネルギー変換していた。

スタスターと外回りのサラリーマンよろしく早歩きで歩いていると、突然眩しい陽射しが暗闇に慣れた目に突き刺さった。

どうやら裏路地を無事に突破したらしい。ビルとビルの隙間から突然現れた彼女を見た通行人が、少し注目したあと何事も無かつたように通過していく。

「まー、いつ何回も事件に巻き込まれるのはボクの役回りじゃなかつたってことだよ。ウン」

と言いつつも内心何事もなかつたことにホットしながら、もうすぐそこにある田当てのケーキ屋に向かって歩き出す。抜け出た裏路地から覗く、千五百に向けられた視線に気がつかないまま。

「ありがとうございましたー」

程なくして初春に頼まれていたケーキとその他数種を買った千五百は、ティクアウト用の白い箱を持って店を出た。

午後に出かけたからかすでに日は暮れかけていて、西田によつて影が横に伸びている。

「さて、保冷剤が解けないうちに、チャツチャと帰るかなー」

右手で持っている白い箱のケーキの重みに期待を膨らませながら、千五百は来た道をゆっくり歩きながら戻る。

すでに路地裏を歩いているが、せつきのように早歩きで歩いたりはしない。いつもの歩幅、いつもの速度で歩いていく。

「あ、臭いを【吸収】するの忘れてた」

鼻につく嫌な臭いの原因である臭素を【吸収】演算の中に岭もうとしていた時、背後でガサガサッと音がした。

「？」

突然後ろから聞こえた音、思わず立ち止まり、振り返る。ここは誰も通ることは無いはずの裏路地。不良たちがこうこうとこひを闊歩し始めるのはまだ早い時間帯のはずだ。

「……ネズミかな？」

裏路地だし、と一人納得した千五百はその場から歩き出そうとした。

その時だった。

ドンッ。

「ふえっ、うわああー!?」

突然、再び背後から、今度は衝撃によつて千五百は吹つ飛ばされた。その小さい華奢な身体が地面に叩きつけられ、「ロロロロと転がつてビルの壁にぶつかつて止まつた。

この「」『実験』や平和な日常によつて【吸收】の能力が鈍つていたのか、完全にぶつかつた時の衝撃を【吸收】しきる』ことが出来なかつた。

「ぐっ、何い……今の?」

【吸收】仕切れなかつたダメージによつてぐらぐらする身体を無理やり立ち上がらせながら、自分が何かにぶつかつた場所を見る。するとそこには、自分よりかは身長の高い、セミロングに伸ばした茶髪の少女が立つっていた。少女は立ち上がる千五百を見つめながら、なにかボソボソと呟いている。

「痛つ……。もしか、ボクがダメージを食らつたのは初めてかも。結構効くね……」

彼女の能力、力量変換の一つである【吸收】クレイドルは、どんなエネルギーであつても必ず全て吸収しきる能力を持つ。これを展開している限り、たとえ陽電子砲ボジトロンランチャーであるうが核ミサイルであらうが防ぎれる」とは容易い。

しかしそれは展開している間だけの話であつて、そうでなければ

ただのか弱い少女であるが。

現に田じるの平和に慣れきつて【吸收】が薄くなつていた彼女は、見た目同じ年の少女に突き飛ばされただけでこのダメージである。

「でも、もう大丈夫。再演算終了。ボクに何の用か知らないけど、急に後ろから突き飛ばした報いを」

わあどうやつて謝らせてやつのかと彼女をしつかりと見据えた時にきびいた。

右手にあつたはずの期待膨らむ重みが無い。

「え。……おちか」

目の前に突つ立つて いる少女の足元を見る。突き飛ばされた時に一緒に被害をこうむつたのか、そこには無残な姿に変わり果てた白い箱とケーキがあつた。

ପାତା ୧୫୮, ମୁଦ୍ରଣ କରିବାର ତାରିଖ

様子がおかしい千五百に思わず声をかけてしまった少女は、彼女の悲痛な叫び声によつてその声をかき消された。その少女のことなどお構いなしと言つた様子で千五百は現場へと走り寄る。

「ああそんな。ケーキがある。かざりに頼まれたケーキがある。」

「え、えっと、ちょっとちょっと。私のことをほつといて、その汚く潰れたケーキの心配してるわけ？」

そんな彼女の言葉に、千五百はガバッと顔を上げた。その顔は暗闇でよくは見えないが、方がワナワナと震えている。

「ま、いこや。じつにじのアンタには「ドウヒョウ」と伸びてもらうワケだし。覚悟は……」

「できるよね？ 知らないテメー？」

「今からじゅもう完全下校時間近くだからお店は閉まっちゃってるだろうし手ぶらで帰つたらかざりになんて言えばいいのか分からないしこんな状況にボクを立たせたお前が弁償しちコンチクシヨー！」

自分で良くなれないまま突き飛ばした相手に向かつて悲痛な叫びを浴びせると、その少女は何かメンドクサイ相手を選んでしまつたなどバツが悪そうな顔を浮かべた。

「ああもつメンドクサイ……わざと済ますからちょっと黙つてろ……！」

「何……？ 逆ギレ……？……つて」

明らかに逆ギレた少女がそう言い放つと同時に、少女が立っている

姿が段々とにじみ始め、言い終わると同時にそれは起きた。

ぼやけた少女を中心にして左右から二人づつ、それは少女の姿が横に平行にスライドするように分かれた。

細胞分裂を思わせるそれは、目の前にいたはずの少女が五人に増えると同時に止まり、そのどれもが姿かたち、服装も一緒であった。

「分……身……！？」

千五百は驚きを隠せないでいた。メタモルフォーゼ肉体変化という肉体変形の能力者はパソコンで見たことはあつたが、分身する能力者など聞いたことも見たことも無かつたからだ。

そんな信じられない物を見たという様子の千五百を見て、少女はニヤツと不敵な笑みを見せる。

「「「「そつそつ。ちょっと私の能力を見た奴らは大体そんな反応をするんだよね」」」

ケラケラと少女達は笑うと、顔を引きつらせて固まつたままの千五百を前に体勢を低くして身構える。

「「「それじゃちょっと、私の練習台になつてもらおうかなつ」」」

言い終わると同時に千五百へと殺到する。

力量変換の初となる『実験』外の戦闘が始まつとしていた。

## 第10話 路地裏事件？（後書き）

常盤台中学への入学前にちょっとした事件勃発です。

はたしてケーキの運命やいかに！？ ……違いますかそうですね（ 、 、 、 、 ）

ご意見、ご感想、お待ちしています！

前書きで書いた挿絵についても感想などをいただけたら嬉しいです。

でわまた次回 ノシ

## 第1-1話 路地裏事件？（前書き）

おかげさまでお氣に入り件数が90件をこえました！

本当にありがとうございます！

これからも精進していく所存です（・・・）ハビシ

「 「 「 はあつー 」 」 」

少女達は千五百との距離を一瞬で縮め肉薄すると、間髪いれずに右ストレートを放つた。それは人間の腹部、肝臓よりの場所へと突き刺さる。

それは人間の弱点をついた、千五百のような女の子に放つには必殺にも匹敵する威力を持つ。殴られた瞬間に昏倒して、気絶やらするはず。そう少女は確信していた。

…… そのはずだつた。

「 「 「 えつ 」 」 」

自分の勢いと体重移動によつて重みを増した少女の拳は、確かに目の前の少女の腹部、肝臓のあたりにヒットした。

しかし、何も手ごたえがないのだ。

人を殴つた時に感じる力んで硬くなつた筋肉や、唯一骨が無い腹部特有の反発力。それらがすべて全くと言つていいくほど感じられない。

これではまるで……。

「 ピックリした？」

「 「 「 …… 」 」

今まで田の前にいた少女を殴った時のポーズのまま固まっていたことに気づき、少女達は後ろに飛び退いた。

少女達は自分達の拳を見る。能力をうけて変化させられた感じはないし、いつもの、路地裏に群がる不良達スケルアウトをボコっていた時と同じ拳だ。

「影分身かあ。これじゃ、本人がどれか分からぬ……」

「 「 「 お前、 一体……？」 」

「アハハ。ふむう、困った」と頬をかいている田の前の少女、この現象をおこした本人であろう彼女に疑問を投げかける。すると田の前の少女はその言葉を聞いてにやつと笑い、コホンと一つ咳払いしてからペラペラと説明はじめた。

「そうだね。簡単にいうと、ボクに触れた君の拳から運動量やその他諸々を【吸い取った】んだよ」

「 「 「 【吸い取る】？」 」

「そ。そだなあ……。スポンジに水をかけた、と思ってくれればいいのかな？」

そう言つと田の前の少女は地面に転がっていたビンを取り、少女達の一人に投げつけた。しかしそれは物体にぶつかることはなくその少女を通りすぎて、放物線をえがいたまま地面に落ちる。

「 ありや、影かあ …」

残念そつに肩を落とすと、次は地面に落ちていたカンを拾い上げる。

「 「 「 「 つ、ちよつとなめるなよー」 「 「

少女達は焦っていた。

彼女の話を鵜呑みにした氣は無いが、もしその話が本当ならば、それは彼女達にとって致命的なことだ。

少女達はあくまで『幻影』であり、当たり前のよう<sup>ス</sup>に物体に触れる事はできない。よつて本体である一人がその『幻影』に紛れ込み、相手の不意打ちを狙つて攻撃する。

それが封じられたのだ。何人も<sup>ス</sup>不良達を倒して<sup>ス</sup>培つたこの<sup>ス</sup>圧勝パターンが通じない。そんなことがあつてはたまらない。

そんな焦つた思考が彼女を前へと押し出したのだ。拳を振り上げて目の前の華奢な少女へと振り下ろす。

今度は顎を打つた。しかし、また手こたえはない。一歩も動かず<sup>ス</sup>に攻撃を受け止めている少女がカンを振りかぶつた。

「 「 「 「 つ、

距離を取るためにもう一度後ろへと飛び退く。その時に彼女が投げたらしいカンが『幻影』の一つを突き抜けていった。

「 これも違つ……と。おーけー」

「「「お前……、なんでちよつと攻撃してこなーのー?」「」

何かを覚えているような仕草をみせる彼女に、少女達はおもわず叫んだ。あれは挑発だとは分かっていても、それを無視することはできなかつた。

「え、だつて……。できないもん。攻撃」

「「「……は?」「」

「だつてボクの【攻撃】は、君を消し飛ばしちゃ「い」とになるから……」

田の前の少女は、なぜかとても悲しそうに呟いた。だが逆にその言動、仕草が少女達の何かに触れた。

ピチッと、頭の中で何かがキレたような音が聞こえた気がした。

「「「はあ!? 何その上から物を言つよつの言葉。自分は弱い者いじめはしませんつてか? 舐めるなよクソがあー!」」

瞬間、今まで群体で行動していた『幻影』達が一斉に分散する。完全に自分達をなめきつたような言葉にキレた少女達は、それぞれの行動がバラバラだ。今までのきれいに揃つた行動とは違い、もう本体がどこにいるかなど把握できない。

「わ、わ。ゴメン、なにか怒らしちゃつた?」

「「「うるせえつづつてんだよー!」「」

バラバラに走りまわっていた少女達はそのまま一斉に千五百へと

殺到する。それぞれが殺氣をまとい、握りしめた拳を振り上げる。

「まあ、作戦通りなんだけど」

「「「なつー?」」」

襲いかかってくる少女達の中、千五百は殴つて来た少女の本体に的確にカウンターを決めて見せた。

千五百の拳は小さいが、的確に人間の腹部の弱点を突いている。

「があつ……あ……」

飛びかかって頭をなぐる恰好のまま、その腹には千五百のストレートが刺さっている。『幻影』の能力を使うことが出来なくなつたのか、電球の明かりを消すように分身たちは一瞬で消え去つてしまつた。

「はあ、はあ……。あー怖かつたあ~」

少女が戦闘不能になつたことを確認すると、千五百は緊張の糸が切れたように、地面が汚いこともお構いなしにペタんとその場に座り込んだ。

千五百は元々、この少女のように殴る蹴るなどの戦闘はしない。研究所ではもっぱら遠距離からの【射撃】がほとんどだからだ。スナイパー・ライフルを持ちながら敵に接近する狙撃者はいないのと同じだ。

よつて今の千五百の行動は、その面から見れば一種の賭けであつた。

少女は千五百の肩に乗つたままだが、肩にかかる体重は【吸収】

しているので重みは一切感じない。

「確かにボクは君のこと挑発したけど、あそこまで怒るなんて

」

「…アンタなんかには、分からぬわよ」

ビルの壁にもたれかかるように千五百ちいばが地面に少女を降ろすと、未だダメージが残つているような弱々よわよわしい声で、しかし憎々ぞぞしげに呟いてく。

その瞳の中には、羨望と憎悪が渦巻いているのが見えた。

「私がなんでこんな」とをしているかなんて……。アンタみたいなLeve15なんかに！」

「つ、え……？」

突然声を荒げた少女に、千五百ちいばは驚きを隠せないでいた。いつの間にか少女のその瞳からは先ほどの思いは感じられず、代わりに涙が浮かんでいる。

「何驚いてんのよ……。まさかちょっと気づいてないとでも思つてたワケ？　ふざけんじゃないわよ」

そう言つている間にも、少女の目からは涙が溢れ出ていた。その涙は頬を伝い、きれいとは呼べない裏路地の地面に落ちる。

「力量の【吸収】、地球には存在しないエネルギーでの攻撃。アンタ、湾千五百みすくまちいばなんでしょう。序列第2位様が、ちょっと私より小さかつたなんてね」

「むう……。君だつて相当な能力者だと思ひけど……」

「私は違つ。ちょっとそこいら辺に居る『eve12』だよ」

千五百に負けたことで心が安定しないのか、少女は千五百に怒鳴つた後、今度は自嘲氣味に笑つていた。

それでも少女から流れ出る涙は止まらない。涙を吸つた地面が深く色を変えている。

「私は……、常盤台中学に入りたかつた。勉強もして、能力の練習もして」

そこでふつと千五百は思いだす。彼女は最初に攻撃を仕掛けたとき、「『それじゃちょっと、私の練習台になつてもらおうかな』と口走つていた。

「じゃあ、これも練習……？」

「わう。いや、正確には“だつた”がちょっと正解かな

少女はビルとビルの間から見える夕焼け空を見上げ、ため息をついた。それは泣いていたからか、若干震えていた。

「さつきも言つたでしょ。私、Leve12なんだよ。常盤台は最低でもLeve13以上が入学条件。惜しかつたなあ。あと一つの数字で入学できたのに」

少女はその小さく切り取られた夕焼けに手を伸ばす。ビルとビルの間からみえる夕焼け空は、いつも見る夕焼け空と同じのはずなの

に、どこか遠く、届かない場所のよしにみえた。

「……でも、君のやつたことは間違つてこるよ」

「分かつて。いつの間にか能力の練習が憂さ晴らしに変わつてたことくらい」

少女は夕焼け空に伸ばしていた手を力なく降ろす。それでも涙を溜めて潤んだ目は、夕焼け空を見据えたまま離そうとはしていなかつた。

「……もういいよ。これ以上話してもちよつと私はアンタにハ当たるだけだし。ジャッジメント 風紀委員なり呼べば？」

「それは……嫌、かな」

「え？」と少女が千五百の言葉に驚いて夕焼け空から目を離すと、

いつの間にか目の前に立っていた彼女と目があつた。

千五百のその紅い瞳は、どこか決心と確信に満ちていた。

「君、常盤台に入るのに前科持ちつてちょっとまずいよ？」

「…………え？」

「だ、か、ら！ 入れるよ。常盤台」

千五百はズイツと、座つたままの少女に向けて手を差し出す。

少女は何が起きているのか先まで悲しみと諦めでいっぱいだった頭ではついていけず、千五百の顔と手の間をキヨロキヨロと少女の視線が往復する。

「ボクの私見だけど、途中君の分身がバラバラに行動したよね？アレって今までであつたこと？」

少女は千五百に挑発されてキレた時、今まで自分の周りをついてくる程度にしか動かなかつた分身がバラバラに別行動をした。

本来の少女の能力では自身の分身を作り、自分と同じ行動をとらせるので精いっぱいであつたはずだ。

最初は1体だけだつた分身も練習によつて徐々に数を増やし、最大4体まで出せるようになつた。それでもさつきの『本体とは違つた行動』はできなかつた。

「え……うそ……」

「いやはは、や、ボクもびっくりだよ。本来、分身に自分の行動を取らせつゝその本体も走りまわるなんて。それだけで演算キツツイだろうに……」

少女は胸が高鳴つっていた。しかし、本当に信じていのうか。今まで駄目だつたものがここまでできるようになるとは。少女は信じ切れずにいた。

「信じられないのは分かるけど、君の能力は間違いなく」level 3以上だよ。うん。そりじゃないとおかしいもん

田の前に居る少女はうんうんと何度も頷いて見せる。だが頷くたびに彼女の黒い髪が小さく揺れて、元気づけよつとしている違う彼女の仕草に、可愛らしさが見え隠れしていた。

「……はあ。まさか小学生に励まされたなんて」

「む、その言葉はいただけないね。ボクも今年で常盤<sup>じょうはん</sup>中学なんだけど?」

思わず少女は、そういうて無い胸を張る彼女を凝視してしまった。  
「いかが、どうみても自分とは身長差が離れ過ぎて、少なくとも  
2・3歳年下だと思つていたからだ。

「……セイはかとなくバカにしてるね?」

「いや、ちよつとやんなことせ……」

「セイはかとなくバカにしてるね」

セイ<sup>セイ</sup>はムスッと頬を膨らませながら、座つたままの  
少女の手をとり引っ張り上げた。  
と黙つても身長が足りないので、途中から自分で立ち上がつた少  
女を見上げる事になつてしまつたが。

「ふむ……」

その事実に不満げな視線を少女に向けて、少女はこの気ま  
ずい沈黙をどうにかしようと口を開いた。

「と、とつあえずお礼として……。私は深<sup>ふかい</sup>水<sup>いすみ</sup>曜<sup>すてら</sup>。まあ、あなたの  
名前<sup>なま</sup>ひとつと知つてゐるけど、一応聞いておいたつかな……」

「ふむ……。ボクは君の<sup>きみ</sup>とおり<sup>みずくま</sup>千五百<sup>せんご</sup>だよ」

よろしく、と2人はとりあえず握手をしてみる。しかしその後は千五百がお互いの身長差を自分で比べたのか、黙ってしまった。このままだとまた会話が絶えてしまうのは田に見えているので、水曜は黙つたまま恨めしげに自分を見上げていた千五百に話かけた。

「とりあえず……、『めんね。突然襲いかかって』

「ふむう、牛乳は飲んでるんだけどな……。ふえ？ ああ、そのことなら心配しなくても……」

とそこまで言つたところで、なぜか突然、ピシッと千五百の動きが止まってしまった。口を開いたままある一点を見つめている。

「あー……。ケーキのこと、『めんね』

「うん、大丈夫だよ。そつ、ダイジョウブ。……多分」

千五百が見つめる先には見事にひっくり返つて中身をぶちまけている白い箱があつた。どこから湧いてきたのか、すでに働き者のアリたちが列を成している。

もう、汚れがどうこうという問題ではなかつた。

「事情を説明すればかざりも分かつてくれると思つ」

「微妙なんだね。その間から察する辺り」

「とりあえず常盤台のことはボクにまかせて貰つていい？ 多分大丈夫なハズだから」

「うん。 その方が助かる。 ありがと千五百」

水曜から名前を呼ばれたのが新鮮だったのか、千五百はすこしくすぐつたそうな表情を浮かべる。

とりあえず今は今後の連絡をとる時のために、お互の携帯のメアドと電話番号を交換した後、路地裏にずっとといふことも無かつたので表通りへと出てきていた。

「やっぱりケーキちょっと買いに行こつか？」

「いいよいよ。 あのお店、完全下校時間になると閉まっちゃうみたいだし。 もう開いてないよ」

今は完全下校時間から十分ほどたつた頃だ。千五百が入った時は閉店の準備をしていたので、おそらく時間ぴったりに閉めるつもりだったのであろう。

それでもどこか申し訳なさそうな水曜に、千五百はわざと大きな

声で「わい」と囁いて、終わつたのに話題から強引に変える。

「じゃあボクは早速手回しに向かひナビ……、水曜はびひつかる？」

「……私は帰るよ。もひ練習をする」ともないしね」

「う言つ水曜の表情は、どこかすつきりしたような様子だつた。本当に今まで常盤台に入りたくて歎んでいたのだろう。そんな不安が吹つ飛んだ、受験生が張り出された自分の番号を見つけた時のようにうだつた。

結果は後で連絡すると約束して、この日せとつあえずそれの目的のために別れた。

すでに夕焼けは星空につつて変わらうとしていて、まつまつと星達も雲の間から見え隠れしている。

「今日は帰れないかなあ……」

そのまま研究所へとむかつ道の途中、千五百はポツリと呟いた。だがその言葉とは反対に、表情は嬉々としていて瑞々（みずみず）しい笑顔だった。

「……ケーキ、怒るだろ？　なあかんばつ

一瞬で十五匹の表情が萎えた。

どうも。自分の表現力のなさに絶賛絶望中の玉露飴です。

これは報告なのですが、田次にある『主人公の説明』を『オリキヤラの説明』に変更しようと思います。

誠に勝手ながらすいません。これも作者の計画性の無さが原因です。

というかいい加減、常盤台に入学しろやつて話。

正直スマン（・・・・）へ”

というか、常盤台に入ったら力量変換はなんて呼ばれるんだろう…？

譲りが根っこで、教えてくれたわー…（無

ご意見、ご感想、お待ちしております！

でわまた次回  
ノシ

## 第12話 友達への思い（前書き）

お気に入り件数が110件を突破しました！

プレッシャーを感じつつも、頑張つていく所存であります！

## 第1-2話 友達への思い

これまで 力量変換 <sup>クリエイドル</sup>といつ少女は、いくつもの研究所を渡つてきた過去がある。

その研究所では毎回、白くか細い腕に注射器を射され、抱きしめたら折れてしまいそうな華奢な身体を拘束具で縛りつけ、少女の能力についてデータを取る。

そこでの『実験』が終了すると、次は向こうで『実験』。その後も『実験』という、モルモットのような扱いを受けてきた。

しかし彼女自身には、時折に研究者が行う置き去りを用いた非人道的実験のような事は行われなかつた。

なぜなら彼女は、学園都市における序列1位。その貴重なデータ資源を、ぞんざいに扱つて良いはずはなかつた。

だからそれなりに彼女はさして不自由もなく、今まで生きながらえることができたのだ。

しかし、彼が学園都市に現れてから、その安定した生活は緩やかに変わり始めた。

『一方通行』。

運動量・熱量・光・電気量などといった、あらゆるベクトルを触れただけで変換するという能力を持つ少年。

彼が現れてから学園都市の順位も変わり、序列は2位になつて、

今まで行われなかつた種類の『実験』にも参加せらるようになつた。

それでも彼女は彼に對して恨みや憎しみなどは抱いていなかつた。見ている者の心を和ませるような人懐っこい笑顔で、彼女はやつてきて間も無い彼に声をかけた。

「これからヨロシクね、クラスメイト君」

「着きましたーっと」

先まで学園都市のビル街を紅く染めていた夕陽はすでに沈み、新開発された明るい街灯が夜の闇を取り払うように煌々と灯つてゐる。

千五百は先ほど文字通り肉体言語で知り合つた友達、深泉水曜の常盤台中学入学のために、研究員達と話をするために慣れ親しんだこの研究所にやってきていた。

五百はいつも通つてゐる裏口から研究所の中へと入る。いくつ

かセキュリティーがあるが、能力制限がカードキーの代わりの役目を果たしているので問題はない。

研究所の中での様子は、代わり映えしなかった。

いつものように研究員は手元の資料を見ながら早足で通路を歩いていく。誰も私語などは話さず、聞こえてくるのはコンピューターの冷却用ファンの周る音と、通路を歩く研究員の足音のみ。

「何度も来ても、変わらないなあ……」

今では脅迫になると、古法や白井、初春などの友達が学校から支部へやってきて、駄弁ついていたりしているのだが、それもここに居た時では考えられなかつたことだ。

何度も血を抜かれ、データ収集のための『実験』に使われ、時にその『実験』<sup>チャイルドホール</sup>は置き去りも加わり、【力量変換】を調べるための“モルモット”に用いられた。

一方通行と最初に出会つた場所もこの研究所だった。最初は人を拒絶していた彼も段々と接している内に打ち解けて、時たま会うと駄弁つたりしたのもここであった。

「やあ、相変わらず元気そうだな?」

無音の通路の奥から現れたのは、力量変換の『実験』を指示・監修していた、30歳後半の男性だつた。

彼は白衣をだらしなく羽織り、コノコノのシャツとズボンを着て、無理やり櫛でとかした頭をワシワシと片手で搔きながらやつてきた。

「五百の前まで来ると、彼はタバコ臭い息を一つ吐いた。

「ため息ついてばかりだと幸せが逃げてくよ。」

「幸せ不幸せなんていう確立でしかないものに逃げられても、あんまり悲しくはないがな」

彼がもう一つため息を吐くと、五百はタイミングを見計らって水曜のことを話し始めた。

「 なんだけど、どうにかならないかな?」

「ムリだな」

あつさりそつと放つと、彼は五百の横を通りすぎ、歩き出した。

「わわわ。待つてよ。ふむう、ちよつとは考えてくれてもいいじゃない」

「あのなあ、お前の常盤台編入の時も結構無理やりだつたんだぞ? それを何の研究価値もない学生の為になんて……。俺らは慈善事業じゃないんだぜ?」

また一つため息を吐くと、彼は通路脇に設置された喫煙スペースのドアを開け、中に入る。五百も続いて中に入り、自分の【吸収】の対象にタバコの臭いなどを新たに加える。

「一方通行が『例の実験』に参加することを条件にしてやつとだからな。お陰でこちとら大事な実験対象失くしてんだ。簡単には領

アカセラレータ

モルセット

けねえよ

「ケチ」

「ほつとけ」

頬を膨らませて不満を露にする千五百を尻目に彼は自販機からいつも吸つている銘柄のタバコを一つ購入し、横長の椅子に腰掛けると、千五百もそれに続いて座った。

フタを開け、その中のタバコを一本口で咥えると、シワだらけの白衣からライターを取り出した。

「……女性の前で平氣でタバコ吸うんだね。だから30過ぎても独身なんだよ」

「なつ…。うるせえな！ 僕は一人の方が好きなんだよ！ 大体お前はチビじゅねえか！」

「言つたね？ 別に今ここでセンセーの体温を根こそぎ【吸収】してもいいんだよ？」

「怖えなおい！」

あまり広いとは言えない喫煙スペースでそのまま一人はワーキャーと論争をし、キリが無い事を悟るとお互いため息を吐いてそのまま黙つた。

タバコにライターで火をつけ、一口吸うと、煙を吐き出しながら彼は黙つたまま所在なげに足をプラプラさせている千五百を見ずに、喋りだした。

「ま、完全ムリってワケじゃないんだがな。これも結構」

「何？ どんな条件付き？」

言い切る前に口を挟まれてしまった。先まで困った表情をしていた彼女は彼の言葉を聞いて一転、期待に満ちた子供のような顔で彼に詰めよった。

「ま、お前ならイケるか？」 簡単に言つと、人殺しなんだけどよ

「え……」

驚いた、というよりも嫌そうな表情を浮かべる千五百を見て、彼はああ、やっぱりだと確信した。

千五百の能力、『力量変換』は、あらゆるエネルギーを地球には存在しない正体不明に【変換】し、その絶大なるエネルギー量を以て対象を量子分解させる。

その能力柄、過去の『実験』でも同じようなことをやつてきた。一瞬で髪の毛一本、血液の一滴をも残さず“消し飛ばす”彼女の一撃は、その呆気なさに人を殺めたという感覚が伝わってこないほどだ。

そして千五百は元々、その正体不明をあまり使いたがらない。使つても『実験』、必要な時の威嚇などであり、能力制限を架せられた今では、その威嚇さえも行つてはいない。

（『実験』でも置き去り相手にビビッてやがんだ。やれって言う方  
が酷だよな）

彼はそう判断し、俯いて黙つたままの彼女を保護先に帰そうと立ち上がつた時だった。

「…………分かつ…………たよ」

「…………お前、正氣か？」

今聞いた返事が彼女との経験上、ありえない言葉であつたので思わず彼は聞き返した。

すると今度ははつきりと、俯いていた顔を上げ、必死に何かをこらえるような表情で千五百言（ちいば）つた。

「分かつた、つて言つたんだよ？ 気は進まないけど、条件だしね

……」

無理をしているのは目に見えて分かる。しかし、彼はそれに対しても言わず、「そうか」と一言だけ言つと、吸っていたタバコの煙を吐き出し、ゆっくりと喋りだした。

「目標はこの研究所を襲撃してくる暗部組織の殲滅。まあ、拠点防衛つてヤツだ。失敗はないぜ？」

「…………その暗部のデータは？」

「暗部が『テキスト』。ついこの前に別の研究所に買収された組織だ」

そこで彼は吸っていたタバコを設置してある灰皿に捨てる。新しい一本を咥え、ライターを取り出す。

「どいやらの研究所は『例の実験』に反対する勢力でよ。要するに賛成派は少なくしようとつて魂胆だらつたな。……つたく、研究者の癖して攻撃的なヤツらだぜ」

咥えていたタバコに火をつけると、再びその灰色のくすんだ煙を口から吐き出す。

そんな彼の態度とは逆に、千五百は苦渋の選択をするような難しい表情で再び下を向いてしまった。

「ちなみに、上から殲滅しろと言われてんだ。それ以外に方法はねえよ」

彼の発した言葉で千五百はハッと顔を上げる。どうやら今考えていたことを聞いてられたらしく、今にも泣き出しそうな苦痛の表情を浮かべた。

「…………せいつこののは暗部の奴らに任せるとか？　お前がやらないとも、暗部雇つから変な義務感は持たなくていいだ？」

「うん、やるよ。…………時間は？」

「明日の25時ジャスト。場所は一時間前に連絡する」

「分かった…………。それで、それが達成できたら」

「ああ。理由はよく分からねえが、そのお友達をなんとか常盤台に入れてやる。成功したらな」

「…………おっけー」

千五百はようようと立ち上ると、そのまま喫煙ルームから出て行つた。喫煙ルームに残された彼は大きなため息を大げさに吐くと、再び指で挟んでいたタバコを咥える。

「…………すまんな、アクセセラレータ一方通行」

咥えていたまだ半分ほど残つているタバコを先ほど捨てた設置されている灰皿に乱暴に投げ入れると、彼はそのまま喫煙ルームを後にした。

「俺も結局、血も涙もねえ汚い大人つてワケだ」

## 第1-2話 友達への思い（後書き）

暗い……。早く戻りやかな日常に戻りたいです^\_^

やはり何の代償もなく物を得られるほど世間は甘くないわけで。

五百円拾つたと思ったら、どこかのゲームセンターのメダルという……。

関係なかつたですね^\_^；

ご意見、ご感想、お待ちしております！

でわまた次回 ノシ

## 第1-3話 魂の重や（體重や）

暗い話が続きやつです。

ああ、はやく卓盤印でのほほんとした口常が書きたい……。

## 第13話 魂の重れ

その日、いつものようにもう何回目かわからない研究所への異動を終え、そこで行われる『実験』開始時刻まで待っていた時だった。

「お姉ちゃんだれー？」

「ホントだ、知らない人がいるー」

研究所の中に用意された仮眠室で力量変換が連日の異動に疲れた体を休ませてているしているところに、まだ年端もいかない子供数人が声をかけてきた。

力量変換は研究所内に子供がいることを不思議に思い、いまだだるい身体でゆっくりと布団から起き上がる。

「……ふあ～う」

力量変換クレイドルが起きたことを確認すると、子供達は好奇心か、ぞろぞろとまだ寝ぼけている力量変換クレイドルに群がつていった。

「お姉ちゃん今日来た人でしょー」

「なんだ女かよ。ガツカリだぜ」

「ゆう君そんなこと言つちやダメだよつ」

「サツカーとかしたかったのになー」

群がつてくるなり、率直な感想を言えるのは子供の特権と言わんばかりの歓迎をされた力量変換は、未だに寝ぼけて状況に追いついていない頭で、キャーキャーと騒ぐ子供達に話しかけた。

「……君たちは研究所の子？ 研究者の子供とか」

「違うよ。私達はこここの近くに住んでて、今日はセンセイと一緒に遊びにきたの」

純真無垢。そうとしか呼べない輝かしい笑顔で力量変換の質問に答えてくれたのは、真っ赤なリボンが似合う可愛らしい女の子だった。

力量変換は立ち上がるごと、自分が使っていた布団を整えはじめた。仮眠室はすでに子供達の遊び場と化している。とてもじゃないが、再びゆっくり眠ることは無理そうだった。

「あ、私も手伝つー！」

「あたしもー！」

すると、質問に答えてくれた女の子も含め、一人の子が布団の整理を手伝ってきた。力量変換より小さい身体を懸命に動かし、二人がかりで敷布団を片付けようとする。

「ああ、いいよ。それはボクがやるから。枕とかお願ひ」

その頑張ろうとする心には申し訳ないけど、と力量変換はその敷布団を一人の腕から受け取る。布団が彼女の肌に触れたと同時に身

体にかかる重さは自動的に【吸收】され、力量変換は羽毛布団を運ぶかのように敷布団を持ち上げる。

「わ。す」——「

「力持ちなんだね。お姉ちゃんつて」

なぜか羨望のまなざしを向けられた力量変換は、予想外の褒め言葉に少し照れた。

「じゃあオレが乗つても大丈夫だな！」

そう言つやいなや、先まで仮眠室で騒いでいた男の子の一人が布団を持つた状態の力量変換の背中に飛びついた。

しかし、その男の子は飛びついた瞬間にまるで熱いものに触れたように、半ば条件反射の勢いでバツと飛びのいた。

「うわつ何だこれ！？ すごい冷てえ！」

「ああ、それはね。ボクが君の体温を吸つちゃつたからだと思つよ……つと」

布団をもとあつたスペースに下ろすと、そのまま布団が数枚積まれたところの上に腰掛ける。すると自然に子供達が力量変換を囲むように集まってきた。

「ボクはまだ能力がうまく使えないから。意識しないと常に触れた物から何か【吸收】しちゃうんだ」

ちょっと待つてね、と力量変換はその団から抜け、仮眠室の入り口の横にあつた洗面台に向かつた。そこにはコップに水を入れると、待つてゐる子供達の団の中に戻る。

「さて、ここで質問。水はビリヤツて氷るのかな？」

「えへつと、冷蔵庫に入れたら出来るよね？」

「そんなの知らねえよ」

「ゆうべー……えへつと私も分かんないや」

子供達は一様に考えながら、結局は答えにたどりつけなかつたらしい。コップを持ったまま「――」している力量変換に降参の意の田線を送る。

「じゃあ正解。簡単に言つと水はね、温度を低くすれば凍るんだよ。こんな風に」

力量変換は手に持つていたコップに意識を向ける。すると、コップの中に入つていていた水は一瞬で凝固し、ピキピキとコップが急激に冷やされる音とともにひんやりと冷氣が漂ってきた。

「ボクの能力は『力量変換』。触ったエネルギーを吸いだせる」とも出来るから、こんなこともできるの

「でもじゃあなんであつたかわしき冷たいつて言つたの？」

先ほど布団の整理を手伝つてくれた女の子が、手を挙げて質問する。その後ろでは力量変換から渡された凍つたコップを手に、男の

子達が不思議そうに首をひねっている。

「それは氷と一緒にだよ。ボクは周りの温度を【吸収】するから、さつきの男の子の肌の温度が下がったの。ほら、家の窓を開けっぱなしだと寒くなっちゃうでしょ。アレと同じ」

「へえ～～

しかし、すでに女の子はそんな力量変換の説明よりも凍ったコップが気になるようで、説明を聞きながらチラチラと男の子達の方を見ていた。

その様子に力量変換は「行っておいで」と言いつゝ、元気よく頷きその群集に駆けていった。

コップ一杯の氷でワーキャーと騒いでいる子供達を眺めながら、腰掛けた布団から感じる柔らかな弾力につとつとし始めていくと、仮眠室の天井に設置されたスピーカーからアナウンスで呼び出しがかかった。

力量変換<sup>クレイドル</sup>は手を振りながら子供達から別れると、仮眠室の外で待つていた研究員に連れられて、『実験』を行う場所に向かった。

「今回の『実験』は今までのものとは違い、負担は少ないと思いますよ」

「そう? なら助かるなー。この『じゅうだい』の大変なのが多くって……」

歩きながら研究員と『実験』についての話をした後、『実験』を行つ施設にある待合室に通される。すると、どこかで聞いた話し声が待合室の扉の向こうから聞こえてきた。

「え……」

恐る恐る開けてみると、やはりそこには先ほどの仮眠室でコップに入つた氷で遊んでいたはずの子供達だった。

子供達は力量変換<sup>クレイドル</sup>を見つけると、トコトコと走り寄ってきた。

「あー、さつきのお姉ちゃんだ」

「なーんだ。お前もこの『じゅうだい』ってやつをするのか?」

「あ、だから今日来てたんだー」

待合室は省電のためか薄暗く、いつもいる所ではない慣れない場所にいた所為か、子供達はどこか安堵した様子だった。

しかしそんな子供達の様子とは裏腹に、力量変換<sup>クレイドル</sup>の表情は曇つて

いた。そもそも研究所に子供がいること自体がイレギュラーだったのだ。今回の『実験』に参加するためだつたのだろう。

先の説明も、『実験』内容には間接的にしか触れていなかつた。『実験』内容はまだ知らされていない。これも今までに無いイレギュラーだ。

「……嫌な予感がする」

力量変換<sup>クレイドル</sup>が最悪の予想に辿り着こうとしたときに、まるでそれを遮るようにして、アナウンスで力量変換<sup>クレイドル</sup>に呼び出しがかかつた。

「いつてらつしゃーい！」

子供達の元気な声に曖昧な笑顔で答えながら、煮えきれない思いを胸に待合室を後にした。

しばらく通路を歩いて、呼び出された場所は『実験』を行う場所を上から眺めることが出来る、と説明されていた研究員用の部屋だつた。すでに何人かの研究員がパソコンに向かつて準備を進めている。

邪魔にならないような場所で待つていると、白衣をだらしなく羽織り、ヨレヨレのシャツとズボンを着て、無理やり櫛でとかしたような髪型をした研究員が奥の部屋から出てきて、力量変換<sup>クレイドル</sup>の元へ歩

いてきた。

「よ。まあ軽く自己紹介とでもいこうか。俺は瀬川一筆。今回の『これ』の担当だ。よろ」

「『実験』に参加する力量変換<sup>クリエイドル</sup>です。それでだけど

「ああ一分かってる。『これ』の内容だろ？ それを書つために呼んだんだ」

一筆は白衣のポケットからモモンを取り出ると、いくつかのボタンを操作した。すると今まで閉まっていたらしい壁だと思つていたシャッターがゆっくりと上がつていく。その下から今回の『実験』場所が見えてくる。

「さて……。お前は“魂”つてのを信じるか？」

「へ？ いや……何で急に？」

「“外”の人間は、人間は死ぬとコンマ数グラム軽くなるだろ？ それが魂が抜けるって言うらしいんだが……ま、これはその魂があるかどうか確認する実験だな」

シャッターはぐんぐんと上がつていぐ。力量変換は一筆に連れられて、窓から今回の『実験』場所の様子を見た。

「じゃあ、あの子供達つてまさか

「ん？ ああ、あの置き去りと一緒にたか。アイツらは今回の『実験』の被検体<sup>サンプル</sup>だが？」

力量変換<sup>クレイドル</sup>は全身から血の気が引くのを感じた。

これから力量変換<sup>クレイドル</sup>は 人間の魂を抜く 実験に参加する。といふことは、あの子供達に触れて、死んだ時にしか抜けないはずの“魂”を力量変換の【吸収】で無理やり抜き取るという意味だろつ。

「でも、でもそんなことをしたらあの子達は……」

「あん？ 別に問題はないだろ。すでに麻酔を打つて眠らせてある。暴れられたら困るしな」

「だからあの子達は

」

自分の質問にちゃんと答えずにうやむやに返す目の前の男を問い合わせようすると、その言葉を搔き消すように『実験』の開始を意味するサイレンが鳴り響いた。

「ほら、開始予定時刻だ。さつさと行って来い」

「なつ！？ ボクはこんなのやりたくない！ やめろ離せー！」

一筆に掴みかかろうとした力量変換<sup>クレイドル</sup>は、何人かの研究員によって抑えられ、そのまま実験をする場所まで連れて行かれた。

途中研究員の体温を根こそぎ奪おうとしたが、何か細工をしているのか、全く【吸収】できない。この時の彼女はまだ能力を制御しきれていないので、【変換】したエネルギーは未だ放出できない。年齢的に言えば小学生の彼女の腕力では、大人に逆らうことは敵わなかつた。

実験をする場所につくと、麻酔を打たれて眠っている子供達の前に立たされた。

『始める。力量変換』

「嫌だよ……。」んなのできるわけ

力量変換が拒否の姿勢をとつたと確認すると、側に就いていた研究員に腕をつかまれ、そのまま眠っている子供の一人へと引っ張られる。

「痛つ！ やめて離してっ！ ボクは「こんな」としたくないっ……！」

引っ張られる先には眠っている女の子。仮眠室で布団の整理を手伝ってくれたあの女の子だった。女の子の様子には一切の警戒の色も混ざってはおらず、無防備な寝顔だった。

でも、力量変換が女の子に触れれば魂を抜けるとは限らない。そ  
れだけ魂とは不確定なもののはずなのだ。

警鐘を打ち鳴らし続ける。

『「こつでもデータがとれるようにしておけ。恐らく機会は一瞬だからな』

その手が女の子の無防備な寝顔に、触れた。

「……嫌なもの、見ちゃったな…」

千五百はむくり、と重い瞼をこすりながら電源をつければなしのパソコンの時刻を見る。

昨日の夜、一筆と話をつけて研究所から第177支部に帰つてきた後、そのまま丸一日分眠つてしまつたらしい。

千五百の机の上には、初春の字体で「なにかあつたら相談に乘りますよ」と書かれたメモが置いてあつた。

「……ありがと、初春」

いつのまにかかかっていた毛布を椅子に引っ掛け、伸びとともに立ち上がる。

初春のメモをそつと自分の机の引き出しの中にいれると、千五百は誰もいなくなつた支部から外に出て、研究所へ向けて歩き出す。

「でも、相談に乗つてもうのはまた今度にするよ」

今回の『これ』は、誰かに相談できるものではない。夢で見たあれとは違い、今回は自分から人の命を刈り取りにいくのだ。

千五百は精神安定剤を水なしで飲み込み、携帯で受信したメールを確認する。

そこには時間通り、一筆が待機場所と敵の情報を記したメールが入つていた。

千五百は携帯をポケットにしまうと、夜特有の静けさに包まれた歩道から夜空を見上げる。

満天とまではいかないが、夜空には星々が爛々と輝いている。

「……行つてくるね」

誰かに言つてもなくボソッと呟くと、千五百は走り出した。

## 第1-3話 魂の重さ（後書き）

今回のプロットを作つていて思つたのですが、「13歳の女の子の過去にしては重すぎね？」とこう感想を持ちました、作者ですw

『とある魔術の禁書目録』テレビ放送まで一週間を切りましたね。

これによつせりあるの一次創作が増えるよつた予感がしますよ（――：）

そしてお気に入り件数、およびPV・ニーク数も何かすゞい勢いで増えてます。

感謝感激ですっー。（^▽^）ハビシッ

ご意見、ご感想、お待ちしております！

でわまた次回 ノシ

## 第14話 暗部 VS Level5（前書き）

今回は前回に引き続き、暗い話です。

苦手な人は読まずに飛ばして次回の後日談だけ読む、つてのもアリです。

## 第14話 暗部 VS Level5

「今日は暗部迎撃のため、特例で能力制限の制限を7から4へ一時的に引き下げる。いいな?」

「分かった。場所はここでいいの?」

「ああ、暗部襲撃の情報は上からのものだからな。信用に足るだろ」

千五百は一筆に指定された研究所の駐車スペースの隅にしゃがみこむ。携帯を肩で挟むようにして持つと、空いた両手で履いてきたスニーカーの靴紐を結びなおし始めた。

指定された時間は今日の25時ジャスト。携帯の時刻はすでに0時30分を回っていた。

ピッと短い電子音が響き、千五百の両手首・両足・首・頭についている能力制限が赤く一瞬点滅する。遠隔操作で制限のレベルを下げたのだろう。

「テキストは全て能力者で構成されている。水流操作・発火能力・風使いに電撃使い。どれもパツとしねえ平々凡々な奴らだ」

「Levelは2~3だけ。問題ない。お望み通り、早く終わらせるよ」

そこで一筆との通話を切るのになると、一筆が「待った」とそれを遮ってきた。先に見た夢による焦燥感と、今から人を殺すという緊張感で苛立っていた千五百は、珍しく声を荒立たせて返事をする。

「まあセーフリーピリするなよ。……一応もつ無いとは思つが、釘を刺しておぐ。逃がそなうなんてバカなことは考えるなよ?」

「……ひ。分かつてゐよ。切るね」

返事を待たずに通話終了のボタンを押すと、乱暴に携帯をズボンのポケットに押し込む。

そして、携帯を持っていた右手をそのまま、駐車場のアスファルトの地面にあてた。

「エネルギー【吸收】。対象を震度1以下の振動、及びアスファルトの外部・内部温度に設定」

考えていることを口で出して意識を演算に集中させる。普段はこんな口で言つてから能力発動なんて回りくどいことはしないが、今は緊張によって意識が乱れていた。緊張は能力の演算を阻害する。その一番の対処法だった。

【吸收】を発動すると、アスファルトに変化が現れ始めた。表面からは冷氣が発せられ、うつすらと白く凍結し始める。

心の中で10秒数え終わると、アスファルトから手を離した。しかし温度を【吸收】され冷えたアスファルトは、未だ冷氣を発し続けている。

「こんなものかな。後は時間まで待機 一」

携帯を開き時刻を確認しようとした時だった。どこからか音が聞こえたのを感じ、慌てて壁の隅に見を隠し、息を殺す。

その時、人が寝静まつた静かな夜に、車によるHンジン音が向こう側からゆづくりと迫っていた。

「しつかし、あんな研究所の言つこと聞いてて言いわけ翼たすく？」

「別に問題ねーだろ。報酬は良い方だし、雑用もあつちが勝手にやつてくれる」

暗部組織、『テキスト』は、裏ではそれほど知られてはいなかつた。メンバーの能力も「evey12・3程度であり、裏での仕事も『後片付け』や『後始末』のよつた地味な依頼しか回つてこなかつたのもそれの理由だ。

「アイテムとかスクールみたいに、パツとした仕事が来るようになつたのも、買収されてからだしね～」

「誰がなんと言おつと、最善の選択をしただけだろ」

今から一つの研究所とその関係者を排除しに行くはずであるのに、

4人の空氣は学校の教室で雑談している生徒のそれに近かつた。

「それにしても、静かだな」

「そうだね。わざと情報を流している以上、ここまで楽に来れたつても不気味だね」

『テキスト』を買収した研究所は彼らが夜に襲撃するという情報をわざと相手側の研究所にリークしていた。開始時刻は本来の30分ほど遅くしてあつたが。

この情報のリークは相手側への威嚇の意味もあつたのだが、どうやら相手は一戦交える気らしい。リークに対し、降伏などの動きはなかつた。

しかし一戦交えるきなればこの状況はおかしい。すでに田の前には相手側の研究所が見えていて、検問や奇襲などの様子は一切見当たらない。

「……何か嫌な予感がするな」

「なーにカツコつけちゃつてんの？ もともと翼かさねはダサいんだから背伸びしないの」

「うるせえな加佐子！ かさねお前は毎回だが緊張感が無さ過ぎだろ。いつか死ぬぞ」

「あー怖い怖い」

大して怖がっている素振りも見せず、加佐子は組んでいた足を組みなおした。高飛車な表情からは、今の忠告による効果は一切感じ

られない。

その様子に翼は眉間に<sup>たすく</sup>つまみながらため息を吐くと、突然後ろの座席から肩をポンポンと叩かれた。

「まー加佐子はいつものことだから。心配しすぎだよ？」<sup>翼</sup>

「そう言つお前もだがな、斗近。<sup>とおか</sup>はあ、これでよくここまで裏で生きてこれたな」

「運も実力の内」

「エセ侍、それ冗談になつてないぜ」

後部座席の斗近<sup>とおか</sup>の横に座つているエセ侍と呼ばれた少年は、我関せずといった様子で腕を組んで目を瞑ついていた。

「さて、今日もお仕事頑張りますか」

そうしている内に車は目的地に着いたらしく、運転席にいる研究所からの雑用係<sup>プレゼンター</sup>がオート式のドアを開ける。

さきほどまで足を組んで退屈<sup>うつじゆ</sup>そうにしていた加佐子は、車から降りると嬉々とした突然声をあげた。

静まり返つた夜の闇にその声は予想以上に大きく響き、加佐子以外のメンバー全員が一様に焦つたが、研究所の警備員やらが出てくることは無く、ほつと胸を撫で下ろす。

「あのなあ……戦闘狂バトルマニアのはいいんだが、ヒヤッとするよつむことをするなよな」

「まあ、誰も来ないみたいだしいいんじや無い?」

「油断は大敵だ。皆、警戒を怠らぬよつ

エセ侍がいつものように仕事前の十八番を言おうとした時だつた。斗近が降りて、『テキスト』メンバーがそろつのを確認していたよつに、空氣を引き裂くよつな音が降りた車から響き渡つた。

車は音も無く真つ二つに切り分けられ、ガソリンに引火し爆発する。雑用係が生きているかどつかなび、確認するまでもない。

「一体どなから……！」

翼たすくは爆風に吹飛ばされ、地面に叩きつけられた身体をなんとか起き上あがらせると、頭を何度も振り周囲を確認する。メンバーはどうやら爆風に巻き込まれたようだが、軽傷のよつだ。

しかし車から上あがる炎によつて、遠くの景色が全く見えない。閃フラ光彈ツシユバンに似た、状況を上手く使つた戦法だつた。

運悪く、夜空には弱々しい星の光以外はなにも照らすものがない。月も今晚は新月らしく、あたりは車からあがる炎のみが煌々と『テキスト』メンバーの姿を照らし出す。

「まざいよ翼たすく。いのままじや敵に丸見えだよ~」

「ならば炎を消せばいいのだな？」承った

エセ侍は左手を車からあがる炎にかざすと、その手のひらから水が勢いよく噴出した。そのまま水は車の炎へとかかり、消火を始める。

「任せたぜエセ侍。これで目が暗闇に慣れれば……」

「無駄だよ。ガソリンからあがる炎は普通の水じゃ簡単に消せないもの」

暗闇から突然、まだ幼さが残るソプラノの声が、真っ暗な景色の奥から聞こえてきた。その声は段々と大きくなつていて、近づいてきているのが分かる。

「ぐつ、近くにいるぞー。」

いつでも能力が使えるよう身構えながら、翼たすくはメンバーに呼びかける。彼女の言うとおり、車からあがる炎は未だに消えていなかつた。

「おい加佐子、お前の発火能力でなんとかならねえのか！？」

「私は燃やすことは出来ても消すなんてしたことないわよ！」

完全に炎の眩しい光に慣れてしまつたらしく、もう炎の周辺以外は景色が真っ黒に塗りつぶされたように確認できない。炎があがる音もうるさく、声の主の位置も、これでは確認できそうにない。

「こないんだ？ なら、ボクから行かせてもらつよ」

嫌な言葉とともにソプラノの少女の声が響くと、先ほどの車を真っ一いつに切り分けた時のような、大気を引き裂くような音が響く。

「なつ」

その音に一瞬、エセ侍の声が混ざった気がした。ワンテンポ遅く消火をしているはずのエセ侍の方をハッと向くと、そこにはエセ侍が崩れたように倒れていた。

左右きれいに切り開かれた状態で。

「なつ……つぶつ……あ……」

その光景を直視してしまった翼は、腹の奥から湧き上がってくるものを必死に押さえ込みながら、ひたすらに声の主、少女の声を探す。

「ああーもうじれったい！　このままアイツみたいて切り開かれてたまるかってのー！」

「待てつ、加佐子！」

しびれを切らした加佐子は翼の制止を振り払い、闇雲に手のひらに集めた炎弾を辺りへと放つ。暗闇で見えないが、遠くで起きている爆発の音からして少女に当たってはいないらしい。

「ちつ、さつと出て来いガキがあ！　影からパンパンとしゃがつてクソ野郎が！」

全弾をはずしたことに対するイライラと、仲間を殺された怒りによって完全にキレた加佐子は、辺り一帯に向かつて怒鳴り散らす。

彼女の能力に答えるように車からあがる炎も勢いを増し、その眩い明るさはついに車の主を照らし出した。

夜の闇に溶け込むような真つ黒は、その日焼けが見られない白い肌によって強調され、炎によって紅く光る双眼は、燃えるようというよりは血の色に似ている。その少女の幼い顔立ちにはそれらは不釣合に[写]った。

「ありや、ばれちゃったな。せつかくこの作戦を思いついたのに

「うぬせえんだよクソガキがあ！」

叫ぶよつこ加佐子は田の前の少女に怒鳴ると、車からあがる炎を操つて、問答無用にその少女をそのまま包み込む。

「そのまま丸焼きになっちゃえ。カスが」

「……炎のエネルギーを全【吸収】」

轟！ と今まで少女を取り巻いていたはずの炎が、突然そのうねりを止め、蒸発するように消えうせた。いつのまにか、車からあがつていた炎もそれと共に消えてしまっている。

「【吸収】したエネルギーを【変換】。適当な形状にて【展開】」

それは少女の背中から生え出していくより、まるで蝶の羽化のようにゆっくりと現れた。

背中から現れた、夜空に溶け込むほど黒く禍々しい翼。それは左右2対現れ、その翼からは黒い羽のようなものがはらはらと落ちている。

「逃げないでね？……ボクも、辛いんだ」

言い終える前に少女は2対の翼で飛翔するようにこちらに向かってかけてくる。その速度は人間のものとはとても思えなかつた。

「くそつー！」

翼たすくはさつさからうるさくて仕方が無い心臓を必死に押さえつけながら、彼女にむけ能力を使う。音速の壁を破つた風の一撃は、通常の人間ならば一発で吹き飛ばせる。

しかし、それは彼女には叶わなかつた。なにも防御をする素振りをしていないはずなのに、翼たすくの一撃は彼女に当たると同時に消え失せ、そのままの勢いで翼たすくへと突つ込んでくる。

「くそつー何なんだよコイツはー！」

すんでのとこひで翼たすくは横に跳んだ。少女はそのまま翼たすくが居た場所を通りすぎ、首だけをこちらに向ける。

「はっ、なんだよ。何もしてこねえじゃ」

「翼たすく、腕が……ー！」

斗近の悲鳴に近い声に気づいて自分の左腕を見る。

いつの間にか左腕の肘から先が無くなっていた。視線の先には何か肌色をした細長いモノが転がっている。

自分の腕が切り落とされたことを脳が認識すると、切られた腕の断面から焼け付くような痛みが襲ってきた。

「うああ……あああ……あああ！」

まるで脳を直に殴られてくるような痛みに、翼は左腕を押さえつけながら地面で苦悶する。

「翼！？ しつかりして、翼！」

斗近は血の気が引いたように急いで翼の下へ駆け寄ると、もがき苦しむ翼の左腕を止血しようと押さえつけた。

「加佐子！ 早く止血しないと、翼が、翼があ！」

「くっ、お前がやられてどうすんだよ……！」

加佐子は斗近が押さえつけた左腕の断面に手をかざし、炎によつて強引に傷を塞ぐ。それと同時に翼の割れんばかりの悲鳴が響くと、気絶したのか黙ってしまった。

「……ごめんね。本当に」

斗近はキッと声の主である少女に対して人を射抜くような殺気に満ち満ちた目線を向ける。その表情は普段穏やかな彼女からは想像できない、修羅のような怒りに支配された表情だった。

「なにが“じめんね”よー 翼<sup>たすく</sup>の腕を切り落としておいてー なに良い子ぶつてんのよー！」

「違う、ボクは

「ひるむやー 死ね、死んでしまえええええええ！」

斗近はその修羅のような表情で、慟哭するように叫ぶ。田にはいつぱいの涙が溢れ、頬を伝う。

明らかに「Level3」とは違う、「Level4」以上の電気を帶びた彼女はその電撃を少女に放つた。

壮絶な爆発音とともに、チリチリと電撃による電磁波が爆煙と共にほとばしる。

「死ね、くたばれ、消え失せろおおおおおおおおおおおおー。」

続けざまに斗近は狂ったように爆煙に向けて電撃を放つ。その度に雷にも似た大気が爆発するような音が、電撃の閃光と共に発せられる。

しかし、その閃光と爆音がふつと途切れた。斗近は腹部に感じる違和感に、視線を自分の腹に落とす。

そこにはレーザーに似た禍々しいほどに黒い一線が、腹部を貫いていた。そしてその一線は、真横にスパッと刀で横薙ぎに切るよつに移動すると、往復するよつともう一度腹部を一閃した。

“”とり、と斗近はそのまま地面に崩れ落ちる。上半身と下半身は真つ二つに分かれていた。

「斗近……うそ」

加佐子は目の前で起きたことに追いつけずに居た。すでにメンバーの2人が死亡。リーダーの翼たすくも左腕を切り落とされ重症、今満足に戦えるのは自分しかいなかつた。

スツ、と朦もうもつ々と立ち込めていた煙から、斗近の電撃を喰らつたはずの少女はあわいと掠り傷一つ見当たらない姿で現れた。

戦闘狂である加佐子も、この状況には怖氣ひきづいてしまつた。これはもはや勝てる勝てないの問題ではない。もはや一方的な虐殺ワンサイドゲームだ。

もう闘う氣きが失せてしまつた加佐子は、その場にペタンと座り込んでしまつた。このままでは間違いなく自分も殺される。そうと分かつていても、怯えきつた身体は言つことを聞いてくれない。

「じめんね。怖いよね。こんな化け物……」

すぐ目の前に立つてゐるのは、夜空に溶け混むような禍々しい黒い翼を持つた、大切な仲間の命を一つも奪つた、悪魔。

それが、こちらを向いて、立つてゐる。

「うわああああああ！　来るな化け物オオオオオオオオ！」

手のひらに火球を作り、そのまま目の前の悪魔へと投げつける。しかしその火炎は悪魔にぶつかると同時に霧散し、わずかに散つた火の粉がパラパラと風に流され消える。

「……」「めんね

最後に見た瞬間、なぜか悪魔は泣いていた。しかしその意味を考えるより先に、加佐子の頭は禍々しく黒い一線によつて貫かれ、加佐子はその場に力なく崩れた。

「後は……、君だね

力なく倒れている翼に、少女はそつと近づき、首筋に手を添える。

「なんで……、こんなことを、する?」

首筋を触つた時におきたのか、元々おきていたのか分からぬが、翼は喋るのも苦しそうな表情で少女に話しかける。

「……友達を、学校に通わせるため

少女は涙声になり、その声を必死に抑えながら答える。その答えに翼は一瞬顔をしかめると、先のような苦しそうな顔ではなく、どこか優しげな表情を浮かべる。

「それだけに、俺たちは殺されるの、か。まあ裏だから仕方ない、か

少女の頬に涙が伝い、翼の煤で黒く汚れた頬に落ちる。翼はそれを横目で確認すると、目を瞑つて泣いている少女に言った。

「俺を、殺せよ。そうすれば、そいつ、学校行けん、だろ」

「分かつてゐる、分かつてゐるけど……」

「

少女の顔はすでに涙でいっぱいだった。翼の頬に彼女の涙が雨のようごとに滴り落ちる。

「俺は今、苦しいんだよ。わざわざと楽にしてくれ。……仲間のところも、行きたいしな」

少女は翼の言葉に頷けないまま、首に手を触れた状態のまま泣き続ける。

暫くして少女は顔を上げると、心の中でずっと葛藤してきたのであらう、すこしやつれた顔でこくつと頷いた。

「さうか、助かる。…………そうだ、あと一つ。そいつを言つて、おいてくれ」

少女は未だに泣いている。翼の頬はすでに彼女の涙で濡れきついて、まだ涙は滴り落ちていた。

「学校、頑張れよ」

少女は思い切り目を瞑り、首に触れていた彼女の手が強張るのが分かる。それと同時に、急に意識が重くなつて、底へ底へと沈んでいく。

（きれいに死なせてくれるんだな）

死ぬ時に見るらしき走馬灯は見当たらず、ただただ意識だけが暗い闇の中へと引きずりこまれていく。

(研究所の次はあの世に招待か。『テキスト』も人気になつたもんだな)

もう自分の身体の感覚などない。周りの音も、匂いも、光も、全て遠くに感じられる。

(今行くぜ、みんな)

そして翼<sup>たすく</sup>の意識が、一番深い底へと、着いた。

## 第14話 暗部 VS Level5（後書き）

千五百無双ちいばです。……こんな無双、全然書いてて楽しくないですが。

暗い話は「」で一区切りです。次回からは後日談の後、日常編へと戻ります。

人の命は、大切なんです。

「」意見、「」感想、お待ちしております！

でわまた次回！（>\_<）ノシ

## 第15話 台風一過 曇りのち晴れ。（前書き）

更新おくれてスイマセン。前話のダメージが癒えるのに時間がかかりましたw

これからは先は当分ほのぼのなのでじ<sup>女</sup>心を。

## 第15話 台風一過 暈りのち晴れ。

「楽しみだなー 常盤台での学園生活！ 千五百もちょっとさう思わない？」

「…あ、うん。そだね。ボクも学校に通えるから嬉しいかな」

湾千五百が彼女の友達、深泉水曜を常盤台中学へ入学させるために瀬川一筆に頼んだ際、彼が出した条件である『襲撃してくる暗部組織の殲滅』を終えた千五百は、その後、精神的問題から数日間に渡つて研究所で過ごしていた。

千五百の担当研究員である一筆が投与した新型の精神安定剤により大事には至らなかつたが、その時の記憶・感情が時折フラッシュバックするという後遺症を遺してしまつた。

研究所ではすでに2回このフラッシュバックを起こしており、その時は幸い一筆の手によつて最悪の事態を回避することが出来たが、その時の千五百から危険を感じた一筆は上層部へ連絡。症状を説明した後、彼女の常盤台への入学を中止するよつ呼びかけた。

しかし彼の進言はなぜか却下され、何事もなかつたように千五百は常盤台へと入学することが再決定された。

「……ねえちよつと。千五百、何か顔色悪くない？」

「…え？ そんなこと、ないよ。そんなことない……から」

たとえフラッシュバックによつてあの時の記憶が再生されるとしても、あの時の記憶は『記憶』として残つてゐる。

それは昨日に食べた夕飯の味氣無さや、177支部でのみんなの表情のようにいつでも思い出せるものなのだ。

それが彼女を追い詰め、責め立て、苦しめて、最終的にフラッシュバックという形の“発作”によつて表面上に現れる。

田の前にいるのはそんな記憶を作るキツカケになつた友達。表面は平氣なふりをしていても、心は悲鳴をあげ続けていた。

「まあ千五百ならダイジョウブだよね。なんたつてレーベル5なんだからー。」

「ふむう、そんなことないよー」

（アハハと顔を見合わせ、笑いあう。そんなこの風景を、ボクは求めていたのに。）

千五百はそのままいつものよつに楽しげに喋りだす水曜に笑顔で相槌を打ちながら、心中で暴れる何かを必死に押さえつける。

（何でこんなにも寒くて、苦しいんだろ……）

季節は春、真つ盛り。

常盤台中学の入学まで残り少ないカウントダウンを始めた、ポカポカな暖氣が学園都市を包む日常の日々の中で、彼女は一人憂いた。

学園都市はこの季節の移り変わりと相應に、冬の殺伐とした雰囲気から一転、春らしい賑わいを取り戻していた。

それは新年と共に訪れる受験シーズンが終わって受験生達がそれそれで落ち着いてきたこともあってか、歩道には冬の時とは倍近い人で溢れている。ここは学生が人口の約8割を占めている学園都市ならではの現象であろう。

そんなテレビの情報通りの光景の中を、あと数日で中学生への階段を上る少女たちはのんびりと歩いていく。

「やついえばや。十五畳ってちょっといつも同じ服を着てるよね

ー

「えつ。やつかな？」

事実、千五百は外出する際はいつも上はいつものキャミソール。下はいつも薄い短パンと、やつと季節に準じてきたファッショングラフがあったが、どれも運動性に欠けるといつこと大事にダンボール箱に保管されている。

前に白井や初春、古法と一緒に千五百の服を買いにいったことがあつたが、どれも運動性に欠けるといつこと大事にダンボール箱に保管されている。

「はあ、機動性ねえ……。千五百ってそんな活発だったっけ？前の千五百は知らないけど、私が見てる限りはちょっとそうでもないじやん」

「ははは……、ふむう。まあ、個性ひいて」と

実は機動性・運動性を重視している、といつのはウソで、実際はただ暑いのが嫌だから、という単なるワガママである。

【吸收】しているので、衣服による体温の調整・保温はしていない。

もつとも、それも建て前であり、研究所内ではいつも“必要最低限の部位を隠したテープティング”で過ごしていたため、身体を覆う衣服が暑くて鬱陶しいだけだつたりする。

小学校では季節を問わず半袖シャツで過ごしていた少年が、中学のブカブカの制服を着て感じる感想と一緒にである。

「えー。でも、常盤台になつたら常時制服だよ？ ビツかるの？」

「え」「

今日、何度も田かになる「え」を発した千五百は、その場で歩を止め、停止した。後ろを歩いていた学生らしき通行人がぶつかって舌打ちするが、それでも彼女は動き出さない。心無しか、田が点になつているようにも見える。

「あれ、知らなかつた？ ちょっと、ちゃんと自分が通う学校くらい知つておかないとダメだぞー？」

そんな千五百の様子から知らないことを察したのか、そのことにすこし優越感を感じた水曜は自慢げな顔で止まつたままの千五百の前に立つ。

「常盤台は特別なことが無い限り、休日でも制服で過ぐすんだよ？ 今のはちばんその他他の服に慣れておいた方がいいでしょ？」

水曜が喋っている途中でハツと我に帰つてきた千五百は、その言葉を聞いて考え込む。あごに手を当てて考え込む姿は、容姿からかどこか可愛らしく見える。

「つていうかさ、千五百って「eveye」で序列2位なんでしょう？ お金たくさん持つてるなら使うべきだよ！ わた……いや、学園都市のために！」

「いや、今私つて言いかけたよね？ しかも学園都市は別に不景気とか田高とか関係ない

「いいからー ほら、善は急げー！」

千五百が言い終わらないうちに水曜は彼女の腕を掴むと、そのまま返事を聞かずに走り出す。春の陽気でごった返す人ごみを搔き分けながら、その表情は新しい友達との買い物への期待で喜色に満ちていた。

「わあ、ちょ、ちょっと待って。ねえ！」

急に腕を掴まれて体勢を崩しながらなんとか走る千五百には見えなかつたが。

「「おわあーー？」」

水曜が千五百の手を引きながら曲がり角に差し掛かつた時、ついに人と正面衝突した。千五百もぶつかつた反動で後ろに倒れてくる水曜に押し倒される形で、受身もとれずにそのまま倒れる。

彼女とその上に乗つかっている水曜には、千五百の能力によつて倒れたダメージはない。しかし目の前で盛大に頭を地面にぶつけたらしい少年は、ぶつけた後頭部を抱えて転がりながら悶絶していた。

「いっつ…。あ、千五百、ゴメン」

「いや、ボクは大丈夫だけど。その、相手の人…」

千五百は水曜の後ろを恐る恐るといつ風に指差す。

水曜がその指が指す方向を振り返ると、アスファルトに頭の後ろから思いつきり頭突きしたらしいシンシン頭の少年は、息も絶え絶えに苦しんでいる。痛みはまだ去つてくれていないらしく、かすかに呻き声も聞こえる。

「あー、えーっとそのー…。ちょっとすいません?」

「ちょっとってなんだよ!? あと疑問系かよ!? こいつちは今日も平和だなーとか思いつつ朝からダラダラして過ごしてたらもう昼を過ぎてしかも明日は高校の入学式で何も準備してねえって焦つて走りながら何がいるか頭の中でまとめてたら今の衝撃で全部飛んでつちまつてパアじやねえか責任これこのヤロウ!」

水曜がシンシン頭の少年に近づいて顔を覗きこむよつこじやがむと、突然ガバッと起き上がり、涙目になりながら訴えてきた。内容を聞いている限りではよくある自業自得なのだが。

水曜はそのシンシン頭の少年の剣幕に若干引きつつも、とりあえずぶつかつたこじらが悪いからと自分に言い聞かせ、じうじょうかと後ろにいる千五百に目送りする。

「いや、ボク見てもどうもできないって

「え?」

水曜が千五百に目送りしたのにつられたのか、シンシン頭の少年も千五百の顔を見た。それと同時に痛みで涙目になっていた表情か

ら一変し、また驚いたと顔に書いてあるよつた驚愕の顔に変わつていいく。

その様子を見て、千五百は首をかしげる。田の前の少年とは今初めて会つたといつ氣はしない。昔どこかで会つていたような……と頭の中でそのシーンを探し始める。

「クレイドル……なのか？」

「くれいどる？ ちょっと誰よそれ。この子は私の友達で、ちやんと湾千五百つてこいつ立派かどりかは知らないけど名前はあるのよー。」

立派かどうかは知らないってひどいなあ……と思いつつも口に出さず、必死に田の前にてる彼の名前を思い出す。確かに前に彼とは会つている。あと少し。

「ちこほ？ でもお前、あの時はクレイドルつて……」

「あ、思い出した。えと、とーま。とーまだよね？」

やつと頭の中でつかんだ彼の名前の記憶を忘れないといつから口に出でて口で出す。水曜はワケが分からぬといつた風に首をかしげているが、彼はそれで確信したようだ。どこか安心した顔で千五百に近づくと、まだ地面に座つたままの彼女に手を差し出す。

それを掴んで立ち上ると、千五百は服についたホコリをポンポンと軽くはたき落とす。するとシンシン頭の少年、上条当麻は彼女が顔を上げる前に口を開いた。

「ええーと……ちこほ、だつけか？ “あの時”からずっと聞きたい

「」どがあるんだが……いいか？」

「ふむう？ 別にボクは……いいけど」

突然、上条の声色が真剣な色に変わり、まっすぐな眼差しで千五百の答えを待つその表情に一瞬ドキッとした千五百だが、すぐにいつもの調子に戻る。

なぜか水曜の顔に赤みが差していたが。

その様子に気づかない二人はとりあえず場所を移そつと、最寄のファミレスを探してウロウロし始めた。千五百が頭の中で地図を広げ、一番近くにあるファミレスを見つけ出すると、上条もそれにしたがい歩き始める。

ハツと意識を取り戻した水曜はいつの間にか遠いところを歩いているシンシンと千五百を見つけると、顔を赤いままに走り出す。

友達との買い物を邪魔された怒りと一人置いてけぼりにされた怒りと一瞬彼の表情にドキッとしてしまった自分への怒りを込めて、水曜はその勢いのまま田の前を歩く当麻へと突進する。

背後から聞こえるタタタ…という音に気づいてふと振り返る当麻だが、もう遅い。すでに相手は怒りを速度へと変えたかのように猛スピードで突っ込んでいた。

「ちょっと何勝手に話を進めてるの！ つてか置いてくなやーりあああーーー！」

振り返った上条の真正面、その腰の辺りへと水曜は思いつきり突

つ込んだ。

ドス！ つという嫌な効果音と共に上条の身体はそのまま宙を舞い、地面へと落ちる。しかもなぜか後頭部から。

上条をクッション代わりにして無傷らしい水曜は、勝ち誇った顔でそのまま立ち上がる。千五百は田を点にして「へ？」と状況の展開に追いつけずにしている。

「ふ、不幸……だあ……あ……あ」

一回強打した後頭部を押さえればいいのか、タックルされてとても痛む腹を押さえればいいのか、訳も分からぬダブルパンチに、上条はただその場で身を捩りながら悶え苦しむしかなかった。

## 第15話 台風一過 曇りのち晴れ。（後書き）

うん、いい。後半の、こうこうのがやりたかった（・・・・・）

『とある魔術の禁書目録？』、はじめましたね。今回はその第1話にあやかつた落ちを付けてみました。

詳しく述べは原作の第五巻の91ページか、アニメ第1期18話をご覧ください。

水曜、こんなキャラだつたつけ？^ ^；

でわまた次回ノシ

第16話 晴天の前の夜（前書き）

闇咲さん、カツ「ええ……。〇〇もいいし……。

完全に私見ですがw

## 第16話 晴天の前の夜

「……で、背後からの不意打ちをどう捌くかの話だけ」

「ちげーよ。あの時、郵便局の時、あの黒服のやつらはなんだったんだ？ 親がつけた保護者…なわけねえよな？」

あの水曜の不意打ちから上条が復活するまで待った後、現在は千五百の案内で一番近くにあったファミレスに座っている。

上条と千五百はテーブルを挟んで向かいあい、先ほどの大空から一変してどこかピリピリした空気で包まれている。

水曜は先ほど完全に置いてけぼりにされたことをまだ根に持っているのか、ドリンクバーで持ってきたコーラを拗ねた顔のままチビチビ飲んでいる。

「ああ、そうだけ。ふむう、とーまなら話ても大丈夫かな？ あまり『こっち』のことに巻き込むのは気が引けるけど」

そこで千五百は手元にある、先ほど頬んだ砂糖やらガムシロやらで極甘になつたホットコーヒーを一口飲むと、軽い口調のまま喋りだした。

「の人たちは別になんでもないよ。言つなら、日雇いの護衛（エンジニアント）かな？」

「護衛？ 学園都市を見学しに来ただけの小学生にそれは用心深すぎないか？」

確かに、小学生の女の子につけるには護衛など大仰だった。もしこれを平然とやつてのける保護者がいるなら、それは極度の親バカ、相当な金持ちの「令嬢などだ」。

上条もそのどちらかだと踏んだようで、何か頭の中で想像するように上を見上げて目をつむる。

「あ、言つておくけど、あの時にヒーマに言つたことは全部ウソ。見学に来たことも、親がいることも。迷つてたのはホントだけどね」

その上条の思考をぶつた切るよつて、千五百はおどけた様子であつさり一いつの仮説を否定した。その日の前の少女のあつけない言葉に、上条は思わず座つていてる椅子からずり落ちそうになる。

「な、何だ？　じゃあお前はあの時すつとウソ吐いてたってワケか？」

「ふむう……。結果的にやつなるかな？　学園都市の見学も、親がいることも、ボクの名前も」

上条はその呆氣なさに思わず苦笑する。半年弱に渡つて悶々と考えていたものが、目の前の少女の爆弾発言により次々と碎かれいく。

千五百はふと上条側の席に座る水曜の方を見る。予想通りとか、水曜は全く会話に介入できることにして立腹らしく、むくれた表情のままコーラを飲み続けてる。そのコーラは、二つの間にかドリンクバーで補充してきたらしく、先ほどより量が多い。

「……まあ、そだね。もつたばらぬいでぶつちやけるよ？　……

ボクは学園都市の人間です。そして、あと数日後には常盤台中学に

入学して、中学生ですか

「つーなんだよ。やつぱ金持ちのお嬢様じやねえか」

「つー。今はそれでいいよ。むつーの話は今度にじよつ。……水曜がさつきから恨めしげな視線でボクを見てるじ」

そういうて乾いた笑みを浮かべる千五百に氣づいて、上条は横田で隣に座る少女を見る。

その途端、ギロツツと効果音が付きそうな動きで、鋭い視線を水曜は横田で見る上条に向ける。その田はどこか据わっていて、今にもまたタックルを食らわされそうな様子だった。

「別に千五百たちだけで喋つてていいよ。ビーセ私はひつと脇役モフキャラなんだし」

と、その後ブツブツと何かネガティブな言葉を呟き始める水曜。相当根に持つていていたようだつた。

「『めんね水曜。とーまが空氣も読まず話をしみつてこつから』

「俺のせいかよ!?. つていうか、約束放つて俺についてきたのはお前じやねえか!」

「ふむうヒドイ。『話がある』とか言つてたのは一体どこの誰なのかな!?.」

水曜のフォローに入った千五百のセツフに、言われようのない事が含まれていたことに対し、上条が反論する。水曜のフォローに入つた千五百もこれには引けず、またそれに反論する。

「これに見かねたファミレスの従業員が、さあさあと並んで、人を注意すると、いつの間にか席を立つて口論していたことに気づき、一人とも顔を俯かせながら黙つて席に戻る。」

「ちよつと夫婦漫才みたいだつたよ？」

「「だれが夫婦漫才かつ！」」

ほり息ピッタリじやん、と水曜はため息を吐くと、ふと右腕につけたある腕時計を見る。すでに5時を回つており、完全下校時刻まで1時間を切つている。

「じゃ、私はそろそろ帰るわ。千五百、また今度買い物いこつね」

「もうひるん。次はと一ま、邪魔しないでね？」

「あるかよ。今回だつてわざとじやないし、俺だつて明日から高校……」

そこまで言つと、上条の顔がサーっと蒼冷める。元々、上条は明日の高校の入学式に必要な文房具やら新しい制服やらを揃えようとしていたのだ。それが千五百たちと偶然にも出合つてしまつたので、完全に抜け落ちてしまつていた。

文房具類はコンビになどで見繕えば何とでもなるだらう。しかし制服はどうにもならない。ここから歩くには遠いし、電車はあと數十分で終電をむかえる。行きは大丈夫でも帰りは悲惨なことになること必至だらう。

「ぬあ——！ 何だ何だよ何だつてんだ！？ ああっくそ、不幸だあ——！」

上条はバネに弾かれるように走りだすと、ファミレスから猛烈なスピードで出て行ってしまった。あの脚力なら帰りも別に大丈夫なんじやないかと千五百は疑問に思つたが、なんだか上条が不憫に思えてきたので自分の中で留めておく。

「……じゃ、私も帰るわ。お会計よろしく～」

「ふえつ！？ ボクが？」

水曜が立ち去ったテーブルには伝票と自分一人。無論彼女には食い逃げなどという考えは毛頭ない。仕方なく伝票を手に取り立ち上がるが、ため息を吐いてファミレスの窓の外を見る。すでに上条と水曜の姿はない。何度も同じことをしていたと思わせるような手際の良さだった。

「……まあ、いいんだけどさ」

その帰り、千五百の雰囲気が若干沈んでいたことは、誰もしらない。

「それで、絶対能力進化（レベル6シフト）計画の進行度は？」

『問題ありません、順調に進んでおります。よろしければその映像を手配しますが？』

「いい。誰が血みどろの映像を見たいなんて思つんだよ。…ハア、」  
「ちりも順調だ。問題ない」

シワついた白衣をだらしなく羽織り、乾燥機から取り出してそのまま使つてゐるヨレヨレのシャツとズボンを着た研究員、瀬川一筆せがわ ひとふでは、秘匿の電話から聞こえてくる定期連絡を適当にメモすると、今日何度も分からぬため息を吐く。

「しつかしこれだけ待遇の差があると、思わず同情したくなるな」

『同情……ですか？　存外、あなた程の方もそのような感情を抱くんですね』

「「ひみせえ」

思いつきり皮肉つたよつた電話相手を、おどけたよつた声で流す。肩で挟んで持つていた受話器を右手に持ち替えると、一筆は左手で口に咥えていたタバコをつまみ、口から煙を吐き出す。

研究室は基本禁煙だが、彼はそれをぶつりついていた。それを咎める者はいないし、咎めることはできない。彼は今重要な『実験体』の保護責任者であり、監督している。無闇に手をだして『実験』から外されるのを躊躇っているのだ。

「こつちは毎日、スキャン調査した情報を総合して演算。総合して演算なんだぜ？ アイツは呑気に学生してゐるし。そつちは毎日人殺してるのによお」

『それは計画の方針が違つからなのでは？ そりは補充員サイドラインなのですから』

「へーへー。本命さんは大事大事つと……。そろそろ切るぞ

『はい。また一週間後に連絡します』

通話は一筆の返事を待たずにガチャリ、と切れてしまった。一筆はツーッーと空しい電子音を繰り返す受話器を机の上に放り投げると、左手で持つたままだったタバコを再び口に咥える。

「サイドライン補充員……か……。なんで俺はこつちにしたんだか」

彼はそう一人ごちる。独り言を言つたびに口からタバコの煙が漏れ、プカプカと天井についている換気扇に吸い込まれていく。煙を吐き出そうとタバコに手をかけると、不意につけっぱなしのパソコンの一台から短い電子音が響いた。どうやらメールが届いた

らしげ。一筆はめんどくさうに椅子に座りなおし、パソコンを作する。

「なんじゅうじゅ。セキュリティがかかつてやがる」

一筆は一瞬顔をしかめるが、しうがなくセキュリティを解除にかかる。おそらく上からのものだらうとは察しがついたが、このじろの彼らはあるで思考が読めない。精神的にまだ不安定な力量変換の放置や、研究所襲撃の情報をわざと開示するなど、奇怪な行動が多い。

いつも解除コードを打ち込み、メールを開く。文面はずいぶん長いらしく、一筆はめんどくさうにそれを読み始める。

しかしその表情はすぐに驚愕の色に変わった。段々とスクロールするスピードが早くなる。

「……ホント、何を考えてやがんだ連中は…」

思わず上層部に対し悪態をつく。口に咥えていたタバコを乱暴に灰皿にねじ込むと、メールに再びセキュリティをかけ、もしこのパソコンを開いても読めないようにする。不機嫌な様子で立ち上がると、そのまま彼は研究室をあとにする。

「決めるだけ決めて、後は丸投げってか。くそ」

彼は懐から黄色い携帯電話を取り出し、歩きながら電話をかける。恐らくこんな連絡を予想だにもしなかったであろう相手に。

数回ホールが鳴った後、間延びした返事がスピーカーから響いて

く。周りに誰かいののか、喋り声もかすかに聞こえる。

しかしそんなことは気にも留めず、一筆はすぐこそ苛立つた声で半ば怒鳴るように言った。

「いいか？ 今日付けでお前は、『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画の護衛についてもらひ。異論はナシだ。返り血浴びていい服に着替えて、さつさと俺のところに来やがれ！」

ゼーハー！ うなつた…… orz

やつと日常に戻ってきたといつのに、戦闘を入れようとする暗くしてしまつ自分の習性が嫌になります…。

でも、この先の展開上につかやることなので、早いうち処理したほうがいいですね、うん。

## でわまた次回 ノシ

## 第17話 “始まり”の日（前編）

お待たせしました。なんとか次話更新です。

そろそろ周囲も落ち着いてきたかなーと思いつつ、またついしじだけ慌ただしくなる。

これはなにかの陰謀か？……いやまさか、ねえ？

## 第17話 “始まり” の日

『貴女は、どんな学園生活をおくりたいですか？』

常盤台中学の入学式の後、新1年生として迎えられた千五百達は皆、新しい学校とそこで生活を想像しているのか、ビックなくソワソワしている様子だった。

運よく同じクラスになった水曜は、落ち着きなく自分の席から教室をキヨロキヨロと見まわしている。周りにも同じような生徒はいるが、明らかに浮いていた。

千五百は窓側の席の後ろから2番目。縦に6列、横に6列の正方形に席は配置されていて、教室に入る時はその配置の見事さに、皆が席に座るのを戸惑つたほどだ。

そして始まつたS.H.R。ショートホームルームここで冒頭の質問へと歸つてくる。担任の先生がこの質問を席順に当てて聞いてくる。

『はいっ！ 私はお嬢様らしく優雅に過ごしたいです！』

『優雅……ですか？』

『はい！ 優雅、華麗、エレガント！ ちよつといいじゃないですか！ そういうの、憧れだつたんです！』

この返事はむちろん水曜のものだ。千五百の日の前、窓側の席の後ろから3番目に水曜は座つている。

対して、この返事は想定していなかったのか、庶民全開の水曜の答えに笑顔を引きつらせている。そんなやりとりを見て緊張の糸がきれたのか、今まで押し黙っていた他の生徒もクスクスと笑いだす。

『そ、そうですか。水曜さん、貴女が望むような学園生活がおくれるといいですね』

『ありがとうございます！』

そういうて水曜は勢いよく先生にお辞儀をした後、席に座る。「では次に……」と先生は出席簿に一瞬だけ視線を落して名前を確認すると、また女の先生特有の柔らかな笑顔を生徒に向ける。

『はい、みずくま 湾千五百ちいばさん。貴女のおくりたい学園生活を教えてください。』

その口調も柔らかで、泣いている子供を諭す母親のような雰囲気の先生だった。背もスラッとしていて、まさに美人教師、もしくは幼稚園の先生という言葉が良く似合つ。

『はい。ボクは、やうすですね……』

そこでなぜか千五百の語尾は濁り、黙ってしまった。水曜は千五百の学校への憧れの強さはお喋りの中で知っていたので、すぐに答えられるものだと思っていたので驚いた。

「どうしたの？」と小声で聞こうとして後ろの席にいる千五百に後ろに振り向く。そして起立している彼女の顔をのぞきこんで

『……やつぱり、楽しく過ごしたいです。水曜みたいなのも、楽し

『ただけど

顔を逸らされた。しかしどうやら言葉に詰まっているわけではなかつたらしい。色々と言いたいことはあつたけれど、それを表わす言葉を探していただけのようだ。

そんな千五百は何故かしてやつたりな顔を後ろを振り向いていた水曜に向ける。そうすると、先ほどの水曜の言葉を思い出したのか、クラスの何人かが思わず噴き出した。

『なつ！？ 千五百！』

『人が考える顔を見ようとした報いだよ～？』

ふふん、と千五百は満足げな表情を浮かべると、先生に一礼して席に座る。

『ぬう～。そんなにちょっとおかしいこと言つたかな私は』

『少なくとも、本当のお嬢様がいること言つことではないんじやない？』

今は2列目の生徒が先ほどと同じ質問を先生から受け、答えていく。千五百の後ろの席は欠席なのか予備席なのか、誰も座つて居なかつた。

『そつかー。それもそうだよねー……。つことは、リアルお嬢様を友達にするチャンス！？』

『そつかもね。でもボクはあまりそのことは……。水曜？』

千五百が話かけるが、水曜は反応しなかった。どこか上を見上げて、幸せそうな顔をしている。大方自分がリアルお嬢様と友達になつてお茶をしているところでも想像しているのだろう。

「うなると水曜を現実に連れ戻すのは時間がかかるので、千五百はふう、とため息をついた。この前にも同じようなことがあって、起こしてあげたら水曜に怒られたのだ。千五百はただ、横断歩道の真ん中で硬直<sup>フローズ</sup>しているのは危ないとつてした親切心だつたのだが。

『楽しく過ごす、か……』

なんとなく窓から見上げた空は、雲一つなく、どこまでも青く澄んでいた。朝の天気予言では今日は雨はふらず、暖かな陽気に包まれた春日和と言つていたのを思い出す。

今日の常盤台中学入学により、当然だが117支部から学生寮へと引っ越しした。その時の初春はなぜか涙目だったのは今でも思い出せる。

引っ越しといつても千五百の荷物はほとんどと言つてもいいほどなかつたので、時間はからなかつた。後は古法に「たまには支部にも顔を出してね」と言われたくらいだつた。白井は引っ越しが忙しいのかその時の支部に姿は見えなかつたが。

田を凝らせば昼でも星が見えるんじゃないとも思える青空は、千五百の心の中とは裏腹にどこまでも透き通つていた。いつの間にか先生の質問は自分の横の席まで回つていたらしく、ガラツと椅子を引く音が横から聞こえる。

『“樂しへ”過ぐせたら、いいんだけど』

誰にも聞こえないくらい小さな声で、十五畳は誰に聞かづもなくボソッと呟いた。

辺り一面が真っ赤だった。

いや、真っ赤などと云ひ過ぎの色はきれいではない。赤黒い、もしくは赤紫を濃くしたような色が、田の前一面に広がっている。

その赤黒い海に浮いていたのは、その色を被つた何か。まるでその海で溺死したようにうつ伏せになつていてるモノや、途切れたり転がつててるモノなど。形容しようとするればキリがないほどに、その光景は悲惨だった。

そして異様なのは全てのモノが“五体満足でない”ことだ。

つい先ほどまで戦場だったそこに、一人の少女が立つてた。赤黒い海の上に立つててるその姿は、月明かりに照らされてどこか幻想的に見える。

その少女の姿も赤黒く染まつてたが、他のモノのように五体不満足ではなかつた。彼女が着ててる服の端から、ポタポタと赤黒い雪が垂れ落ちる。

少女は月を見ていた。その赤黒い海よりも澄んだ、真つ赤に染まつた目だつた。その表情はどこか悲壮を含んでいて、やはりその顔にも赤黒い色は着いていた。

少女はその飛沫しぶきを被つたように着いた赤黒い色を手でぬぐつた。しかし、その手も赤黒く染まつてたので、さらにその頬は白い肌色から赤黒い色へと塗り替えられる。

今日は厄日だつた。正確には違うかもしれないが、少女にはそう思えた。つい先ほどまで胸を満たしててた新しい生活への想いは不安に変わり、新しい生活を共にするルームメイトと握手を交わした右手は赤黒く染まつてしまつた。

「なんで……だらう」

少女の声は震えていた。この惨状のおぞましさ。この惨劇を生

み出した自分自身の能力に。

少女が右手を一振りすれば、目の前にいた3人の上半身が吹き飛んだ。

少女が左手を一振りすれば、目の前にいた4人の首が宙を舞った。

そう、すべて一振り。たつた一つの、何気ない動作で、目の前の人間はあっけなく死ぬ。どんなに辛い過去を背負つて生きていても、どんなに苦しい事情を抱えて生きていても。

少女の目の前に立つといふことは、そつまつことを意味していた。

「なんで、こんなこと、してくるの……」

少女に銃を向けても、その鉛弾は通ることなく地面に落ちる。手榴弾を投げても、その爆風の中から何事もなかつたかのように現れる。

そして少女の目の前に立つてしまつた彼らは言つ。

たつた一言。“化け物だ”と。

「やつぱり……。ボクは化け物なんだ……」

少女はスッと、目の前で淡く輝く月を掴むように手を伸ばす。

毎夜、の人達は昨夜なのがあつたかも知らないように少女の目の前に立ちはだかる。それは化け物退治に来た王国の騎士のよう。

しかし実際は逆だ。あの入達は少女の後ろにある研究所を狙つて来る盗賊で、少女は研究所を守る番犬だ。番犬ならば、侵入者を襲つて当然、むしろ自然なことだ。

だがその番犬は優しかつた。毎回やつてくる盗賊を襲うたびに、その心は傷つき、罪悪感がその傷口から沁み入つてくる。もう耐えられなかつた。

少女の真つ赤な瞳に、丸く輝く月が映る。あんなに飛沫がたつたといふのに、あの月は何事もなかつたかのように真つ白なまま、その淡い光を照らし続けている。それはなぜか。高いところにあるからだ。

少女がいくら手をのばしても、月に届くことは叶わない。地球と月は離れていて、地上にいる人間では触れることも、掴むことすらできない。

ならば、月まで行けばいい。誰も届かない、誰も近づけない。そんな月に、なればいい。

「そうだよ。ボクはなるんだ。ならなくぢや、いけないんだ……」

少女の目に映る月は、丸く真つ赤に染まつていて。その淡く赤く光る月は、少女の目の中にあつた。

ギュッと、月に向けて伸ばしていた手を握り締める。今は掴むことはできなくても、いつかこの手で掴んでみせる。その時には誰も目の前には立てない。立つていたとしても、自分に触れることは、叶わない。

「強者じやダメなんだ。無敵にならなきや……」

そうすればあの無駄な戦闘は行われなくて済む。自分には敵わないと知つてくれれば、人を殺さなくて済む。

そして、もう自分が苦しい思いをしなくて、済む。

「お前は本当にそう思つてゐるのか？」

突然そんな声が背後から聞こえて、少女は振り向く。よれよれの白衣を着た、自分を誰よりも知る人が目の前に立つていた。

その人はゆつくりと赤黒い海を渡つて自分のもとへやつてくる。呟えたタバコもいつもの通りだ。

「一筆、それ、どうこう」と？

少女はその鋭い紅眼を白衣の男に向ける。それに対してもは怯みもせずに少女のもとへ歩み寄る。

「まんまの意味だ。お前、『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画に加わる気なのか？」

「うん。一方通行には悪いけど、それはボクに引き継いでもらつ。ボクの能力なら、問題ないでしょ？」

少女の目は決意に満ちていた。その目は何回の殺生を見て、何回の涙を流したのか、白衣の男には見当もつかなかつた。

「無理だな」

しかし白衣の男はその日に宿る決意を打ち破るよつに言い放つた。少女は面食らつたように驚き、すぐに反論する。

「なんで！？ ボクなら一方通行の計画も引き継げる。残りの1万人の差だつてすぐ……！」

「いや、アイツからそう言われてんだ。もし自分の計画を引き継ぐと言つやがつたら、即断わつてくれとな」

白衣の男が、咥えていたタバコを赤黒い海へと吐き捨てる。赤黒い海に落ちたタバコの火は一瞬で消え、煙も立たずに沈んでいく。

「……まあ、引き継ぎは無理だが。そつだな、関わるな、とはアイツ言つてなかつたな」

「！ それ、どういふこと？」

「つむいていた少女の瞳に、再び月明かりが差す。その赤みは増し、白衣の男は不本意にも悪魔だと思つてしまつた。

「もともと『絶対能力進化』計画はお前ら二人でやるハズだつたんだ。ま、アイツが俺だけで十分だと抜かしやがつたんで、お前はもしもの時の補充員サイドラインという位置に下がつた」

「補充員……」

少女は白衣の男から初めて聞いた自分の役割に驚いた。自分がしようとしていたことは元々行うはずだったもの。それを一方通行が

拒んだだけだつたのだ。

「……なんで一方通行はボクを拒んだの？」

「俺が知るか。自分で聞け」

白衣の男は少女の言葉を一蹴すると、白衣の胸ポケットからタバコを取り出し、口に咥える。そのタバコの先にライターで火をつけると、ため息を吐くかのように吸つた煙を吐き出した。

「で、お前はアイツの補充員だ。要するに補欠。補欠はレギュラーが消えないと舞台には出られない」

「え、それって……まさか」

「そつ、補充員つてのはもしアイツが実験中“死んじまつたら”入れ代わる補欠なんだよ」

白衣の男はさも当然のように、あまりの驚きで固まってしまった少女に言い切る。少女の目は見開かれたままで、微動だにしなかった。

「殺せ、一方通行を。お前のその手で」

さりに白衣の男は固まつたままの少女に言い続ける。

「そうすれば一方通行よりお前の方が有用であることが認められる。それで正式に『絶対能力進化』計画はお前のものだ」

少女はやはりまだ固まつたままだった。白衣の男を見つめたまま

時が止まっているように、未だにその時は動きださない。

その様子を見た白衣の男はポケットからメモ帳を取り出し、付いたペンで何かを走り書きすると、少女の下へと投げる。

「明日のアイツの実験場所と時間を記しておいた。別に明日が無理なら別の日でもいいぞ。俺のところにくれば教えてやる」

じゃあと最後に言い加えると、白衣の男は少女に背中を向け、わざわざ赤黒い海から出て行ってしまった。

その後しばらくして、少女は錆びたブリキのおもちゃのよう、ぎこちない動きで足元に投げられたメモを拾い上げる。

メモは赤黒い海の色を吸つて、赤く染まっていた。けれどそこ書いてある文字はまだ読める。そこにはあの男の走り書きしたどこの場所と日時が書いてある。

「のまま毎夜に侵入者を殺し続けるか、それとも一方通行を殺して無敵になるか。少女の目の前には今一つの選択肢が浮かびあがっている。

「なんで、なんだろ?」……

自分はただ普通に学生らしく生きたかった。ただそれだけだったのに。

時間割り（カリキュラム）を受け、この能力が発現してから、彼女の生活はがらりと変わった。研究所という閉鎖空間に閉じ込められ、その中で初めて友達として生きていられた人も、今自分の手で

殺めようとしている。

少女は思わず頬をぬぐつた。今までに散々涙を流してきた彼女に付いた、忌まわしい癖だった。

しかしその手には、いつものような温かな水滴はつかない。代わりに、ぬるりとした冷たい赤黒い液体が頬にべつたりとつく。

涙なんて、一筋も流れてはいなかつた。

「そりが、もう泣く」ともできないんだね……」

涙も流さず、血を血でぬぐう化け物。今からとても人間とは思えない、 “友達殺し” を行おうとしている自分にはぴったりだと、少 女は思った。

「ごめんね一方通行。悪く……思わないでね」

少女は心に決めた。こんな化け物が人間ぶつてているのは人間に失礼だと。だから自分は化け物らしく、化け物じみたことをすればいい。

少女は笑つた。化け物じみた狂喜の表情で。すると背中からあの光を返さない漆黒の翼が3対、狭いビンの口から抜けのように、バサッと宙へと伸びる。

その翼から舞い落ちる羽は、地面に広がる赤黒い海に落ちるとその面積だけ赤黒い色を真っ黒に染めていく。翼を伸ばし終えるころ

には、舞い落ちる羽はさらには数を増し、みるみるうちに赤黒い海を干上がり、浮いていたモノも蒸発していく。

狂喜に震える黒髪紅眼の少女は、声をひそめることもなく、その化け物じみた笑い声を上げ続ける。

背後にある月明かりに照らし出された六枚の漆黒の翼とその少女は、まさに地に舞い降りた悪魔だった。

「いいねこれ……。あは。いいねこれ、すばらしいよ」

キシッと音を立てて、少女、力量変換は歪んだ笑顔を浮かべていた。

## 第17話 “始まり”の日（後編）

あああ、どんどん日常から離れていく……。どうせは露餡です。

更新が大幅に遅れてしまいすいませんでした。今回はさすがに書きとめていたものをまとめて、ようやく更新した次第です。また遅れるかもしれない御容赦のほどをへへ；

活動報告にて、すこし読者様の意見が聞きたいのでアンケートっぽいものを更新しました。

最新のものがそれです。気が向いたら、暇だから、などそんな軽い感じで結構です。

こんな投げっぱなしなお願いではあります、宜しくお願ひします。

でわでわ／ノシ

【NEW】

活動報告にてお知らせです。

## 第1-8話 秒読み（前書き）

更新が遅れて本当にスイマセンでした。  
アニメ第7話での一方通行さんのお陰で吹っ切れた感があります。  
あのセリフを聞けるとは……何か感動。

自分が何者なのか、分からぬ。

これは最近まで自分の心の中で渦巻いて離れなかつた悩み。そして、今まで自分が自分でいられた心の支え。

クレイドル  
力量変換には研究所に来る前の記憶が無い。過去に一度思い出そうと試してみたことがあつたが、その時は記憶が薄ぼんやりと霞がかつてゐるようではつきりとしなかつた。でもそんなことは別にいい。気にはなるが、今がよければ別にいい。そう思つて今まで生きてきた。

自分が何者か分からなければ、探せばいい。

毎日行われる自分の能力についての研究の中で、力量変換はそう考えた。内気な自分、明るい自分、頼りない自分、活発な自分。色々な自分を演じ続けた。

そして気づけば、その中で気に入つた自分を見つけたのかも分からぬ内に、友人が出来てしまつた。

何てこと無い、毎日の変わらない実験の合間にあつた休憩時間。その仮眠室での出来事だった。

連日の能力の実験に疲れて、そして自分が誰かを探すのに疲れてきた、そんなタイミングで。

「お姉ちゃんんだれー？」

「ホントだ、知らない人がいるー」

あの時の温かな声は、今でも鮮明に思い出せる。自分の過去はここから始まっているのだ、と勘違いが出来るほどに。

その時の自分は今まで演じてきたどの自分が分からぬ。もしかしたら、その時の自分が本当の、『素の自分』といつものだったのかもしれない。

久しぶりに会話と呼べるような言葉を交わし、どうでもこによいな、生きる上ではなんら必要な無い言葉を述べる。

それはとても新鮮で、力量変換は初めて心に会話の楽しみを、自分を演じることの滑稽さを覚えた。

そして、『素の自分』の恐ろしさを、知った。

なぜ、田の前にある自分の手が、血で赤く染まっている？

さつきまで仮眠室で一緒に喋っていた女の子。さつきまで、一緒に布団を片付けていた、男の子。

さつきまで、笑っていた、自分の友達。

その全てが、自分の手の中で息絶えていた。

あの時に見せてくれた眩しい笑顔などぐちやぐちやに搔き垂つて捨てたような、悲惨な表情。そして、つい先ほどまでこの研究施設内に響いていた、耳に残る残響を思い出す。

違う、これは自分がやつたんじゃない。無理やり手を押さえつけられて……。

残響が力量変換の心を振るわせる。ジリジリ、ジリジリと、まるで余震のように。

先ほどまで痛くなるほど男の大きな手で締め付けられていた自分の手首は、あたかも何もなかつたように、その赤みさえ無くなっていた。

あんなに痛かつたのに、ねじ切れそうになるほどに痛かつた手首には、痣も一切なかつた。

「ああ、やつか」

痛かったのは、心の方だったんだ。

男が手首を握ったのは最初だけで、その後は自分が勝手に動いた。そしてその時の心の痛みが、男に握られた手首に伝わって自分の身体全体に知らせていく。

作業をするロボットのように動く身体を、心が押さえつけようとしていたのだ。

でも身体は止まらなかつた。「痛い」と泣き叫ぶ心を見てみぬフリをして。はじめから眼中にないような様子で作業を続けた。

それから力量変換は『素の自分』を出さないよひこした。誰とも同じ挨拶で。誰とも同じ接し方で。誰とも同じ反応で。誰とも同じ距離を置いて。

空に浮かぶ、あの地球との距離を一定に保つて周る、月のよひこ。

そうして他人を傷つけないよひこしていたのに、何の因果かそれは不意に破られた。

よく分からぬ内にお世話になることになつた177支部への帰り道。その少女に出会つた時だつた。

彼女の話を聞いて、思わず同情してしまつた。それが運の尽きだつたのかもしぬれない。

新しく出来た自分の名前を呼んでくれる日々が心地よくて。学校に通えることが決まつたことが嬉しくて。過去に起きた出来事と同

じ状況だといつことに気がつけなかつた。

また、自分は友達といつ存在のせいで人を殺めている。でもこんどはその友人は死なずに、別の誰かが死んでしまつた。

その人はとても心が広くて、自分なんかよりよっぽど生きていることに価値がある人だつた。

また、再び、自分に関わつたせいでの

それからは、灰色だつた。

あんなに樂しみだつた学校も、今では自分と関わる人が増えてしまつんじやないかと不安で仕方が無い。

そしてそれまで毎夜に繰り返されていた殺戮。再び心とは反して動く身体。同じだつた。あの時とほとんど。

そしてどうやら、心も壊れてしまつたようだ。

あんな提案、普段の自分なら激昂して否定するはずなのに。するりと飲み込めてしまつた。だから、後は作業をするのみ。

「ボクは、化け物なのだから……」

「……手紙だア？」

「つものようにアミレスで昼食を済ました一方通行アクセラレータが自宅であるマンションに帰ってきて見たものさ、ドアの郵便受けに挟まれていた封筒だった。

差出人も住所も書いていない、まつ白な封筒に首をかしげながら、とりあえず一方通行はドアを開け自分の部屋に入る。

元々備え付けてあつた嫌に座り心地のいいソファに腰掛けると、無造作に封筒の口を破る。中からは手紙と思しき紙が一枚入つていた。

「さて、この一方通行サマに手紙なんぞア送つてくる奴は何処のどこつなんだか……」

一方通行は何の気なしに見た手紙に書かれていた名前に田が留まつた。

『力量変換』

「ハッ。よつよつてアイツかよ。いつの間に俺の住んでるマンション見つけて……」

一筆の野郎の差し金か？ と心底めんべくさうため息を吐く

と、その日に飛び込んできた力量変換以外の文字に目を見張る。

そして再び一方通行の居る部屋に沈黙が流れる。しかしそれは先ほどのようの一瞬では途切れず、破られたのは大分経つてからのことだった。

『午後1時。第11学区の資材置場にて待つ』

「はア？ なンだこりや」

あまりの簡潔さに一瞬頭が追いつかなかつた。というより、理解に苦しんだ。本当に力量変換の考えていることは分からぬ。だが、一応言われたとおりに行ってみることも、やぶやかさかではなかつた。

「ま、コツチの都合を考えてる辺り、アイツらしいのか？」

一方通行は首を鳴らしながらそつと言つと、持つていた手紙をテーブルの上に投げ捨てる。そしてそのままベッドに倒れこむと、静かに寝息をたて始めた。

頭の片隅に、果たし状みたいだな、といふ考えを抱きながら。

第1-8話 秒読み（後書き）

早っ。待たせてしまつた割りに短くてスイマセン。

次回こそ一方通行 vs 力量変換になるはず。すこく不安ですが、W  
これからもこんな自分ですがよろしくです。

誤字脱字の指摘、感想など、お待ちしております！

それでわノシ

第19話 最狂 vs 最凶（前書き）

大分遅れてしまい、申し訳ありませんでした！

歩く。

少女はヒタヒタと素足のままで、雨に打たれて冷え切ったアスファルトの上を歩いていた。その足取りはひどく静かに、足元で踏みしめる水音も聞こえて来はしない。

今の時刻は午後10時過ぎ。すでに学生達は帰宅する時間であり、学園都市に連なるビルの森林が色とりどりのネオンサインという花を咲かせていた。その思い思いに輝く光が、降り注ぐ雨に反射して夜の街を明るく染め上げる。

歩く。

溢れる光りで鏡のよつに照りついていた水溜りを、歩く少女の素足が踏みつけた。その瞬間に水溜りはピキピキと擦れるような音を静かに立たせ、少女がまた一步進めるために足を上げればそこには冷気を漂わせる薄氷に姿を変えた。

その様はまるで何かを抜き取られたかのように儚く、決して見ではならないような危うさを秘めていた。

歩く。

少女の体に当たる雨粒も例外ではなかつた。彼女の肌を濡らすことも叶わず、蒸発するかのように姿を消し去る。それはまるで、世界が彼女に干渉を拒むかのようだ。

やがて少女が歩き続けるにつれ、段々と足元を照らす輝きが減つていった。あんなに鮮やかに咲き乱れていた電飾の光も、今は粗末な街路灯の白く濁つた光りしか見当たらない。そしてその光も漬えてこの時間相応の、漆黒に抱かれた世界へと足を踏み入れる。

それはかつて獣が狩を行う時刻。爪が肉を引き裂き、狩られた者の鮮血を散らす時間。牙が喉元を搔き切り、狩られた者の死への恐怖が轟く空間。

しかし少女の心に怯えはなかつた。代わりに心に満ちているのは、この夜の色にも負けない程の、どす黒く薄汚れた欲望。

全を蹴散らし我を通す。そうして我を通さなければ、この我の中に渦巻く欲望に飲み込まれるだけ。そうなればもう助かりはしない。そこには、ただ突き進むだけの愚かな暴力を持った人形だけだ。助かる道は、元より他には存在しない。

助かるために足掻いて、それで誰かの悲しみが生まれることになつたとしても、それは甘んじて受け入れよう。

「ボクは、クレイドル 摆り籠なのだから」

そして、その少女の歩みが止まつた。先までの眩い光は遠くに退

き、ここにあるのは静かな沈黙と冷たい闇。後戻りなど赦されはない。

そして少女は、今まで死んでいたかのように静かだった息を大きく吸い込み、ゆっくりと吐き出す。少女の紅い瞳の色が、濃くなつていく。

「こんばんわ、アクセラレータ一方通行。」

少女はさも楽しそうに、友人の家に上がる時の子供のような声で、闇の虚空の中にそう呼びかけた。辺りの物に打ち付ける雨の音が、強くなつていく。

「つーかよオ、ここちは早く帰りてホンだ。雨が鬱陶しくて困つてんだよ」

その雨音を突き抜けて、重くのしかかる闇の中を搔き分けて、ひどく細身の少年が姿を現す。彼が着ている白と黒のTシャツは雨にぬれ、それが不快なのか深く眉間に皺シワが寄っていた。その目は少女と同じ紅色に染まり、少女の小柄な姿を射抜く。

「じめんね。この時間と場所じゃないと、頼めない事だったから

「だつたらサッサと言えや。あんな真似までしておいて、ショボい内容ならただじや済まねエぞ」

睨み付けるような視線が、変わらずに彼から少女に向けられている。しかしそんなことには慣れているのか、少女にはそれに対しても言わざる受け入れている。

少女は彼、一方通行の言葉を聞くと、ガクツとうなだれるように俯いた。この降りしきる雨の中で湿り気も帶びていない少女の前髪が、サラサラと重力に引かれて顔を隠すように垂れ下がる。

一方通行はその様子に訝しむと、雨に濡れて黒く光るアスファルトの上を歩いて少女に地近づいていく。少女は依然と黙つたままで、その拳は強く握り締められて震えていた。思わず首をかしげてしまった。

「オイオイ、まさか久々の再会でお涙頂戴つてか？『冗談じゃねエ、  
帰るぞ』

少女の様子を見てそんなに大した用事でもないと判断した一方通行は、これ以上ここに留まつている理由がないのでそのまま少女の横を通り過ぎた。少し先には、この資材置場を照らす外灯が一本立つていた。

「……『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画」

ぴたり、と一方通行の足取りが止まる。しかし彼は振り返らず、少女が不意に口にしたその単語を聞いた途端に口元を吊り上げた。

「一筆の野郎の仕業かア？ テメエが何を知ってるのか知らねエが、アレは俺の」

「……代わつて、欲しいな」

外灯の光がパチンと、何かが弾ける音と共に消えた。その音によつて一瞬紛れたかのように思えた雨音が、その隙間を埋めようとするかのようにつるさく鳴り響く。

一方通行の表情が、一転して深刻なものへと変わる。彼の心が苛つきはじめている兆候だった。しかし彼はそれでも振り向かず、構わずにして止めていた足を踏み出す。

その一歩が踏み込まれる瞬間、また少女の言葉が紡がれた。

「ボクね……もう、耐えられないよ」

それはひどく弱弱しい声。心を何度も何度も強く打ちつけられて、ボロ布のようになってしまった者から発せられる、救いを請う声。

「知ってる？ ボク、もう数えられないほどのヒートを殺したんだよ」

一方通行は再び足を止めた。何かに後ろから鎖で引っ張られるように止めた歩みは、足元の水溜りで小さな波紋を打つ。

「返り血で体が真っ赤になるまで殺したんだ。……でも、もう限界だよ？」

鼓膜の上で反響する雨音の中で、何かの足音がこちらに向かって近づいてくる。一方通行はそれに構わず、ただそこで立ち竦んでいた。彼の白い頭髪から滴り落ちた雨水が、足元のアスファルトに落ちていく。

不意に、背中に温かい感覚と共に何かがしがみつくような力が加わる。雨で冷え切っていた一方通行の体にとつて、その温かさは軽い火傷をしそうだと思うほどに熱い。

腰に回された腕に入る力が、線が細い彼を締め上げるようにして

強くなつた。かすかに、嗚咽のよつた音も聞こえてくる。

「助けてよ……。ボクを、私を、置いて、いかないで……。一人に、しないで……」

背中で始まつた、小さな独白。

彼が腰に絡みつく少女を振りほどこうと思えば、いつどのタイミングでも行える。でも、一方通行はそのような素振りは見せず、静かにその少女の告白に耳を傾けていた。

やがて言葉はなくなり、少女の静かな嗚咽と背中から感じる熱いほどの体温だけが残つた。雨ですっかり濡れてしまつた白い髪を、一方通行は片手でクシャリとかき混ぜるよつてにして搔く。

「ツたくよオ、俺はテメエのお守りを任せた覚えはねーんだ。俺には関係ねエ」

そして大げさに溜息を吐くと、腰に回されていた少女の細い腕を振り解く。少女の小さい悲鳴と共に、その体が固く冷たいアスファルトの上に転がつた。

後ろで座り込んだまま俯く少女の顔色が絶望の色に染まつっていく。頬に伝うものは、決してこの雨のものではないだろう。瞳いっぱいに溜まつたそれが、一つ、また一つと筋を増やしていく。

それを見ることもなく、一方通行は歩き出した。今度は止まる様子はなくしつかりとした足取りで、少女にとつては残酷なまでにはつきりと歩いていた。アスファルトに広がる雨水を踏みしめる音が、段々と少女の下から遠ざかっていく。

(クソガ)

一方通行は歩きながら苛立ちを隠せないでいた。その矛先は先の少女へではなく、自分自身に對して向けられている。

今まで背中で鳴き続けていた少女、力量変換を巻き込ませないためにしたことの筈なのに。現に今、彼女は「辛い」と泣いていた。今の自分が関わっているこの計画クレイデルが本来、彼女に課せられると知つた時に連想した一番見たくない結果。

「のままでは彼女の心はそう長くはもたないかもしない、それを今までもと見せ付けられた。どれもこれも全て自分が引き起した結果だ、と一方通行は自分に言い聞かせる。

早く自分はこのクソみたいな計画を終わらせ、誰もが挑むことも諦める『最強』へと昇華でなければならぬ。そうすれば、今泣いている彼女を守りきることが出来る。

もう一度と、あんな表情を見なくていいように。

「サッサと帰つて寝るか」

一方通行がそう呴き始めたとき、突然何かが爆ぜるような音が鳴り響いた。その爆裂音の元凶によつて飛ばされてきたのか、長さ1.5mほどの鉄骨の束が一方通行の頭の上に降り注ぐ。

そしてその一本が彼の頭に直撃した。しかしそれはくの字にグニヤリと折れ曲がると、失つた勢いのままゆっくりと横に倒れ、アスファルトにぶつかる甲高い金属音が鼓膜を打ちつけた。

「あアン?」

一方通行が怪訝そうに今まで振り返ることはなかつた後ろを振り返る。外灯はすでに消えてしまつてゐるため、距離が遠くなるにつれ黒く塗りつぶされていて様子を窺いることは出来ない。

それでも目を凝らして先を見ようとすると、再びあの爆裂音が鳴り響く。地響きと共に鳴り渡つたそれは、今度は一方通行の頭上に複数のコンテナを降らせた。

貨物列車によく積まれてゐる長方形のコンテナは、資材置場のアスファルトを抉つて落下した。その上にも別のコンテナが激突し、金属同士の激しくぶつかり合つ音と鉄板がへこむ音が大気を震わす。

狙いは大雑把なのか、それとも狙つてさえいなかつたのか、コンテナは一方通行にぶつかることはなかつた。でも、これで彼にとつては分かつたことが一つだけあつた。

「オイオイ、無視されたからつて癪癪おこしてんじゃねエよ。本当にガキだな」

十数本の鉄骨やコンテナを空中に放りだすほどのことを『癪癪』で済ませられるのは彼くらいだろう。それはこの学園都市におけるLevel 5の能力の異常性を示していた。

そして、この『癪癪』を起こした本人がゆつくりと塗りつぶされた闇の中から姿を現す。その紅い瞳は爛々と燃えるように輝いて、いつの間にか濡れた黒い髪の毛がカラスの羽を連想させる。すでに、嗚咽は止まつていた。

代わりにあつたのは、冷え切つた表情と冷え切つた視線。そして、背中から伸びる長大な6枚の黒い翼だった。

夜の暗闇でも視認できるほどの中、何物にも染まることはない漆黒。光さえ反射しないその翼は普段より荒々しくなびいていた。翼からあふれ出す羽がアスファルトの上に舞い落ち、その場所を溶かしていく。

「ボクはお前を全力で殺す。寸々（ずたずた）にして殺す。粉々（ばらばら）にして殺す」

雨が強く降り注ぐ。しかしそれはこの場にいる一人を濡らすことは叶わなかつた。片ほうには弾き飛ばされ、片方には音もなく消失飛ばされる。

少女の体がゆっくりと上昇し、やがて地面から10㍍ほどの中まで停止した。それに合わせて6枚の黒い翼も大きくなり、そこから降り注ぐ羽も格段に量を増す。すでにアスファルトはその下にある地面の部分を露呈し、ボロボロの状態だつた。

「そして、ボクが最強になるんだ」

少女の右腕が一方通行に向けられる。その右腕に絡みつくよう、元の少女の体から滲み出た黒い煙のようなものがゆっくりと集まつていいく。

「あア そうか。ガキはガキなりに考えたわけだ」

その禍々しい様子に特に注意するでもなく、一方通行はそう呟い

た。恐らくこれは彼女にとつて最初で最後の、助けを求める信号。  
誰が吹き込んだかは大体予想は付くが、今はそのことは後回しだ。

「遊んでやるよ。来い、力量変換！」<sup>クレイドル</sup>

刹那、資材置場から稻妻の如き轟音と、雨雲を貫く黒い柱が立ち上がった。

## 第19話 最狂 vs 最凶（後書き）

覚えている方いらっしゃいますかね。実はとあるの一次創作も書いていた玉露飴です。

ようやく力量変換 vs 一方通行の戦闘開始。ああ、早く力量変換と工場長……じゃない、垣根提督との戦闘が書きたい。未元力量<sup>ダーカエネルギー</sup> vs 未元物質。いつの日になることやら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6290n/>

---

とある科学の力量変換（クレイドル）

2011年3月22日19時21分発行